

超わくわく姉妹!

COSMIC PRINCESS KAGUYA



原作

スタジオコロロド
スタジオコロロド

著

桐山なると

口絵・本文イラスト

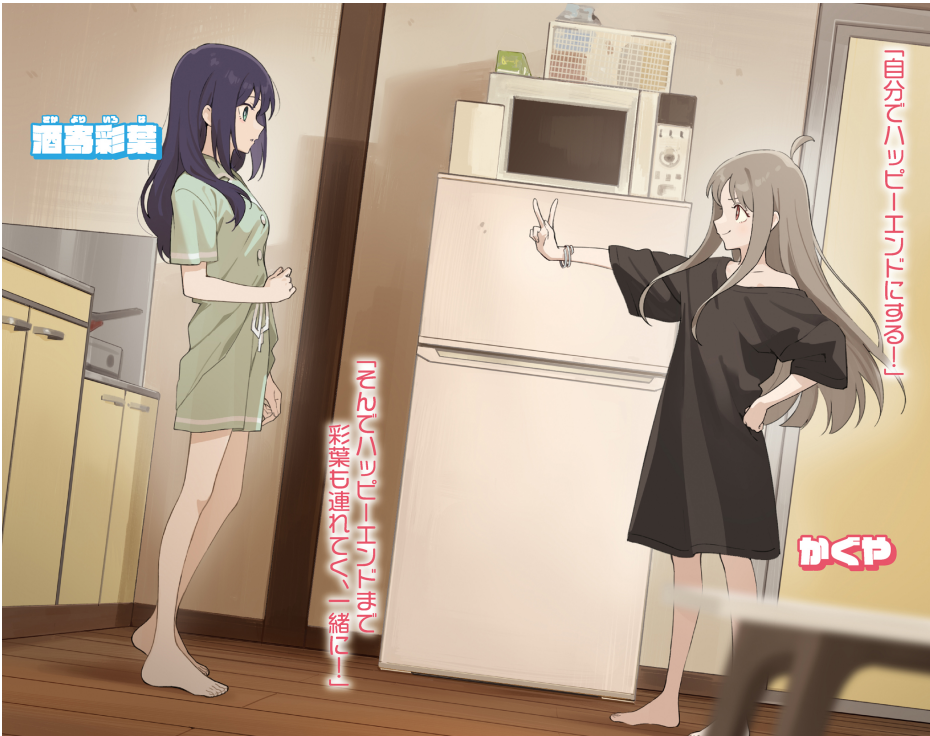
うらたあさお

ファミ通文庫



原作
スタジオオコロマド
著
桐山なると
口絵 本文イラスト
つたあなお

ファミ通文庫





「あたはいつでも勝手にー」

酒高彩葉

かくや

「いんやがさや「カミ」で勝てるー！
さあ！総攻「リボ」に「イン」のー！」

「……すてえん」

月見ヤサヨ

超かぐや姫！

原作:スタジオクロマト・スタジオコロリド

著:桐山なると

FB
ファミ通文庫

本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本電子書籍は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



CONTENTS

序章	一章	二章	三章	四章	五章	終章	続・終章	新・終章
----	----	----	----	----	----	----	------	------



序章

—今は昔……。

「彩葉！」
いろは

悲鳴にも似た声が鼓膜こまくを打った。

振り向くと、崖を割った小道から鎧武者よろいむしやの一団ときが関との声を挙げて溢れ出す。

その数は百か、二百か。

どっちにしろ、物の数ではない。

—では、なくて。

フルパワーでブレードを投げ放つ。唸^{うな}りを上げて回転する刃が空を滑り、鎧武者を一網打尽に切り裂いて、光の粒子へと変えた。

――超未来だったり。

「おああ、やばいやばい！」

休む間もなく、また別の声がイヤホンから流れ込んでくる。

オーケー。もちろん、気付いている。竹林で隠したつもりだろうが隙間に覗くジャンプのエフエクトを見逃したりはしない。

上だ。手首が捻^{ねじ}れるほどコントローラーを傾けた。

――いやいや、大昔でも超未来でもなくて。

――今とあんまり変わらない、少しだけ未来の世界。

腕から迸^{ほとばし}った光の糸が敵を捕らえる。空中で敵を花火に変えた。

勝った。チェックメイトは味方に任せる。椅子の上で胡坐^{あぐら}を崩して顎^{あご}の汗をぬぐった。目を開けると、いつの間に日が暮れたのか部屋はもう真っ暗だ。

―ゲームしている普通の女子高生ありけり。

窓ガラスに映った私の顔は瞳が怪しくオレンジ色に輝き、さながら宇宙人のように見えた。



一章

「彩葉のエイム、すっげー」

「完璧プロじゃん、プロ！」

いえーい。

チームメイトのボイスチャットに控え目に言葉を返した。一応、年単位でやりこんでいるゲームなのでこれくらいは出来て当然、そんな自負を言外に込めてみる。

「……まあまあ、二人のおかげですよっ」

が、やっぱり賞賛の声は素直に嬉しかったりして。

最後のエイムは我ながら痺れる切れ味だった。水を飲む手が震えて、グラスの縁がカチカチと前歯に当たっているのは内緒である。

『KASSEN』。

ここ数年のゲーム業界を席卷している、戦国時代の合戦をモデルにしたフルダイブ型アクションゲーム。まるで本当に戦のただ中にいるような三百六十度の視界と音声による没入感と、高度な操作性・戦略性を併せ持つ文句なしの神ゲーだ。プレイヤー数は国内外合わせてぶっちぎりのナンバーワンを誇り、『KASSEN』専門のプロプレイヤーも数多く存在する。私の腕前といえば、まあ中の上ってところ。

「ねえねえ、マジで目指しちやいなよ、プロ」

「絶対いけるって！」

「あー、いやー」

……ないない。

その道はとっくの昔に断っている。差し当たって今の私がすべきことは、

——ピー、ピー、ピー。

「いつけない、バイトの時間だ！ ごめん、落ちるね。また学校で」

アラームの音に弾かれたように立ち上がった。最速で接続を切り、ほの仄かに熱を発しているコンパクトレンズ型デバイス・通称『スマコン』を眼球から外す。

ああ、今日は木曜日だった。

視界と共に思考も現実に戻ってきた。私が週五で働く住宅街の隠れ家カフェ、BAMBOOCafeはどういうわけか週末よりも木曜日の方が客で賑わう。思わず机の端に並んだエナジードリンクに手が伸びるが、

——パスタ四食分につきムダ飲みは不可！

自分で書いた張り紙に平手打ちを食らって引っ込めた。アルバイトと僅かな仕送りで学費と生活費を賄う苦学生、もとい苦高校生に無駄遣いは厳禁なのだ。

「……行ってきます、ヤチヨ」

私は本棚の上に鎮座^{ちんざ}するもう一つのエナジードリンクこと、ヤチヨの神棚アクリルスタンドにそう告げてバタバタと一人暮らしのアパートを出た。

勝利の後の美酒すら嗜^{たしな}むことができない苦高校生の移動手段は徒歩しかない。ドアトゥドアで十五分の道のりを十分に踏破してBAMBOOCafeの自動ドアを抜ければ、

「何でハンバーグが冷たいの！」

「ねえ、注文まだー？」

「おいおい、どうなってるんだよ！」

「す、す、すみませーん！」

……うわあ、こっちも合戦じゃん。よし、行きますか。

「おはようございます！」

昼でも夜でも変わらない飲食店の挨拶と共にスタッフルームへ、三十秒で着替えを済ませて戦場に飛び込んだ。

「店長、新しいハンバーグ、オーブンに入れてるんであとお願いします」

「助かる、酒寄さん！^{さかより}」

「林田さん^{はやしだ}、こっち私が下げますんで八番テーブルの注文お願いしていいですか」

「頼むわ、酒寄さん。マジ神！」

「で、みおちゃんはどうしたの？」

「酒寄せんぱーい！」

「どうもこうもないよ！」

汗だくで立ち竦^{たすく}む後輩バイトのみおちゃんと、なぜかみおちゃん以上にびしょ濡れなお客さんが同時にこちらを振り返る。

「水ちようだいって言ったら、この店員さんにピッチャー一杯分ぶっかけられたんだけど」

「……ピッチャー一杯？」

「ごごご、ごめんなさい！ お水運ぼうとして躓^{つまず}いちゃって」

あー、なるほど。よし、こんな時は。

「一緒に謝りましょう。大変申し訳ございませんでしたっ！」

今日もBAMBOO cafeは通常運転である。

「休憩入りまーす」

嵐のようなピークタイムを何とかかんとか乗り越えて、へろへろでスタッフルームへ引っ込み、ヤチヨの配信の切り抜きを開こうとすると、

「先輩、さっきはごめんなさい！」

先に休憩を取っていたみおちゃんが入れ替わりで立ち上がった。先月入ったばかりの東みおあずまさんはやる気はあるがそのやる気に技術面がついていかないようで、思わず笑ってしまうような微笑ましいものから、顔面蒼白になるような重大事件まで、毎日幅広くミスを繰り返してくる。

「本当に、本つつっ当にごめんなさい！ あたし、あたし、ドジで。すみません、ハズレの新人の教育係させちゃって」

「やや、可愛い後輩のフォローができるなんて先輩みょーりに尽きるってやつですよ」

「うう……神。もう神です。先輩って何で怒らないんですか？ もしかして、怒るほどの価値もないヤツとか思われてますう？」

そんなわけないでしょう。どんだけやなヤツなの私。

「頭こごなしに怒られたら、できることもできなくなっちゃうと思うから。それに、みおちゃん覚えはいいと思うよ。さっきも団体さんの注文全部捌さばいてくれて助かった」

「本当にそう思ってます？ 気遣ってませんくくく？」

「ないない」

「よかった。じゃあ、休憩明けも頑張ります！」

そう言って、スタッフルームから元気に飛び出していくみおちゃん。さっそく廊下で元気に何かに躓いている音が聞こえたけれど、ここはみおちゃんを信じよう。

「……ふう」

息をついて、パイプ椅子の背もたれに体重を預けた。

しばし、目のピントを緩め、壁に貼られた『手洗い励行！』のポスターを見るともなしに眺める。そこから視線は隣に滑り、『酒類販売の注意事項』、『制服の正しい着方』と流れ、

「もう七月か……」

最後にカレンダーに行き着いた。

「七……十四、二十……三？」

カレンダーを見ると無意識に給料日まで何日あるか数えてしまう。そこから逆算して一日何円使えるかを弾き出すまでが上京して一年で身についた悲しい性^{さが}だった。

よし、今月も何とかなりそうだ。一本くらいならエナジードリンク飲んでもよかったかな……いや、ダメだ。女子高生の東京一人暮らし、何が起きたって不思議はない。万一に備えてお金は無理をしてでも貯めておきたい。

——今日の百円は明日の千円や。明日の自分に恨まれるで。

悔しいが母の言ったことは真実だった。お金に関することだけじゃない。母の言うことは常に正しい。冷酷なほど正しくて、無慈悲なほど理にかなっていて、目を背けたくなるほど経験に裏打ちされている。

だから、私は耐え切れずに家を飛び出した。

中学三年生の冬、何度目かの衝突の後にかねてから計画していた上京を決心し、学費や生活費の全てを自分で賄^{まかな}うことを条件に半ば家出同然に故郷を出た。多分、自由になれたのだと思う。でも、

——今でも彩葉はすぐに泣いて帰ってくると思ってます、甘ちゃんやから。

母の言葉は、どれだけ遠くに離れていても折に触れて耳に届いた。まるですぐ隣に立っているかのように鮮明に。

「……大切な——メロディは——流れてるよ——あなたのハートに」

無意識にヤチヨの歌を口ずさんでいた。ヤチヨの一番好きな曲。私は鞆のサイドポケットからイヤホンを引っ張り出して曲の続きに飛び込んだ。優しい歌声に撫でられて、やっと少しだけ力が抜ける。

電子音を突き抜けて、またホールの方からみおちゃんの謝る声が聞こえてくる。休憩が明ければまた戦いが始まるだろう。

※

「あ、彩葉来た」

「おはー」

翌朝、いつもの通学路のいつもの場所で芦花ろかと真実まみに合流した。会うのは昨日のゲーム以来。仮想空間のアバターも凝っていてオシャレだけど、現実の二人は輪をかけて魅力的だ。日陰で待っているのにそだけ別の光が差しているみたい。

「昨日、バイト間に合った？」

「目のくまずごいよ。ちゃんと寝たのー？」

「寝たってー」

「彩葉の『寝た』は、どうせ三時間とかっしょ」

眉をハの字に寄せた芦花から、すかさずツツコミが入る。心配させまいとした省略も、さすがの芦花さんにはお見通しか。

「実質徹夜じゃん」。聞いているだけでねむー」

真実は本当に眠くなってきたのか、まったりとあくびをした。じっと見てるとこっちまで睡魔に襲われるので要注意。

「何してたん？ バイト？」

「ううん、予習と復習。もうすぐ期末試験だから」

「彩葉なら今のままでも余裕で一位でしょ」

「そーゆー油断がいけないの。隙を見せたらいつでも背中から撃たれる世界なんだから」

いかん、思わずお母さん語録が出てしまった。

「それ、”お母さん語録”だね？」

はい、そうです。見透かされちゃいましたというトホホな表情を作ると、真実はドヤ顔で肩に手を置いて頷いてきた。なんなんだ。

「彩葉はいつでも『K A S S E N』気分だからなー」

芦花のおっしゃる通り、私の合戦はゲームを閉じてでもB A M B O O c a f eを退店してもまだ終わらない。むしろ、ここからが本番だ。一年の一学期から続く学年トップの座を、命を懸けてでも死守せねば。いや、試験の成績だけじゃない。

「あ、酒寄さんだ。おはよー」

「ささ、酒寄先輩！ おはようございます！」

「酒寄さん、おはようございます。この前は助かりましたよ」

あ、みなさん、おはようございまーす。

「酒寄さん、今日もキレー」

「やっべ、俺、酒寄先輩に挨拶しちゃったよ！」

「いいなー、お前」

品行方正、成績優秀、文武両道。隙のない完璧女子高生を貫いて初めて、私は前を向けるんだ。

——無理は怠けモンの言い訳や。私は私が出来たことしか言うてへんよ。

ここまでやって初めて、私は私の遙か先に行く母の後ろ姿を捉えることが出来るのだ。

まあ、どこまで貫き通せたとしても、母が私を褒めてくれることは決してないのだけど。いつからだろう。母が私を褒めなくなったのは。

あれは確か――。

えっと確か――。

確か――。

「では、ここわかりますか？　今日は六日だから……酒寄さん」

「はい！」

不意打ちで先生に名前を呼ばれて意識が急降下で戻ってきた。

ヤバイ、どこだ、ここ？　言ってるそばから油断した。体育終わりの六時間目の古文は睡魔の戦いと知っていたのに。

それでも――。

「ここでの『なりぬ』は、動詞『なる』の連用形と、完了の助動詞『ぬ』の組み合わせです」

「おー、すげー」

「さすが酒寄さん」

「すごすぎて何言ってるか、わかんなかったー」

完璧女子高生、酒寄彩葉はしくじらないのである。

あつぶねー。

※

「それじゃあ、お先ですー」

「すみません、先輩！　今日もドジばかりで。ほんつとごめんなさい！」

「大丈夫だって。みおちゃんどんどんミス減ってるから。それじゃあ、お疲れ様です」

今日も今日とて、注文という名の弾丸飛び交うアルバイト先から命からがら生還した。前述の通りBAMBOO cafeはなぜか木曜日が最も繁盛するけれど、金曜は金曜で普通に混む……今日は、うん、ちょっと疲れたかな。でも……。

「へへへ……三連休がついにやってまいりやした。超久しぶりに一日六時間は寝れる」

いつもなら大股の早足で突っ切る道を、今日は足のサイズの半分の歩幅でとぼとぼ歩く。見上げると、ビルの上に浮かぶ満月が、別世界の覗き穴のように夜空を丸く切り抜いていた。

近頃、月を見上げることが多くなった気がする。実家にいた時は気にもしなかったのに。これはどういう精神の作用なのだろう。

綺麗だな……。

なんだか、また母の声が聞こえてきそうになったので、慌ててイヤホンを耳に突っ込んだ。音楽が必要だ。曲はもちろんヤチヨの——そうだな、『Remember』にしようかな。

耳に馴染んだイントロが流れ込んできた。心がふわりと浮き上がる。張り詰めていた糸が一本一本解される。これで三分五十三秒の幸せは約束される。何度聞いても色褪せない私の推し、ヤチヨのデビュー曲だ。

Aーライバー、ヤチヨ。突如として現れた謎の歌姫は、私の世界を文字通り根本からひっくり返した。仮想空間『ツクヨミ』の管理人兼、チュートリアル及び各所のナビを担当する傍ら、ツ

クヨミの看板として定期的にライブ配信も行うアーティストで、年齢は八千歳。

ぶっ飛んだ設定のキャラクターだが、その正体は誰も知らない。自らをAーと公言するものの、製作者やデザイナー、モデレーターは一切不明。複数企業の合作説や、海外の国家プロジェクト説、はては電子の幽霊説など数多の噂が週替わりで囁かれるが、泡のように無軌道に湧いてくるといふ事実そのものが、皮肉にも全ての信憑性を否定していた。

私としては、それが企業であっても国家であっても幽霊であつたとしても、ヤチヨという尊い推しを同じ時代に産んでくれたことに感謝するのみだ。誇張でも何でもなく、私はヤチヨに救われた。追いつめられ、前にも後ろにも右にも左にも進めなくなった私に、ヤチヨは歌で翼をくれ、飛べばいいんだよと教えてくれたのだ。ちょうど今聞いているこの曲で。

「……大切なメロディは――流れてるよ――あなたのハートに――」

ヤチヨに支えられて日々を送れている。ヤチヨの配信を見れば笑えるし、歌を聞けば落ち着くし、チャットの相談アプリで誰にも言えない悩みを吐露したことも数知れず。配信のある日はそれを見て、ない日は過去の配信や切り抜きを見る。食欲のない日でもヤチヨの配信を見れば少しずつでも食べることができた。ライブはチケットが取れなくてもできるだけ良い場所での姿を目に焼き付けて、瞼の裏に浮かんでくる嫌な記憶を心底楽しそうなヤチヨで上書きして眠りにつく。バイトや学校に足が進まないときも歌を聴けば自然と歩み出せた。生きてても良いのだと思えた。ヤチヨは、私を責めない。急かさない。でも、いつも傍にいてくれる。下手すれば“人”

より優しい。ヤチヨがいなかったら、どうやって生きていけば良いんだろう。生きていかなきゃならないのはわかってる。けれど――

不意に涙が込み上げてきた。やっぱり、今日の私はちよつと疲れているようだ。見上げた月の輪郭が滲^{にじ}んで歪^{ゆが}んで、

「――っ」

ん、なんだ、あれ？ 何かが月を横切った。一瞬だけ、ほんの小さな――

「流れ星！」

「流れ星だ」

……え？

周りの声に弾かれるように手を合わせた。

――神頼みするやつは阿呆^{あほう}や。

また、母の声が聞こえてきたけれど、願わずにはいられなかった。神様、仏様、どうかどうか。

「か、金……」

マジか、私。言うに事欠いて何て女子高生らしくない願いを。つまんねーやつすぎる。

やっぱり、私は疲れているらしい。自嘲的な笑みを己に向けて、私はまたとぼとぼと帰路に付いた。その足が向く先と今しがた流れ星の落ちた先が、ちょうど同じ方角だと気付くのは、

「……は？」

ようやく帰り着いたアパートのすぐの横の電柱が、七色に光っているのを発見した時だった。七色といえば……。

「ゲーミング……電柱……？」

ゲーミング電柱。意味不明な響きだ。だが、そうとしか言いようがない。後ずさった靴裏がずずずとアスファルトを引っ掻いた。

待て待て、なんだこれ。どういう現象だ。どう見ても普通の電信柱がゲーミングカラーに発光している。行きしなにはこんなことなかったよね。一応、自分の瞼に触れてみる。なるほどなるほど、スマコンは装着していないか。だとすると……。

「ふっ、なんだ、幻覚か」

立ち去ろうとすると電柱がスモークを吐き出した。まるで私を呼び止めようとするかのよう

に。
……勘弁してよ。

衝撃で忘れていた疲労が倍付けで乗ってきた。これはマズいぞ。これがもし現実なのだとしたら非常に厄介なことになる。

どういう原理で電柱が光っているのとか、どこからスモークが出ているのとか、流れ星が誰の願いを叶えたらこうなるのとか思うことは色々あるけれど、一番の疑問は。

「なんで、ここなの？」

——だ。

正直、電柱が光っていいようが、踊っていいようが、歌っていいようがどうでもいい。世の中はおめでたい電柱もあるもんだ、で済む話なのだ。

この電柱でなければ。私の住むアパートの真隣にある、この電柱でなければ。

七色に発光し機を見てスモークを吐き出すゲーミング電柱。こんな^{どきゅう}弩級の超常現象を傍らに置きながら、安らかに三連休を過ごせるほど私は豪胆に出来ていない。

しかし、今すぐにでも何とかしてほしいけれど、悲しいかな家賃月三万八千円保証人なしのアパートには電話一本で駆けつけてくる大家など存在しない。かといって、周りから何事ぞと飛び出してくる隣人もいない。つまり、光る電柱が気に入らなければ、私が自分で処理するしかない状況なのだ。

……くそう、背に腹は代えられぬ。

覚悟を決めて一步を踏み出した。さらに一步、もう一步。

まるで私を誘うように七色の光は淡く^{またた}瞬く。なぜ、電柱が光るのか。それはいったん考えないことにしよう。実際に光っているから光るんだ、もうそれでいい。だから、電柱の真ん中に突然

扉のような切れ目が入っても、どうしてなんて聞きはしない。そして、その扉に竹をモチーフにした取っ手が生えても、いつの間になんて言いはしない。さらに、扉が中から押されるように徐々に徐々に観音開きに開いても――。

「いや、開くな！」

咄嗟とっさに手で押し込んで扉を閉めた。

いや、開くのはだめだろう。開くのは聞いていない。光ると開くでは大違いだ。

でも――。

「ぐおっ、うっ、力づくかい」

押し返される。力つよっ。そうなのだ。完璧女子高生酒寄彩葉、実は筋トレだけは抜かっていた。なすすべなくばいーんと開かれた扉の中には……ベビーベッド？

ふりふりのクッションとピンクのガラガラ、クルクルと回る小さなメリーゴーランドの玩具おもちゃ、そして、それらベビー用品の主たるぬし、

「ふえ……ふえ……」

「あ、赤ちゃん？」

――今は昔……ではなくて。

――今とあんまり変わらない、少しだけ未来の世界。

―ゲームしている普通の女子高生ありけり。

―名をば、酒寄彩葉となむいいける。

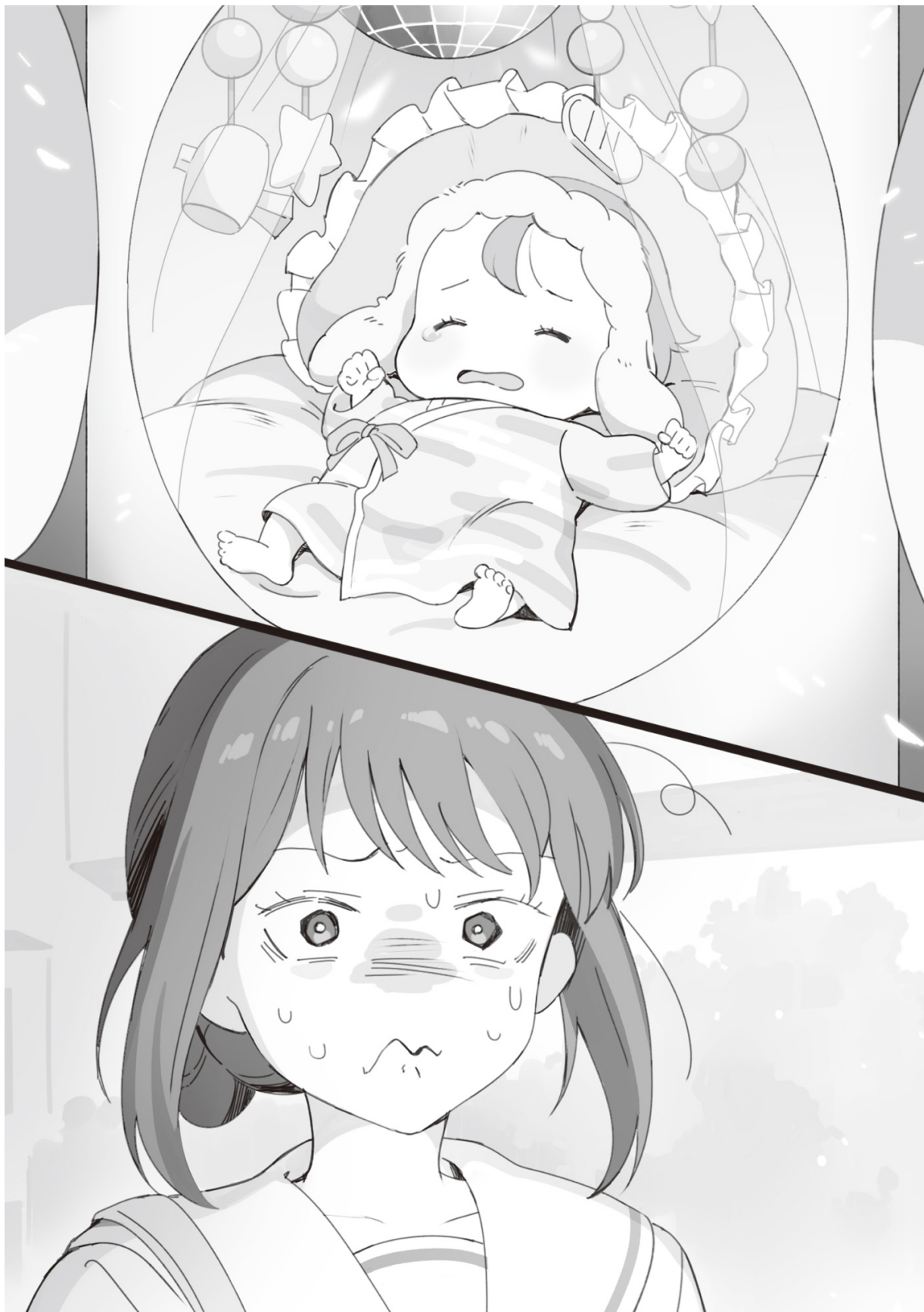
―彩葉って呼ぶべし♪

―彩葉が家につくと、なんと、もと七色に光るゲーミング電柱なむ一筋ありける。

―あやしがりて寄りて見るに、電柱の中光りたり。

―それで彩葉はこう言ったの。

「ん？：？：？：？：？」



「ふえっ……」

何これ？ いったい何が起きているの？

頭が現実について行かない。落ち着け、冷静になって一から状況を整理しよう。どこから始まった、この異常事態は。

まず、バイトの帰りに流れ星を見た。ここまではいい。そしたら、電柱が光っていて、電柱がスモークを吐いて、電柱が開いて、中から赤ちゃんが登場した。

多いうて。誰の願いを何人分叶えたらこうなるの。

「ふえっ、ふえっ」

しかも、この赤ちゃんは生きている。人形やCGではなく、生きて呼吸をして円らな瞳でじっと私を見つめている。まるで、何かを訴えかけるかのように。

『……開けたよね？』

開けてないから。そっちが勝手に開いただけでしょ。

『……でも、触ったもんね？』

だから、何？ 触ったから何？

『……気になってるでしょ？』

それは、正直なっではいるけど。でも……。

「すまん！ しかし、私手一杯ですので、失礼いたします！」

後ろ髪をござり丸ごと引き抜かれる思いでその場を後に、

——もう、どうなってもいいんだあ！ ひっく。

——ガシャーン。

——あおーん。

——キキーツ。

しようとする、酔っ払いの叫び声とガラスの割れる音と野良犬の遠吠えと車の乱暴なブレーキ音が矢継ぎ早に聞こえて来た。

急に治安が悪くなったな。こんな町だったっけ。でも、さすがにここに放置は危険かも。せめて警察に届けるか。

「どう持つんだ、これ」

恐る恐る、赤ちゃんを電柱の中から抱き上げた。

軽い。柔らかいとか温かいとか、そんな感想よりもまず身体の軽さに驚いた。まるで、丸めただけのタオルを抱えているように手応えがない。少しでも力を込めれば何の抵抗もなく潰れてしまいうだ。

だめだ。本能的に確信した。こんな弱い生き物をそこらに捨てて行くわけにはいかない。法律とか倫理とか、そんなもの以前に人類共通の考えとして絶対に不可だ。

しかし、ゲーミング電柱としては人類とは考え方が根本的に違うようで、「じゃあ任せましたよ」言わんばかりに消灯し、取っ手も扉も消え失せて、あっという間に元の物言わぬ電柱に戻ってしまった。

嘘でしょ。ちょ、待てよ。

「すみません。お忘れ物ですよ！」

と言って電柱を叩いてみても、こっちはこっちで固いだけで手応えがない。やられた。深夜の路上、私は電柱の前で赤ちゃんを抱いて立ちつくす。

「この状況じゃ、私が攫^{さら}ったみたいでは？」

腕の中の赤ちゃんがどすんと重くなった気がした。見下ろせば柔らかかそうなホッペを精一杯持ち上げて無邪気な笑顔を浮かべてみせる。

「たい♡」

「無理無理無理無理！」

だからって、無理。私には絶対に無理。やっぱり、いったんここに置いて……いや、だめだ。路上に放置はあり得ない。じゃあ、自販機の上……も危ないし。いったい、この子をどうすれば？

そんな私の逡巡しゅんじゆんを見抜いたかのように、

「ふええええええええええええええええ！」

赤ん坊が伝家の宝刀を引き抜いた。ド深夜の住宅街に容赦のない泣き声ようしやが響く。

「ああ、もう！」

人目に付きたくない一心で、泣き叫ぶ赤ちゃんを抱いたままアパートの階段を駆け上がった。幸運にも誰ともすれ違うことなく部屋まで行き着き、鍵をかけて一安心。

じゃない！　なんで持って帰ってきちゃった、私。これで完全に誘拐ゆうかいが成立したじゃないか。マズいぞ、明らかに疲労で頭が回っていない。

「えええええええん！」

その間も小さな猛獣は黙っていない。満身の不満を、己に許された唯一可能な方法で訴え続け――どんっ！

と、お隣さんからの壁への一撃を招いた。

「か、壁ドン……初めてされた」

シヨックなんですけど。いや、無理もないか。この時間だ。

「ふやああああ」

「ああ、怖くない怖くないよー。ほら、べろべろべろー」

完璧女子高生酒寄彩葉、筋トレ以外に出来ないことがもう一つあった。赤ちゃんを泣き止ませることだ。見よう見まねで必死にあやしてみるものの。

「ふやあああああ！」——どんっ、どんっ、どんっ！

泣き声も壁ドンも止まらない。どうしよう、藁わらにも縋すがる思いでスマートフォンスマートフォンの画面を擦った。

『赤ちゃん　泣き止ませる方法』、世のママさんの悩みは同じようで凄まじい件数がヒットする。

「えーっと……『抱っこ』は、もうしてるし、『縦抱き』もしてるよね。『横揺れ』もしてるし、『抱っこ歩き』もしてるから、後は……」

定番の子守唄か。よし、思い出せ、母が泣いている私に歌って聞かせてくれた子守唄。子守唄は、

——泣くな。泣くんは樂をしてるだけや。

——ホンマに悲しいなら呑氣のんきに泣いとらんと同じ事が起きんように考えなさい。

記憶にございません。お説教しか出てこない。頭を抱えかけたその瞬間、

「……あ」

目に入っただのは勉強机の正面に鎮座ちんざするヤチヨの神棚アクリルスタンド。一瞬、頭の中のモヤモヤが晴れた気がした。

「大切なメロディは――流れてるよ――あなたのハートに――」

『Remember』。一番も歌い終わらない間に赤ちゃんは寝息を立てていた。

「ヤチヨパワー、すげー」

慎重に慎重に赤ちゃんを布団に横たえた。息を止めて一ミリずつ手を引き抜く。よし、全部抜けた。十秒待つ、それでも目を覚ます気配はなかった。

「……よかったあ」

成功だ。ふにゃふにゃと身体力が抜けていった。これで壁ドンも止むだろう。一安心だ。でも、これどうしよう。やっぱり、警察かな。

生まれて初めてスマートフォンで110をタップする。通話のアイコンに触れ、コール音を聞きながら頭の中で通報の文言を整理した。ここは細心の注意を払わねば。言葉一つ間違えれば私が誘拐したと思われかねない。

『事件です』……は、だめか。『七色に輝く電柱からですね、子供が出てきて』……だめすぎる、もうちょっと現実的に。『赤ちゃんがですね、泣いていたんで取りあえず家まで連れ帰って』……捕まる捕まる。もう、わけわかんない。私自身がわからないことをどうやって説明すればいいのだろう。

「立川警察です。事件ですか？ 事故ですか？」

「あ、大丈夫です！　今、大丈夫になりました！　すみません、ありがとうございます！」
警察に、大丈夫なことだけ伝えて切るといふ謎の電話をかけてしまった。

……ごめんなさい、お巡りさん。もう無理だ。もう疲れた。

せっかく今日は六時間も眠れる日だったのに。

・
・
・

遠くからキジバトの鳴く声が聞こえて来た。それを追い立てるように新聞配達バイクが通り過ぎて行く。カーテンを薄く開くと、生まれたての朝日が元気いっぱい差し込んで来た。

……寝れたな、六時間。

いつの間にか寝落ちしていたらしい。昨日の出来事はいったい何だったんだろう。

「幻覚……じゃ、ないよね」

その証拠に電柱生まれの赤ちゃんが、私の隣ですやすやと寝息を立てている。

どうやら夜泣きはしなかったらしい。寝た子は天使とはよく言ったものだ。昨日、あれだけ手を焼かされた赤ちゃんなのに、朝日を浴びてキラキラと産毛の光る頬を見ると、ついつい撫でやりたくなる。

てか、こんなでかかったっけ？　おかしいな。昨日は片腕でも軽々と持てたサイズだったのに。ずっとつけているブレスレットもこんなに大きくなかったような。

「あっ！ 濡れてる！ マジか！」

大きさを図ろうとして布団に手を突くと、手のひら掌に不快な湿り気が伝わった。

やられたか。まあ、赤ちゃんだもんね、しょうがないか。そんな義理もないけれど、オムツくらいは替えてやろう。いや、それなら服も着替えさせないといけないか。それから、何か身体を包むもの。あと、身体を拭く物とミルクと哺乳瓶と抱っこ紐っていうんだっけ？ それから……。

「え、多くない？」

必要な物を指折り数えていたら、すぐに指が足りなくなった。

開店時間を待って飛び込んだのは、『子育ての味方』のキャッチコピーでお馴染み子供用品専門店の西竹屋。ネットで調べてみたところ、この一店で赤ちゃん用品の全てが揃うらしい。もちろん、お金を払えばだけど。

「無理無理無理無理！」

通路で思わず悲鳴を上げた。

オムツ高っ！ しかも何か種類が多いし。安いやつと高いやつ、どちらかを選べと言われたら……そりゃ、質が良いのを選びたいじゃん。子供服だって私にしたら全然安くない。ミルクも安い高いがあるというし、哺乳瓶を買おうにも消毒薬という想定外の必須アイテムがついてくる。そんなこんなをひっくるめてレジに通すと、

「合計で一万三千二百四十三円です」

お前のどこが味方なんだ。くそう、死ぬ気で貯めた金が……。

「なぜ、私はこんなことを？」

買い込んだベビー用品とベビーそのものを抱え込んで、えっちらおっちら坂を上った。

「うあっ」

途中で赤ちゃんがくずったらべろべろばーとあやしてやり、

「うえっ」

またぐずり出したら時間を確認してミルクを与え、

「ううっ」

それでもぐずるようなら子守唄を歌ってやる。

「ふひひひ」

赤ちゃんはよく泣いたけど、それ以上によく笑った。一度笑顔を見ると、また次の笑顔が見たくなる。子供が生まれると子供中心の暮らしになるとはよく聞くけれど、まさに子供を笑わせるためにだけに三連休が過ぎていった。

一秒も勉強をしないまま。

「……あれ、何をやっているんだ、私」

部屋で赤ちゃんを抱きながらゾツとした。

待て待て、何で私は子育てに没頭しているんだ。違うだろう、そんなことをしている場合じゃないだろう。この三連休は全部勉強に充てるはずだったのに。

「うえっ」

「ミルクね。わかった、しばしお待ちを」

ぐずり声だけで何を求めているかわかるようになってる場合じゃないだろう。

だめだ、やっぱり警察に届けよう。疑われてもいい。この子はもう手放さないと、どんなゲームよりも易々と時間が溶けていく。

「ううっ」

「お腹いっぱいになった？　じゃあ、お休みしましょうね、お嬢様」

取りあえず、今日はもう遅いから明日にしよう。明日一番で交番へ行く。それで子育てごっこはお終いだ。そう誓って私はまた、ヤチヨの歌を子守唄代わりに歌ってやった。

寝顔はやっぱり天使のようだった。

その晩、私は夢を見た。

私はアパートの天井の一部になって、私の部屋を見下ろしている。四畳半の真ん中にあるのは愛用のちゃぶ台とタブレット端末。画面から発せられた淡い光が真っ暗な部屋をぼんやりと照らしていた。

「きゃっ、きゃっ、きゃっ」

くすぐったいような笑い声と共にタブレットの画面は次々と切り替わる。巨大隕石接近の可能性を告げるニュース、命を懸けた恋の映画、超満員のヤチヨのライブ、アニメ、スポーツ中継、友達とふざけて撮った私の動画。

「きゃっ、きゃっ、きゃっ」

タブレット端末を操っているのは赤ん坊だ。貪る^{むさほ}ように情報を求めるその瞳は、スマコンも入れていないのに妖しく輝いている。

不意に、窓から月明かりが差し込んだ。月光を浴びた赤ん坊の髪の毛が音もなくゾロリと伸びる。それはまるで、光合成を行う植物がさらなる光を求めて葉を広げているかのようなだった。そして、私はまた眠りに落ちていき……。

・ ・ ・

「ねー、ねー」

赤ちゃんのぐずり声で目を覚ました。

「お腹空いた」

「……承知ですう」

わかるよ、お腹が空いたのね。

寝ぼけ眼を擦って立ち上がる。まだ部屋は真っ暗だ。

「ミルクー」

「少々お待ちくださいませ」

ミルクが欲しいんだよね、わかるわかる。

この三日で極限まで察知力が鍛えられた私は、赤ちゃんのぐずり声を聞くだけでまるではっきりと言葉にして伝えられたように要求が理解できる……って、あれ？

「うわあっ！」

「うおおっ！」

大声を上げて振り向くと、少女も同じく悲鳴を上げて飛びのいた。

そう、少女だ。そこにいたのは少女だった。

真っ暗な部屋の中、突如出現した少女が驚いたように目を見開いてこっちを見ている。

「ビビったあ……」

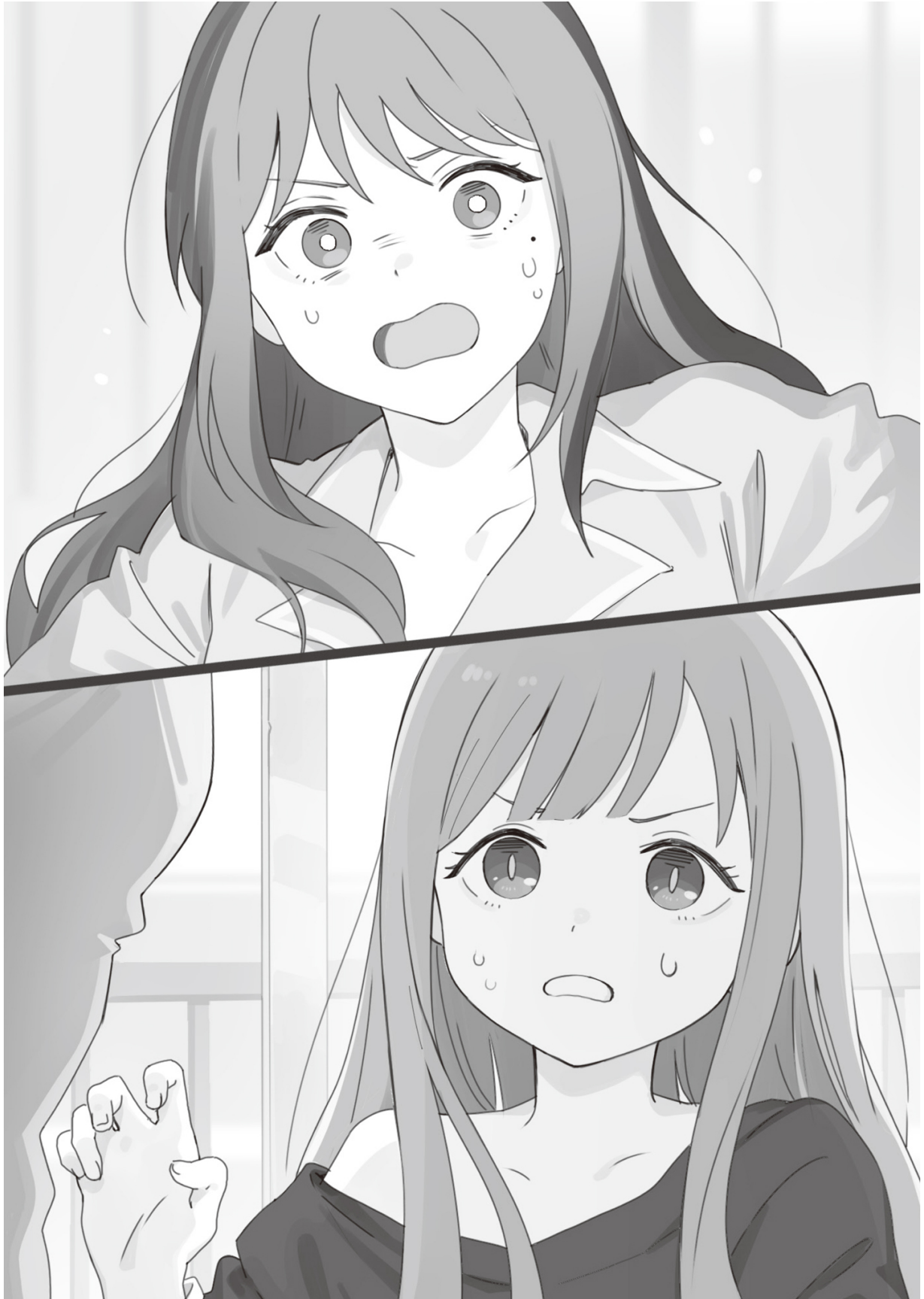
いや、ビビったのはこっちだから。

年は十歳ほどだろうか。流れ星が二つ飛び込んできたような美しい瞳が、驚きを湛^{たた}えて爛^{らん}々と輝いている。腰まで伸びた艶やかな髪の毛といい、暗がりでもそれとわかるほど白い肌といい、形のよい唇といい、造形だけ見れば美少女だが。

……あんた、誰よ。

いや、答えなくていい。わかっている。あんたは……アンタだよね。この三日間ずっと触れ合ってきたからわかっている。ぐずり声だけで心がわかるほど通じ合ってきたからわかっている。

おかしいと思っていたんだ。電柱から生まれたことといい、一晩でグイグイでかくなったことといい、目を輝かせて情報を食い漁っていたことといい……いや、これは夢だったかな。



とにかく、もういい。これでもう確定だ。こいつは絶対に人間じゃない。そうとわかれれば、
「お引き取りください！」

買ったばかりの西竹屋グッズを素早く段ボールに詰め込んで、丁重にお返し奉った。

「……」

しかし、謎の美少女は不思議そうにジロジロと西竹屋の箱を眺めまわし、

「……どゆこと……？」

「いやそれ言いたいのはこっちだから。てか、何ですぐデカくなってんの？ こわっ！」

「んー。まあ、今時は何もかもスピードが早いんですわ」

何だ、そのインタビューみたいなコメントは。そもそも、なぜ喋れる。あんたさっきまで赤ん坊だったじゃん。やっぱり、だめだ。もう付き合えない。明日までなんて待ってられない。

「得体の知れないものは、お断り！」

少女の腕を取り、力づくでご退出願うことにした。

「やだー！」

が、動かない。少女は小さな身体で突っ張ってめいっぱいの抵抗を示す。

「ちょっと、動いてよ」

「いーやーだー」

まさか、こんなに早いスパンでまた筋力を試される機会が来るなんて。でも、舐めるなよ。電柱ならまだしもこんな小さな女の子が相手なら、綱引きの要領で全力で引っ張れば――。

「痛い痛い痛い」

「あ、ごめん」

「ああああああ！」

あ、もっとごめん。痛いと言われてつい手を離したら、反動で少女はゴロゴロと床を転がって、――ゴスッ！

と、頭をアルミサッシに打ち付けた。

「大丈夫!？」

「頭痛い……。手も痛い……。誰か助けて……」

『助けて』。その言葉を聞いて、一瞬、途方に暮れてしまう。

――助けて？ そないなこと気軽に言えるのが私の娘やなんて、ほんま驚きやわ。この世で頼れるんは自分一人や言うたよな？ もう忘れてしもたん？ せやったら――

そして四時間に及ぶ説教へ……。いやいや、思い出してる場合じゃなかった。騒いでるのを止めなきゃ。

「ちょっと、やめて。夜中に大声出さないで。また壁ドンされちゃうから」
しかし、私の部屋に鳴り響いたのはお隣からの壁ドンではなく、
ぐうー。

目の前の少女からの腹グーだった。

そういえば、夜のミルクをまだあげていない。ちなみに私も夜ご飯を食べ損ねており、

ぐうー。

誘われるように二回目の腹グーが、今度は私の中から鳴り響いた。

うら若き乙女による腹グーのコールアンドレスポンスなどなかなかお目にかかれるものではない。しばし、気まずい沈黙が二人の間に流れ、

「たすけて〜?」

少女が瞳を潤^{うる}ませて媚^こびたように小首を傾げてみせた。

な、なんて舐めた態度なんだ。本当に何も考えていなそうで、こいつを前にすると全てが馬鹿馬鹿しく感じられる。全身から力が抜けて海を吹き飛ばせそうなくらいでかい溜め息を吐^っいてしま^い、その反動で立ち上がってしまった。あーあ……。

——立ち上がったやつが全部やるんや。やりたないなら相手が立つまで座るとき。

※

「五百九十四円……五食分……てか、二時だぞ、二時」

深夜にパジャマ姿でコンビニへ走った。買ってきたのは、とりあえず子供の好物といえはこれだろうということで選んだオムライス。無論、二つ買うことなど許されず、私の分はバイト先から持

ち帰った賄いのタコライスを解凍した。ちゃぶ台を挟み、謎の少女と遅すぎるディナーの始まりである。

「いただきます」

手を合わせてタコライスを頬張った。うん、BAMBOO cafeの賄いメシは相変わらず安定している。味もさることながらタダであるということが最高の調味料として機能している。

一方、謎の少女はというひとすらにじっと私を見つめている。無視して食べ続けていると、少女はおもむろに左手でスプーンを握りオムライスに突き刺した。左利きというよりは、ただ私の動作を鏡写しにコピーしているように見える。そして、オムライスを乱暴に掬い取り口に運ぶと、

「——っ」

大きな瞳に星が散った。

「すごい！ 何これ？」

そこから食うこと食うこと。目を丸々とさせてバクバクと掻き込んでいく。まるで食事を摂ったことがないかのような興奮ぶりだ。

「えっと、オムライス……かな」

「オムライス！ 大好き！」

……やたら喜んでんなー。財布に厳しいパンチだったけど、ちょっとだけ報われた気がした。ほんの、ほんの少しだけ。

「この黄色いのは？ 赤いのは？ 中のちっさいモキュモキュしたのは？」

「鶏の卵、ケチャップ、鶏肉……」

矢継ぎ早に発せられる弾んだ声に対して上の空で返事をしながら、手癖でちゃぶ台の上のタブレットに手を伸ばしてスリートを解いた。ちょうど、ヤチヨのライブ配信が始まっている。

『年の差があると周りに色々言われたり、遠慮しちゃったりってあるよね。ヤチヨ的には映画とかで時々ある年の差ある友達みたいな大好物なんだ☆』

淀みのないヤチヨの声を聴いていると、急に日常が返って来たような感覚になる。

「うまつ、うまつ、うまー」

目の前にオムライスをかつ食らう謎の女の子がいたとしても。

なんなんだろう、この子。いったい、誰なんだ。いや、誰かはわかっているから聞くとしたら……。

「あなた、どこから来たの？」

になるのかな。問われた少女は、はたと手を止めると、

「んっ」

そりゃあ、あそこに決まってるでしょ、と言わんばかりの表情で窓の外に見える満月を指差した。

月……月ですか、なるほど。

まさか、答えが返ってくるとは思わなかった。赤ん坊だったはずなのに、ここに来る前の記憶があるっていうのか。わかっていたけれど、ますますもって人間とは思えない。

「で？ 宇宙人は何しに来たの？ 侵略？」

「うーん、何かあんまりよく覚えていないんだけど。とにかく、毎日超つまなくて。楽しいところに逃げたくって、思った気がする」

軽いんだよ、説明が。そして、わからないんだよ、目的が。

「逃げんな」

「え、なんで？」

「な・ん・で・だ・あ？」

「逃げるのは簡単だけど、そのあと再スタートって大変だよ？ 覚悟あんの？」

「覚悟？ やりたくなかったらやんない。やりたかったらやる！」

話を通じません。どこまで考えて喋ってるんだ？ そもそも考えてないのか？

「あと日々がつまんないとか当たり前」

「え！ やだー！ 彩葉ほんとにそれでいいのー？」

「良いとか悪いとかじゃな……ってなんで私の名前知ってる!？」

「ふっふっふ、知りたい？」

ああ、もういいや。なんかドヤドヤしててムカつくから話題変えてやろ。

「あのさ、ちなみにだけど、これに心当たりは？」

ヤチヨの動画を打ち切って、タブレットに『竹取物語』の絵本を示して見せた。

「なにこれ？」

「竹取物語。月からやって来た姫が竹の中から出てきて、翁おきなが拾って育てて、結婚迫られたりとか色々あって……まあ、ごちゃごちゃありますって感じのお話」

雑な説明で締めくくると、少女はわけがわからないとばかりに首を傾かしげる。

「けっこうん？」

可愛っ……く！　ない！　断じて！！　一瞬本当に純真無垢じゆんしんむくそうだったから騙されかけたがどうか正気を保つのに成功した。

「たけー？」

「まあ、あんたが出てきたのは竹じゃなくて電柱だったけどね」

我ながら荒唐無稽ことうむけいではあるけれど共通点はあるように思う。もと光る竹、赤ん坊、すくすくと育つ女の子、そして、月。

「もしかして……かぐや姫なの？」

「おいしそう……」

聞けよ、話を。あんたの話をしてるんだよ、私より先に飽きるんじゃないよ。一瞬でオムライスを食べ平らげた少女が見つめているのは、竹取物語を表示したタブレットではなく、私の手元のタコライス。まだ食う気が、こいつ。

「ううう」

そして、素早く泣き落とし。諦めてタコライスの皿を突き出すと、少女はあっさりと泣き真似を解いてスプーンを構える。

「いただきますーす。で、なんだっけ？」

「だからあ！」

「ああ、そっかそっか。つまり、彩葉はこのお爺さんなわけ？」
ぶっ飛ばすぞ。月まで。

「八十年後の未来でも見えちゃってるのかなあー、違うよ？」

「ぬはは」

今度は笑って誤魔化しにきたか。よからぬ手法ばかり覚えおって。

「うわ、こっちのオムライスも美味しい！」

「そっちはタコライス！」

「オムライス、美味しっ」

だから聞けよ、話を。もうわかった、こんな絶対かぐや姫じゃない。ただの大食い宇宙人だ。

「どーすればもっと食べれるの!？」

「えっ、買うか、料理して自分で作ればいいと思うけど……」

「りょうりー？ してみたあああい！」

うお、まぶしっ……。あまりのわくわくオーラに気圧される。

「で、お話はどうなるの？」

はい？ あ、竹取物語の話か。めっちゃ急カーブして話戻すじゃん。

「翁が拾って育てて、けっこん迫られてごちゃごちゃあって、続きはどうなるの？」

聞いてたのか。飽きていたように見えたけど、情報を取り入れることに関しては食欲と同じくらい貪欲らしい。一瞬、夢で見た瞳の光る赤ちゃんを思い出した。

「彩葉？」

よく見ると赤ちゃんの時と顔一緒だなあ……じゃなかった。

「ああ、うん。え……お迎えが来てー、翁たちが引き渡すまいと戦うも空しく、姫は羽衣を着せられて、地球のことは忘れる。で、帰る」

「おー」

「……」

「で、続きは？」

「ない。終わり。めでたしめでたし」

「え、月に帰って終わり？ なにそれ、なにがめでたいの？ 超バッドエンド！ かぐや姫絶対不幸じゃん！ しかも何かいい話風になってるのが余計許せないよ！」

なにがそんなに癪に障るのか、やたらと畳みかけてくる。言われてみれば姫にとってそれが本意だったのか、わからない。でも――

「これは、そういうお話なの」

付き合いきれないので空になったお皿を引き上げて流しへ運んだ。話はこれでお終い、そんな意思を示したつもりだったけど、

「バッドエンド、やあーだあー」

まだ言ってるし。

「ハッピーなのが、いーいー！」

知らんがな。

「バッドエンド、やーくだーく♪ ハッピーなのが、いーくいーく♪」

なぜ歌う。しょうがないなあ、もう。

流しの縁に背を預けて振り返った。

「どうしようもないじゃん。暴れたって、歌ったって、決まってることが変わるわけじゃないし」

そして、駄々をこねる少女を見下ろして言い切った。

「受け入れて覚悟するしか、ない」

あるいは、それは自分に向けて言ったのかもしれない。放った言葉は、喉から落ちて私の胸に重みを残した。

「……」

少女はそんな私の顔をじっと見つめる。それほど強く言ったつもりはないけれど、黙り込み固まったように動きを止めて、二秒、三秒、四秒……。なにを考えているんだろう。それから、いい加

滅沈黙が辛くなり始めた頃、

「よし、決めた！」

今度は少女が決然と言い放った。

「自分でハッピーエンドにする！」

まるで魔法少女か、あるいは小学生アイドルのようにびしっとポーズを決めてみせる。四畳半の狭い部屋で。

「そんでハッピーエンドまで彩葉も連れてく、一緒に！」

当然のように巻き込まれた。『ハッピーエンド』……つま先に、コン、と石を当てられた気分になる。

——都合の良い話は毒や。一番食ってかからなあかん。

「ハッピーエンドじゃない、フツのエンドで結構です」

エンディングは、もう決まっている。あとはそこまで積み重ねていくだけなんだから。

「うそうそうそ！ なわけないでしょ？」

宇宙人が何か言っているけれど、聞こえない。ただでさえ慌ただしい私の生活を、これ以上波立たせるわけにはいかないのだ。

マジ秒で三連休終わっちゃったし。うえ、また口内炎増えてる。

てか、もう寝かせて……。

・ ・ ・

遠くからキジバトの鳴く声が聞こえて来た。それを追い立てるように新聞配達バイクが通り過ぎて行く。カーテンを薄く開くと、生まれたての朝日が……。

「ん？ 二度目だ、これ」

飛び起きて辺りを確認した。いない。押し入れの中、ユニットバス、ベランダからまた押し入れ……やつは、いない。部屋には朝の粒子と夜の残渣ざんさが漂うだけ。出ていったか。いや、全ては過労による夢だったのかもしれん。

「ヨッシャ！」

渾身のガッツポーズを決めた。そのタイミングを見計らったように、流しの下引き出しが開く。

「ココダヨー」

ですよねー。そこには、昨晚よりさらに大きくなった少女が三角座りで収まっていた。

「ねーねー、彩葉がいつも見てるこの人は誰？ 好きなの？」

いつもより素早く食事を済ませ、いつもより迅速じんそくに身支度を整え、いつもより遙かに早く登校できる準備を終えた後、慌ただしくフライパンを振っていると、宇宙人が呑気いじにタブレットを弄りな

がら尋ねて来た。相手が地球外生命体だとしても、ヤチヨについて聞かれるのは嬉しい。声が弾まないように抑えて喋る。

「月見^{るなみ}ヤチヨ。Aーライバー。推し。分身もできて歌って踊れて八千歳——って設定」

「えー、Aー？ ロボットってこと？ ヴェー、おもしろー？」

なせか、宇宙人はさらに盛り上がって椅子代わりにしたちゃぶ台をギシつかせる。てか、テーブルに座るなよ。

まあ、いいか。最後の仕事を終えた私は、火を止めて、手を洗って、通学鞆を肩にかけて、靴を履いて、

「じゃあ、行ってきます」

と言が残すと、

「えー！ やだやだやだー！」

宇宙人が猛スピードで突っ込んで来た。てか、またデカくなったな。もうほとんど私と同年くらいには育ってそうだ。

「一緒にいて！」

切実そう。さっきまで『ヴェー』とか言ってただろっ。

「無理。学校休めない。家から出ないで。ご飯はそこね。パンケーキ」

私はぶつ切りに言い切ると、コンロのフライパンを指差した。酒寄彩葉の画期的貧乏飯「粉と水のパンケーキ」だ。

宇宙人はソッコー頬張ったかと思うと顔をぐねぐねと歪ませて、

「くそまじい……」

と、失礼極まりない感想を放った。おい、もう食わなくて良いからな。

「じゃあ、行ってきます」

「待って、やだやだ！」

うっ、暑……。扇風機以外冷房禁止のこの部屋で縋すがりつかれるのは拷問ごうもんに近い。てか宇宙人にも体温あるんだ。そういえば赤ちゃんのときもぽかぽかあったかったな……。

「おかしいよ。宇宙人だよ？　こんな不審者部屋に置いて出かける、普通？　そんなに学校って大事なわけ？」

自覚あったんかい！　じゃあ、言わせてもらおうけど、

「命より大事！」

真っすぐに両目を見据えてそう言った。

私が一年間で築き上げてきた学校生活は、私の意地と努力と忍耐の結晶だ。命を懸けて守るし、誰にも壊させはしない。ましてや、こんな得体のしれない宇宙人なんかには。

「あんたと関わったのは私のせいだけど、もう全部元に戻すから」

子育てごっこはもうお終いだ。それなりに有意義な三日間だったけれど、もう私は元の完璧女子高生に戻るから。

「だから、あんたも月へ帰って」

「……でも、帰り方わかんないし。なんかここおもしろそーだし」

ここって何？ 地球？ エンジョイするつもり？

「とにかく早く思い出して！ 今日一日で。わかった？」

SF映画のライトセイバーよろしく人差し指を突き出した。一瞬、何かを言い返そうとした宇宙人だったが、私の気迫に押されたのかぐぐつと口を噤^{つぐ}んで後ずさる。

「行ってきます」

その機を逃さず、三度そう言って扉を閉めた。追いつがって来る気配はない。ぶー。

閉じた扉の向こうから宇宙人が何かを言った気がしたけれど、気がただけなのでかまわずアパートの階段を下りるのだった。

※

「このままのペースを維持できるなら、まったく夢じゃないよ」

放課後の職員室、担任の立花^{たちばな}先生は進路希望調査票にいくつかの大学のパンフレットを添えて私に手渡した。

「はい、そうしようと思っています」

「無理はしないように。身体もそうだが心も壊しちゃ意味がない」

「ありがとうございます」

心身共に健やかに、かつ一定のペースを維持しつつ、か。この三日間と真逆の言葉をいただいてしまったな。

連休明けの平穏な一日は、私に自分が何者であるかを改めて気付かせてくれた。

そう、私は完璧女子高生の酒寄彩葉だ。成績優秀、品行方正、文武両道。しかし、その『完璧』さは、あくまで『女子高生』の範囲に限定される。極々普通の、平凡な高校生として『完璧』なのである。

ゆえに私の生活には光る電柱も赤ん坊も、ましてや宇宙人なんて呼びじゃない。堅実に地道に現実的に、目標に向かって努力するのが私なのだ。そして、いつか母に――。

「親御さんも、さぞかし自慢の娘なんじゃない？」

「え？」

反射的に顔を上げた。どことなく古びた山羊やぎを思わせる立花先生の笑顔には、何の含みも感じられない。たまたま親の話題を出しただけ、そうに決まっている。

「だと、いいですが」

咄嗟に百点満点の笑顔を浮かべてそう答えた。完璧女子高生の酒寄彩葉は作り笑いも一流である。しかし、

「……期限までまだ時間はある。ゆっくり考えよう」

人生経験豊富な先生には何か見える物があるようで、笑顔の下で草を食む^はように何がしかの思いを咀嚼^{そしゃく}していた。

失礼しますと頭を下げ、職員室を出た。途端に、開いた窓から賑やかな笑い声が飛び込んで来る。

「今日ツクヨミいくー？」

「ヤチヨのライブあるよね？」

「黒鬼のK A S S E N 配信見ようよー」

何となく窓から見下ろした昇降口は、まるで別世界のようなだった。放課後の空気を吸った生徒たちは皆、翼が生えたように足取りが軽い。

「……って、私も放課後の生徒じゃん」

自嘲^{じちよう}するように漏れた私の笑みは、同じ笑顔でも彼らの顔に弾けるそれとは全く違って見えたことだろう。

仕方がない。私の背中には、羽どころか過労と睡眠不足がのしかかって今にも足がふらつきそうなのだから。さあ、今日もバイトだ。その後はいつものように予習復習。この三日分の遅れを取り返さなくっちゃ。

先生に渡されたいくつかの大学のパンフレット、その中から一冊を抜き取った。

東京大学。私の志望校はもう随分前から変わっていない。日本で進学するのなら、ここ以外は母が認めてくれないだろうから。

——どうせ目指すなら一番やないとあかん。はなから二番三番を狙うんやったら、なんの努力もいらん平地を素通りで通った方がマシや。

いつだったか、母に怒られた時の言葉が頭を過よぎった。

あれは確か、ピアノの発表会で銀賞を取った時のことだったかな。満面の笑みで駆け寄る私に、母は真顔でそう言った。

——何わろてはるの。

それまでの努力を全部否定されたような気がして、首から下げた銀色のメダルが酷く恥ずかしい物のように思えた。私はただ一言、頑張ったねって、言っただけなのに。東京大学は金メダルの代わりになってくれるのだろうか。

「自慢の娘になって認めてもらえました。めでたしめでたし……うん、それで十分上出来だ」

自分で自分に言い聞かせると、笑顔の強張りが少しだけ溶けたような気がした。けれど、

「いくぞー。よーい、ドン！」

「うおー、ウサイン・ボルトー！」

私の視線は、世界最高速で校門を走り抜ける男子生徒の背中からいつまでも離れることはなかった。

もちろん、校門の脇に忍者のように伏せている宇宙人の姿など、気付くはずもない。

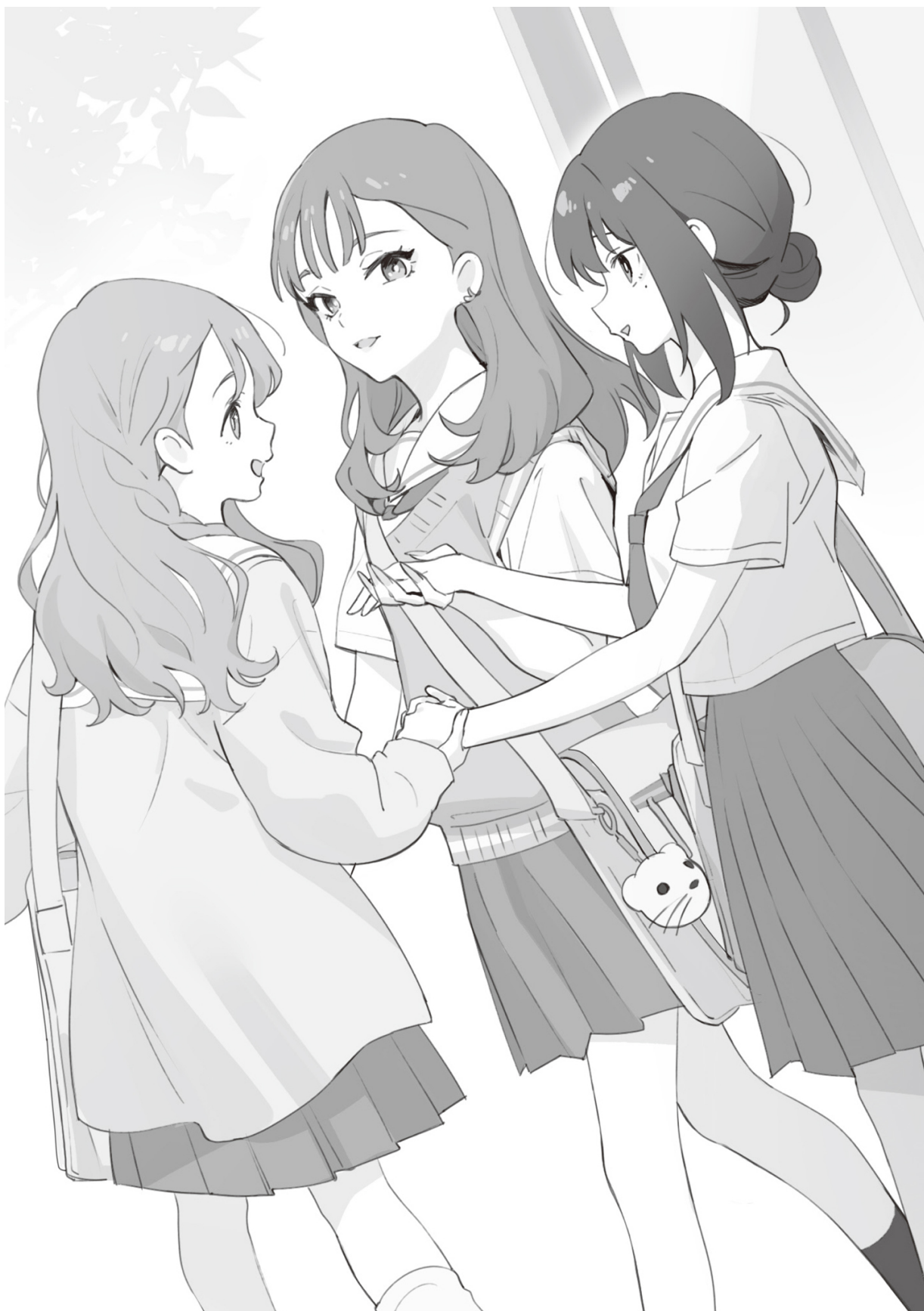
※

「あ、彩葉来たー」

「やっと終わった？」

「え、芦花^{ろか}？ 真実^{まみ}？」

とつくに先に帰ったと思っていたけれど、芦花と真実は靴箱で私のことを待っていてくれた。そうだ、私にもいたんだった。屈託のない笑顔を引き出してくれる友達が。



「連休どーでした？」

「忙しかった？」

宇宙人に侵略されていて、この三日間はろくに連絡が取れなかった。もしかしたら、ツクヨミで待っていてくれたのかもしれない。三人で遊ぶ予定のない休日、二人は夜深い時間にログインしていることが多い。そうするとバイトや勉強や家事が終わった私が床に就くまでの少しの間、軽く遊んだり話ができる。約束は重荷になるとか色々考えてくれているのだろう。気を遣わせてしまっって申し訳ないという気持ちもあるが、現状助かっているのも事実だ。情けなくて、少し胸が痛む。

「ごめん！ もーとにかく嵐に揉まれてて……」

いったん曖昧に誤魔化すが、これ以上突っ込まれたら何と説明しよう……。そんなことを考えながら靴を履き替えていると、

「ま、とにかく帰ろ！」

「かーえろー」

二人は何かを察したかのように切り替えて、私の手を取って陽光の降り注ぐ帰り道へと導いてくれた。

「彩葉って進路どうするの？」

「音楽系でしょー？ それかeスポーツとかー？」

私を間に挟み込み、代わる代わるに聞いてくる芦花と真実。

「そんな才能ないよ。それに最低限東大にはいかないと親が認めてくれなそうなんだよね」

音楽は無理。eスポーツはもっと向いてる人がやるべき。勉強は、頑張れる。母は、四人の弟妹を養いながら京大に行った。じゃあ、なにも枷かせのない私は一步先まで進まないといけないよね。私がおどけたふうに言葉を返すと、

「最低ラインがそこ？ 厳しー」

「私なんかでろでろに甘やかされてるなー」

二人も同じノリで笑ってくれた。

いつもと変わらぬいつもの会話。笑顔もいつもと変わらない芦花と真実だけど、わざわざ私が帰るまで待っていた辺り、本当は何か聞きたいことがあるのかもしれない。

けれど、二人は示し合わせたようにいつものペースといつもの空気を貫いたまま、

「こっちだよねー？」

「うん、そこの階段上ったとこ。彩葉おいでー」

あれあれ？ いつもとは違う見慣れぬビルへと引っ張られて行くぞ。そちらには何が？

「え、待って二人とも。今日何かあったっけ？」

ちなみに私はあるんだよね。バイトとか勉強とか……あと家に宇宙人とか。

「新しいカフェ、行くなって約束したじゃん」

「いや、今日は……」

勘弁してください、真実さん。言えないけどこの三日間で信じられないくらい散財しちゃったんです。こんな高そうなエリアには足も踏み入れられないほど。

「約束したじゃん！」

ああ、だめだ。真実の瞳にグルメの炎が宿っている。こうなった真実はもう誰にも止められない。

「はい、れっちごー！」

「後生ですから〜」

貧乏女子高生の願いも空しく連行されたのは、『空と大地と人がつながる』がコンセプトの複合施設内。自然光をたっぷりと取り入れたオシャレ度も価格帯もハイクラスなカフェの一角。

「彩葉ノートで赤点回避記念〜」

「お礼の品です。ご査収くださいー」

「あ、ありがとう！」

私の前に運ばれてきたのは映えの象徴ともいうべき、クリームいっぱい夢いっぱいのふわふわ三段重ねパンケーキ。

経験からわかる……このノリときは奢りだ!! 正直嬉しすぎる。こんなキラキラした食べ物にありつけるのは何日ぶりだろう。形式的な遠慮をしても二人には優しく跳ね返されるだけなので、

ここはもう一息に……

「いただきまー……」

「——シャッ！」

手を伸ばした先のキラキラパンケーキ♡に、無慈悲にも三又の刺突武器が突き刺された。

「……え？」

銀色のフォークを握るのは、夏の日差しにも解けない雪のような白い左手。

「いただきまーす！ あむ、もぐもぐ……うんまあああ！」

うわっ、一口でいきやがった。

三枚重ねのふわふわのパンケーキを一瞬にして二階建てに減築させた犯人は、おとぎ話の月のお姫様もかくやとばかりの飛び切りの笑顔を光らせると、

「よっ、彩葉！」

完璧なウインクで地上に星を飛ばしてみせるのだった。

ば、おま、あ——っっ!!

「えー、可愛い。誰この子」

「彩葉の服着てる。彩葉の友達？」

「ああああああ、そう！ そうなの！ いや、友達っていうか、その……」

ななななんて説明すればいいんだ!? てかほんとだ私の服勝手に着てる!! これ何かの罪で捕ま

えてもらえませんか——!!

「パンケーキ好き？ はい、これもどうぞ」

ろ、芦花!! 甘やかさないで!!

「パンケーキ？ これが？ 彩葉のと全然違う」

うっさい！ てか、何でここにいる!? あれほど部屋にいてって言ったのに！

パニック状態の私を差し置いて、普段通りのどっかり宇宙人は芦花からもらったパンケーキも一呑みした。ついでに、にまにましながらふざけたことを抜かしてやがる。堂々たる姿に逆に頭の火照りが冷めていくのを感じる。

「紹介してよ、彩葉。こんな可愛い友達独り占めはズルって」

「いや、友達っていうか……えーっと、あの、そのー」

口籠もったふりをして時間を稼ぎ、「早く帰れ」という視線を突き刺すと、

「月から来たの！」

何を言ってくれてるんだ、この宇宙人は。何をどう解釈したのか、最悪の自己紹介を言い放った。

「……え？」

「ツキ……？」

「ジ！ 築地だよね！ 築地から来たの、私のイトコ！」

いや、さすがにこれは苦しいか。恐る恐る真実の顔に目を向けると、

「わー、美味しいお鮎屋さん教えてー？」

よし、行けた。さすが、立川一のグルメガール。芦花の方は？

「可愛いね、お名前は？」

助かった、こっちも宇宙人の見目麗しさに夢中のようだ。さすが、立川一の美容ガール。

「名前？ 名前は、えーっと……」

不意に、昨日見たおとぎ話が頭を過る。そうだ、あのお姫さまは――

「かぐや！」

かぐや姫。

「かぐや……、かわよー！」

「えーびったりだね」

そうだね、かぐや！ 盛り上がる芦花と真実を尻目に再び視線にメッセージを乗せて、暫定かぐや姫にフルパワーで照射すると、

「かぐや？ かぐや……かぐや……そっかあ。かぐやかあー！」

存外、嬉しそうなかぐやがいた。『名前は人生最初のプレゼント』。どこかで見たような言葉を、ふと思いつ出した。

「ごめん、帰る！ ありがとね、ごちそうさま！ 後で埋め合わせするから」

もう限界だ。私はかぐやの襲撃を逃れたパンケーキの一階と二階を二口で詰め込むと、まだ赤い顔で照れているかぐやを引っ掴んで、風のようにカフェから脱出するのだった。

「いやー、さっきの建物の中涼しかったねー。あれ彩葉の家で出来ないの？」

カフェを出てからもご機嫌で喋りまくるかぐや。私はそんな宇宙人を連れて人気ひとけのない一角まで歩き切ると、

「正気!? 何でここにいの!? 何で家から出てくんの!? 部屋にいてって言ったでしょ! 月から来たって何!? 正体バレたらどうすんの!? 何で私の服着てんの! 何で私の場所がわかったの!」

言いたいことを全部吐き出した。どれもこれも私からすれば至極まっとうな疑問とクレームだったけれど、

「だって、つまないんだもん」

かぐやはたった一言で返してみせた。五歳児がおもちゃを取り上げられて拗すねている感じだ。

マジか、この宇宙人は。つまらないから? 言うに事欠いてつまないから? そんな理由で約束を破って外に出て、宇宙人だとバレるリスクを冒おかして人前に出て、あまつさえ月から来たなんて言っただけなのか? 本当に、つまないという理由だけで?

「えへへへ」

どうやら、本当にそうらしい。そして私が黙っていた二秒の間に機嫌が変わったのか、かぐやは妙にへらへらしている。……いや待てよ? もしや笑って誤魔化そうとしてんのか?

「あのね、そんな風に生きてると自滅するよ。時には我慢ってもんも必要で――」

……。

順調に出走したものの二の句が継げない。だってこれ、私が母に言われた言葉だから。う――同じことを……。

「ねー、これ、どうやって使うの？」

私の隙を見てすかさず突き出されたのは、コンタクトレンズ型のPCデバイス・通称――。

「スマコンじゃん。私のやつ持って来たの？」

「ううん、彩葉のノートPCで買った」

………は？

「イエイ♪」

イエイじゃない、イエイなわけがあるか。スマートフォンを取り出して半狂乱でネット通販の履歴を探る。

『ウォレット残高 ￥452 前日比 ￥マイナス124400』

……。え、これ、現実？ そ、そんな馬鹿な……。

「……し、死ぬ気で貯めたんですけど……。ご飯も、涼しさも温かさも、遊びも断って、推しへの課金も我慢して、死ぬ気で……死ぬ気で!! 貯めたんですけどっ!!」

気持ちだけでいえば号泣しながら駆け出したかったが、悲しいかなそんな体力もなく絶叫するのが今できる最大の抗議だった。

「あ、大丈夫！　なんか銀行？　のデータ書き換えればウォレットの数字増やせるっぽかったよ！　かぐやならお茶の子さいさいだけど、やるっ？」

私の尋常ならざる様子を見て慌ててるっぽいが倫理観がない！

「ダメに決まってるでしょ！　絶く対っ！　しないでよ！」

※

宇宙人断固・絶対・追い出すべし。そう固く誓って鍵もかかっていないアパートの扉を開くと、
「ちょっと先行かせて！」

「痛っ、何？」

「じゃーん！」

暴力的なまでに食欲をそそるいい匂いと、暴力的に先回りしたかぐやのドヤ顔に迎えられた。そこに並ぶのは見た目も華やかな^{けんらんごうか}絢爛豪華な料理の皿。思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「まーずは、生のトウモロコシから作ったポタージュ。こっちは新ゴボウとアスパラのカリカリサラダ温卵付き。メインはトマト煮込みハンバーグ、ズッキーニのソテーをそ・え・て♪」

そう言って、かぐやは自分の笑顔も添えてみせた。これまで我が家の敷居を^{また}跨いだことのないような美味しそうな料理をいただいていつものちやぶ台も誇らしげだ。

「何……これ？　もしかして作ったの？」

「そだよ〜」

嘘、美味しそう。めっちゃくちや美味しそうではあるけれど……。

「これも……私のウォレットで……？」

「そだよ〜」

嘘、倒れそう。めっちゃくちや気絶しそうなんだけど……。

「はい、食べて」

強引にポタージュのスプーンを口に突っ込まれると、

嘘、ホッペ落ちそう。めっちゃくちや旨くて舌がとろけそうなんだけど……。

「なんなのよ……旨いじゃないのよ……なんなのよ、あんた……久しぶりの美味しいご飯で……身体が喜びに満ちていくじゃないのよ……」

なぜだろう、箸と涙が止まらない。他人の作った手料理なんて食べたの、いつ以来だろう。賄いも手料理といえただけ、やっぱり違う感じがする。なんか、味、する。いや、他の食べ物にも味はあるけど、なんだか最近は一枚ベールを被ったその下に味があるって感じだった、かも……。おいしい……。こんな食わされたら、もう何も言えないじゃない。でも、さっき……じ、じゅうに、まん、とか……うっ、うっ……。

「……悪魔」

「悪魔じゃないよ、かぐやだよ〜♪」

かわいこぶんな！ ムカつく。くそう、ムカ旨い。どこまでも楽しげな悪魔の宇宙人による天使のような料理は、最後に飲んだ水道水まで旨かった。

ちなみに、食後にスマートフォンを確認すると、

『¥1090（スーパーみその） ¥540（スーパーみその） ¥1239（肉の近藤） ¥2680（魚のさかもと） ¥465（スーパーみその） ¥780（ぱんのひろし） ¥350（果実のあおき） ¥1560（雑貨こばやし） ¥730（フルーツパラダイス） ¥2000（ビストロマツオ） ¥390（スーパーみその） ¥1250（肉の近藤） ¥1456（YU） ¥220（トーカードー） ¥1200（スーパーみその） ¥3720（青果のあおき）……』

やっぱり、悪魔だ。こいつは。

※

「あのさあ……」

満腹になった身体をフローリングの床に横たえた。お腹の中がほっかほかだ。頭先从爪先までが、とろりとした甘い幸せに満ちている。

「マジでここではかくま匿えないよ」

それでも、無理なものは無理なのだ。私は蛍光灯を見上げながら言葉を吐き出した。

「ただでさえ親に無理言って一人暮らししてるんだし、面倒事はごめんなの。何かあったら速攻で実家に送還されちゃうからさ……ねえ、聞いているの？」

「はい、ここでもう！ タカタカタカツ、ターンッ！」

聞いてないよね、あんたは。知ってた。

かぐやが文字通り目の色を変えて夢中でちやかちか弄っているのは、私のノートPC。何やら怪しげなコードが画面を縦横無尽に埋め尽くしている。止めようかなとも思ったけれど、満腹の粘着力によって背中が床に貼り付いているのと、

「もういっちょ、タカタカタカツ、ターン♪」

楽しそうに揺れながらキーボードを叩くかぐやの姿が何故だかちよっと切なくて、出来なかった。何だろう、この感覚。見たこともないはずなのに、懐かしいこの光景。私は誰の記憶を見ているのだろうか……。

「出来たあ！」

何が出来た？ しまった、ついブーツとして。

「まさか、サイバー犯罪とかじゃないですよね？」

「見て、彩葉。携帯ゲーム見つけたから弄ってみた！」

「あ、それ……」

それは、昔兄からもらったレトロなたまご形の携帯ゲーム機だった。しまってたのを勝手に出してきたんだろう。使ってなかったから良いけど。

「これ『犬DOG』！」

いぬどーじ？ 携帯ゲーム機の中を覗きこむと柴犬のようなキャラクターが尻尾を振っている。こんなのないかった気がするから、オリジナルか。

「これでいつも一緒だって〜！ ふっふううう〜♪」

「ご機嫌ですね……。てか、一生住む気満々かよ」

「だって、他にどこに行けばいいの？ もし捕まっちゃったらかぐやちゃん解剖されちゃうかも〜」

「月に帰ればいいでしょうが。頑張って帰り方思い出しなよ」

「がんばってるけどむずかしい〜ぐぬぬ」

携帯ゲーム機をピコつかせながらのお返事、どーも。明らかミニゲームに対しての言及だろ、それ。

……まったく、もうっ。フローリングと癒着ゆちやくした背中を無理矢理引き剥がした。

「じゃあ、迎えが来るまでね」

ま、冷静に考えれば、放り出すわけにもいかないし。

「いいの!？」

「一、目立たない！ 二、許可なく外出ない！ 三、私の邪魔しない！ このルールが守れるならここにいていいよ」

「……え、じゃあ、お友達作ったりは？」

「第一項により、ない」

「……カフェについて行ったりは」

「第二項により、ない」

「……一緒に遊んだりは？」

「第三項により、ない」

「じゃあ、じゃあ、かぐやは外にも出れず、楽しみもなく、ずっとずっと、このまま幽閉されてバツドエンドって……こと？」

犬D O G Eを握るかぐやの顔が露骨に青ざめていく。

「嫌ならこの話はなかったことに」

「やだやだ、意地悪なしー！」

「ハッピーエンドには自分でするんでしょ。この状況もハッピーに楽しみなよ」

「こんな映えないつまんない家で!？」

よし、やっぱり追い出そう。そう決めて腕をまくろうとすると、スマートフォンのアラームが午後八時三十分を知らせて震えた。

しまった。この時間までに予習を終わらせるつもりだったのに、結局今日も何もしないままだ。でも、仕方ない——行かなくちゃ。

「なに？ どこ行くの？ またかぐやを置いてくの？」

しかし、私の気配を素早く察したかぐやがタツクルよろしくしがみついてくる。

「離して。どこにも行かないよ。ただツクヨミに行くだけだから」

「行くじゃん！ かぐやも連れてって！」

「無理だって、スマホがないと……あっ」

あるじゃん、こいつ。くそー、連れてくか……。あ！ そうだ、これも言っとかないと！

「四、食費は定額制！」

「増えた！」

スマホを装着して、二人で隣り合わせに座る。かぐやが私の手首を掴んできて、じんわりと温かった。

「行くよ、せーの！」



目を閉じると、宇宙を模したモーショングラフィックスが広がった。どこにも実在しない銀河を流れ星のように突き抜けると、波しぶきが立ち上がり、大きな赤い鳥居が現れる。足元には終わり

なく続く浅い湖と、その水面を滑る数多の灯籠^{あまた とうろう}。空には鳥居の色が染み出したような真っ赤な夕焼けが広がり、

「――太陽が沈んで、夜がやってきます」

巖^{おごそ}かに、月見ヤチヨが顕現^{けんげん}する。

何度見ても見飽きない仮想空間ツクヨミのエントリーだった。

ああ、改めて見ても素晴らしすぎるヤチヨのデザイン。お顔もちろん綺麗だが、海洋生物をモチーフにした和の装いと、ウミウシ形のマスコット・FUSHIを従えるその姿は、まさしく永遠の女神であり、電子の歌姫であり、ツクヨミの母であり、尊さの象徴である。

ヘビユーザーの私はこのままツクヨミへと素通りするが、初ログインのかぐやは今頃、ヤチヨとFUSHIによるチュートリアルを受けていることだろう。初めて訪れるユーザーの手を、ヤチヨは気さくに握ってくれる。そして、百点満点の笑顔を浮かべ、鼓膜に風を吹かすような涼やかな声で、

「――出かける前に、その恰好じゃあつまらない!」

と、キャラメイクウィンドウへと導いてくれるのだ。

そこから先は楽しい楽しいキャラメイクの時間である。ちなみに、私のアバターは青を基調としたストリート風。着物にパーカーとベルトとブーツを合わせて、ちょっとカッコよく仕上げたものだ。狐モチーフの尻尾と耳も付いている。自分がこの姿になったのを初めて見たとき、正直めっちゃくちゃテンションが上がった。いや、今日もかわいいなこれ。やっぱ最高かも。

さて、かぐやはいったいどんな姿でツクヨミに現れるのか。

空間にきらりと光の波紋が走った。

来る。光の中心を切り裂いて、

「うわあっ！」

金髪のギャルいかぐや姫が降臨なされた。

かぐやは朱色と若草色のコーデで、金キラの月の髪飾りや背中の巨大な水引がおめでたい感じだ。足元のスポーティかつポップなスニーカーはなんでもありの行動力を窺わせる。どうやらうさぎモチーフのようで、なだらかなストレートのロングヘアに沿って、うさぎの長い耳が垂れている。

「ヴェエエ」

そして、そのまま勢い余ってずっこける。はい、出た。ツクヨミ初ログインあるある、第一歩でまずコケがち。

「ほら、手ーかして」

「あ、もしや、彩葉？」

手を掴んで起き上がった金髪ハデハデかぐや姫が、私のアバターを指差した。その周りを一匹の犬が駆け回る。

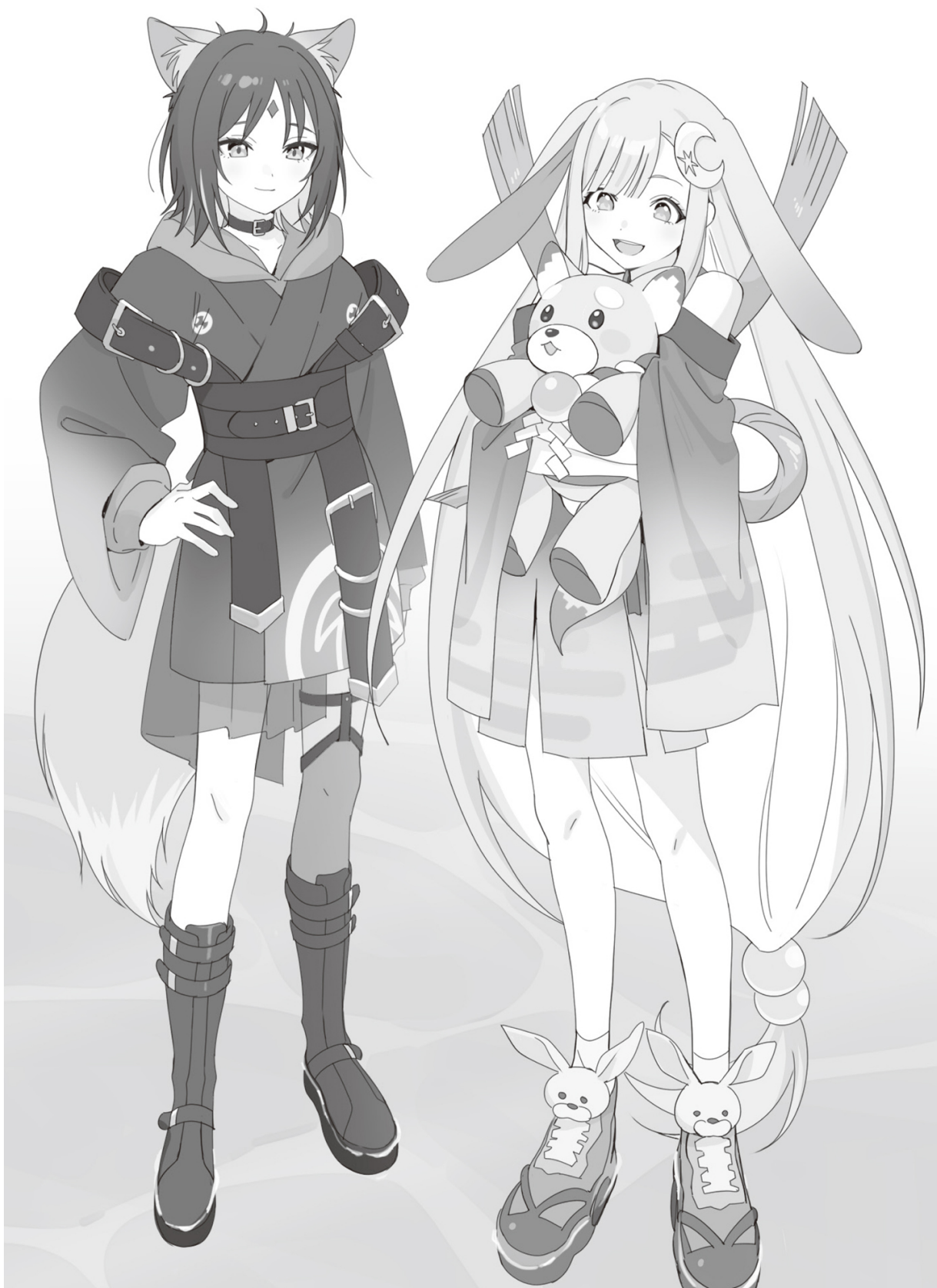
「も、もしや……」

「犬D O G E！ 連れて来れるんだね」

いや、私も初見だって。携帯ゲーム機のペットがこんな形で持ち込めるのか。さすが、ツクヨミ。何でもありじゃん。

「わー、すごいすごいすごい、これがツクヨミなの!？」

犬D O G Eを抱き上げたかぐやは、そこで初めて気付いたように仮想空間ツクヨミの常夜の街並みに目を輝かせた。



「うお、すげー！ おもしろそうなもんが死ぬほどある！」

あんぐりと口を開け放ち、棒立ちで辺りを見回すかぐや。これもツクヨミ初ログインあるあるだ。景色に目を奪われてなかなか街に入れない。確かに、仮想空間ツクヨミには七色に輝く夜景や、名物の太鼓橋、ファンタジック平安京とも呼ぶべき『和』の街並みなど見るべき箇所は無限にあるが、今日はあまり時間もないのでカフェでも寄ってお茶を濁そう。

「行こ、かぐや」

歩みを進めようとしたその時、

「――初ログインおめでとう！ ツクヨミではみんなが表現者！ 君も何かをして人の心を動かしたら、運営から『ふじゅ〜』がもらえるよ☆」

かぐやの初ログインイベントが発生し、F U S H I が現れ説明を始めた。ツクヨミ内で取引される仮想通貨・ふじゅ〜についてだ。クリエイターの作ったアバター用の服を買ったり、何かを依頼したり、はたまた応援のための投げ銭だったり、ユーザー間の取引にはふじゅ〜が使用される。現実の金銭に変換することも可能で、人気ライターなどはそれだけで悠々自適以上の暮らしができるらしい。私のような取り柄のない人間には無縁の話だけど。

それでも私がここで存分に遊べるのは、運営の提供する様々なワールドやゲームなどの体験施設、アバターを彩る多種多様なアイテムは基本的に全部無料で楽しめるからだ。基本無料を謳っているが実際は課金しなければついていけないことになる、みたいなことはここではない。ちょうど今私たちが食べている華やかなパフェもちろん無料で、

「あむっ……むぐむぐ……味しーなーいー！」

「そういうのはまだ無理みたいよ。いつか天才科学者とかがやってくれるでしょ」
てか帰れ。

「今すぐが……い……い……い……」

私にゴネられてもなー。あ、時間だ！

「始まるから！ 行くよ、かぐや！」

「始まるって、何が？ 待って、彩葉！」

「待たない。あんたが追いついて！」

我ながらウザいテンションなのは承知している。でも、胸の昂^{たか}ぶりが抑えられない。駆ける足を止められない。

だって、やっと来たんだ。私の番が。何度も抽選に応募して、外れても外れても送り続けて、当選を勝ち取ってから指折り数えて、やっと今、この時が――。

『キタキタキター！ これがないとツクヨミの夜は始まらない。本日もヤチヨミニライブの開演だ
あああ――っっ！』

そう、ヤチヨのミニライブだ。しかも終演後には……むふふ……。

時間ギリギリにライブ会場に飛び込むと、ヤチヨの大ファンを公言するMC担当ライバー・忠^{ちゅう}犬^{けん}才^{さい}公^{こう}が自らの興奮と熱狂をマイクに乗せて響かせた。詰めかけた観客が歓声でもってそれに応

える。会場のボルテージが渦となって高まる中、巨大モニターにカウントダウンが表示された。

ああ、始まる。本当に始まるんだ。

「ねえ、彩葉何が始まるの？」

「見てればわかるから！」

「5……4……3……」、会場の声と生中継を見守る声がシンクロする。そして、ツクヨミ中の人間が同時に「0」を叫ぶと、

「ヤオヨロー！ 神々のみんな、今日も最高だったー？」

現れた月見ヤチヨが、一言で会場を爆発させた。

「よし、今宵も皆を誘っちゃうよ☆ Let's go on a trip！」

こうして、圧巻のライブが幕を開け、

「幾千の時を巡って今、僕ら出会えたの——ほら、見失わないように——手を離さないで——」

会場は熱狂の海となった。

※

「彩葉！　ねえ、彩葉ってば！」

「……え？」

耳元の大声で我に返った。振り返ると、驚いた表情の金髪かぐや姫が私を見ている。もしかすると、何度も名前を呼ばせてしまったのだろうか。散らばっていた意識がゆっくりゆっくりと集まってくる。指がまだ震えていた。

「何で泣いてるの、彩葉？」

そうか、私は泣いていたのか。この涙のわけはどうか説明させないでほしい。言葉にしてみようとたちまち陳腐なものに変わってしまいそうな気がするから。

……それほどまでに素晴らしいライブだったから。歌もパフォーマンスも、ヤチヨ自身も。

そんな思いは観客共通のものであったらしい。冷めない興奮と感動が、拍手と歓声に代わってステージに降り注ぐ。その真ん中でヤチヨは大きく手を振ってファンに応えた。

「イエーイ、感謝感激雨アラモード！　ヤチヨは果報者なのです。あ、ここでお知らせ！　ヤチヨカップっていうイベントを開催します☆　FUSHI、詳細よろしく」

「はい！　参加資格があるのはツクヨミの全ライバー！　一ヶ月の期間の中だけで最も多く新規ファンを獲得した人が優勝だよ。優勝者にはなんと、ヤチヨとのコラボライブの権利を進呈！　世界一盛り上がるコラボライブステージと一緒に作れるよ！」

「うっそ!? コラボライブ? ヤチヨが?」

ヤバい、すごい声出た。現実世界のお隣さんからまた壁ドン貰ってなきやいいけど。

「コラボライブ? 何それ、すごいのか?」

「当たり前じゃん!」

また大声出しちゃった。でも、仕方ない。ことの重要さを何も理解していないかぐやに力説する。

「すごいもなにも、配信のコラボはあったけど、ライブはいつも一人で歌ってたんだよ!? 何? 誰と? これは歴史的なライブになるよ!」

「へー、じゃあ彩葉、一緒にやろ」

やれるか。やっぱり、何も理解していない。私らみたいなモブとやるわけないじゃん。大きな声では言えないが、こういうのは最初から誰になるか大体決まっているのがお約束だ。例えば――。

「バーン!」とド派手な爆音が轟いて、観客全員が注目する。

そう、例えば彼らみたいに。

ライブ会場に突然出現したのは牛車ならぬ、虎が屋形を引く虎車。早くも何者が現れたのかを察したファンたちが一斉に声を上げた。

「黒鬼^{くろおに}じゃん！」

「帝様^{みかど}ー！」

熱烈な歓声に応えるように屋形が割れる。

まず現れたのは、鬼をイメージしたスキンを纏う男性アバター。さらにその両脇をそれぞれロブのような服を着たアバターと、地雷系少女っぽいファッションのアバターが固めている。

悲鳴にも似た歓声が、ライブ会場を別種の熱狂に包み込んだ。ツクヨミで抜群の人気を誇る三人組プロゲーマーユニット、ブラックオニキス。通称黒鬼の登場である。アイドルとしての人気も博し、その活動は多岐にわたる。

「よう、子ウサギども。お前らの帝様が来たぜ」

割れんばかりの歓声の中、虎車から降り立ったリーダーの帝アキラは、不敵な笑みを浮かべながら漆黒の角を光らせた。

彼がぱちん、と指を鳴らすと会場のモニターがジャックされ、輝かしい経歴をまとめたPVが流れる。ユニットのロゴから始まり、スポンサー企業、数々のeスポーツ大会の優勝記録、ライブ映像と続く。BGMは彼らのオリジナル曲だ。

相変わらずやってんなあ……。見つからないように、私はかぐやの背中に身を隠した。別に、向こうは私のアバター知らないと思うけど。

「また、祭りが始まるな」

寡黙^{かもく}な男、雷^{らい}がフードの下から口を開く。

「俺^{おれ}って今日も作画良すぎ♡ でしょ♡」

地雷系モチーフの少年、乃^の依^いが可愛くファンサを繰り出す。ツインテールにミニスカート。一見すると女子にしか見えないが、男性アバターだ。無論、声も男。

「俺たちに優勝してほしいよな？ 底なしの夢を見せてやるぜ！」

最後に帝が決めポーズでファンの心を撃ち抜いた。破裂音と共に紙吹雪が舞う演出付きだ。

三度歓声が爆発する。もうこの瞬間に決まりである。ヤチヨカップの優勝者は彼らだ、その場に
いる全員がそう確信した。

「というわけで、俺たち優勝するから。ヤチヨちゃんコラボよろしくね」

他ならぬ、ブラックオニキスのメンバーも。

「そういう運命なら、もちろんヤチヨは従うよー」

もしかすると、主催者であるヤチヨも？

「すげー、ヤチヨと黒鬼の夢のコラボだ！」

「こりゃあ、伝説になるぞ！」

さらに、詰めかけた観客たちも。ライブ配信を見ているリスナーたちも。
たった一人の宇宙人を除いては。

「ヤあああああ——チiiiiiiii——ヨoooooooo——!」

遠からむ者は音にも聞け。近くば寄って目にも見よ。

「かぐやがヤチヨカップ優勝する! そんなで絶対コラボライブする! いろh……むぐっ」
慌てて口を塞いだけれど、もう遅かった。

こいつ、やりやがった。信じられない。あんなに約束したのに。『目立たない』、一個目の約束だったのに。辺りの人間全員が振り返ってこっちを見ていた。面白いやつがいる、そんな目で。観客たちも黒鬼も忠犬オタ公も、

「……いとかわゆし」

あまつさえ、ステージの上のヤチヨまで。

「あんたは、いつも勝手に!」

本当は逃げ出したかったけど、できない。だってこのライブは——

「ほいでわ、ライブはいったんここでクローズ♪ みんなとちよこつとお話しさせてね。さらば
〜い」

握手券つきなのだ。終演を告げると、ヤチヨは分身して会場の観客一人一人に向かって話しかけに行く。ここからは配信もなく、チケットを入手した人間だけが味わえる夢の時間だ。ヤチヨと対面でお話しして、握手してもらえる。……ヤチヨと対面でお話しして!? 握手してもらえる!?!? 信じられない。緊張で指先がすーっと冷えていくのを感じる。た、倒れそう……。

「ねえ彩葉、一緒にやろっ？」

遠ざかっていく意識を、かぐやの呑気な声に引き止められる。なんか片手もあったかい。ああ、現実でかぐやが握ってきたのか。

「だめ！ そんなのむー」

「ムリムリムリ！ 小娘が！」

無理、と言おうとしたが被せて先に言われてしまった。声の主を見やると、FUSHIだった。えっ、FUSHI？ こんな喋り方だっけ。いつもはもっとザ・マスコットの可愛げのある喋り方なような……。

「こらっ」

威嚇するFUSHIを制したのはヤチヨだった。わ!! ヤチヨだ!! 目の前に、ヤチヨがいるっ……しかも小さいバージョンだ。ヤチヨは普段は身長百六十センチくらいなのだが、たまに百三十センチくらいのちびヤチヨになっている時がある。条件不明のレア現象が発生して、興奮が加速してしまう。周りの分身ヤチヨたちは大人ヤチヨのままだった。なんで私にだけ!? 多分いつもの気まぐれなのだろう。でも……きええええ!! か! わ! い! す! ぎ! る!!

「お忘れかな? ヤチヨカップの参加はライバー限定なのです♪」

いつもより短いツインテールが、軽やかに揺れている。

「そっか! じゃーかぐやライバーになる! そうと決まれば準備準備」

かぐやは速攻でログアウトした。わ、やばい、ヤチヨと二人だ。どうしよう。

あんなに楽しみにしていたのに、言いたいことも準備していたのに。だめだ、何も思い出せないし頭の中がぐちゃぐちゃで文章を組み立てられない。このままじゃ支離滅裂な発言になってしまふ。それは避けたい。でも、じゃあどうすれば……。

「今日は楽しめた？」

「!? は、はい……っ！」

口籠もっていると、ヤチヨから話しかけてきてくれた。聞き慣れた優しい声だ。……そうだ、楽しまなきゃ。ヤチヨは、私が――ファンが楽しむことを一番喜ぶはずだ。深呼吸をして、ヤチヨの顔を正面から見据える。

「いつも、ヤチヨに支えられて……暗くて寒くて長いトンネルみたいな感じで……ヤチヨがいるから、耐えられてるっていうか……」

「はあ？ 今私なんて言った？ ぜ、前後繋がってた？ 意味不明だ……もっと気の利いたこと言はずだったのに……」

「……もっと気の利いたこと言いたかったらって、思ってる？」

「うえあ!? なんで!?」

「見透かされてる!? は、恥ずかしい……！ けど……！ ちょっとウレシイ……！」

「ふふん、ヤチヨはエスパーなのです♪」

にっこり笑って、ヤチヨはいつもみたいにおどけた。なに、可愛、死。

「ヤチヨも、おんなじだよ」

たおやかな声でそう言って、ヤチヨは小さな両手で私の手を包みこんだ。一瞬、頭の中が『!?』で埋め尽くされるが、そうだった。これ、握手するイベントだった。

「ヤチヨ、も……?」

恐る恐る聞き返すと、ヤチヨは柔らかに微笑んで頷いた。

「――むかしむかし、ひとりぼっちのウミウシは、暗くて寒くて長〜いトンネルを、ずっ〜と歩いていました。長い長い時間をそうしていて、もう疲れちゃったな〜ってとき、たくさんのあったかい光が見えたの。ウミウシがいっしょうけんめい追いかけると、光たちは集まって、とても大きなお月さまになって、ウミウシを照らしてくれました。やがてウミウシは人の姿になって、月を見守るためにツクヨミを作りましたとさ」

一言一句の意味を、頑張って咀嚼する。ヤチヨが、私のために話してくれたことだから。ウミウシ……は、F U S H I じゃないよね。たぶん、ヤチヨのことで、光はツクヨミのユーザーのことで、じゃあヤチヨは私たちのことを月だと思ってて……。

「……ヤチヨ……」

光は、ヤチヨだよ。ヤチヨが、私を照らしてくれたの。

「じゃ〜ん☆ ツクヨミ誕生秘話でした♪ みんなにはナイショだよ」

そんな設定見たことないから、たぶん私の話に合わせて即興で考えてくれたんだろう。ヤチヨは楽しそうに語ってくれたのに、涙が込み上げてきて、泣きそうになる。

「よしよし、がんばりやさんだもんね」

ヤチヨが私の手から片手を離して、頭を撫でてくれる。少しだけ身を任せそうになるが……あ、頭を!? な、ななな撫でてる!?!?!?!

「あ、くお、あ、や、やち、やち……」

く、口が回らない!

「いつも来てくれてありがとうね」

ふわあゝ嬉しゝゝゝ♡ ……い、いつも!? 認知されてる!? て、ああそうか、行動ログ見ればわかるか。ヤチヨはツクヨミにおける神さまだ。私がどこで何をやったかなんて筒抜けなのだ。は、はあ、もう限界だ。

「あの、き、今日はこれでっ。ありがとうございました!」

頭を下げて、ログアウトする。あんまり粘ってもヤチヨの負担になるかもしれない。ヤチヨは私の想像の及ばないくらい高性能だから、余計なお世話だろうけど。たくさん話せだし、握手もしてもらえた。

……顔が熱い。感謝、羞恥、しゆうち、歓喜、しやうそつ、焦燥、安堵。いろんな感情がないまぜになって、爆発しそうだった。

「またね、彩葉……」

後ろから、ヤチヨの声が聞こえた気がした。



三章

「ライバー……なり方……っと」

ツクヨミからログアウトするなり、私の目に飛び込んだのはPCで何かを検索しているかぐやだった。それはそれは楽しそうにキーボードを叩く金髪ハデハデのかぐや姫が、先ほどの余韻^{よゐん}を吹き飛ばしていく……。

「って、あれ、なんでまだ金髪なの？」

「えっ、だめ？　じゃあ——えいっ、えいっ、えいっ！」

えいっ、の度にかぐやの髪色が変わっていく。緑、赤、白、ストライプ、マールを経て、
「やっぱ、これっしょ☆」

最終的に元の金髪に戻ってドヤ顔で手櫛^{てぐし}を通した。ちょっとインパクトありすぎる。私まだツクヨミにいる？　ちゃんと現実に戻ってきてるよね？

「……理解の範疇^{はんちゆう}超えし宇宙人」

何かもうどうでもよくなった。私は怒りも忘れて勉強机で参考書に頭を突っ込むのだった。

ああ、それにしてもヤチヨのライブ最高だったな……。

……ヤチヨと、話して、握手しちゃったし。あの、ヤチヨと。感触も温度もなかったけれど、心は確かに手のぬくもりを感じていた。

※

「ありがとうございますー」

B A M B O O c a f e の常連客を笑顔で見送り、返す刀で別テーブルのお客様のもとへ駆けつけた。ご注文をキッチンに伝える道すがら空いた皿を下げ、元気にすっ転ぶみおちゃんが飛ばした皿も一つ残らずキャッチして、全部まとめて食洗器へ放り込む。B A M B O O c a f e 名物のピークタイムは今日も戦場のごとき忙しさである。

……ああ、落ち着く。

戦場だろうが修羅場だろうが、かぐやのキンキン声が聞こえないだけで若返る思いだ。

鼻歌交じりにピークタイムをやり過ごしてスタッフルームに引っ込んだ。パイプ椅子で一息ついてからスマートフォンの電話帳を呼び出す。

「おじいちゃん、私、彩葉いろはですー。今月も仕送りおおきに」

「何言うとるんや、あれや足りひんやろ？」

電話口で聞くおじいちゃんの声は、孫の声が聴ける嬉しさより心配が勝っているように思えた。仕送りは、生活費とは別の口座に入れて手付かずだ。おじいちゃんとおばあちゃんには悪いけど、ちっぽけな自尊心を守るためにはこうすることしかできない。

父方の祖父母には、事情を説明して私の上京の後押しをしてもらった。二人も最初は反対していたが、私がどれだけ本気なのかを何度も何度も伝えて納得してもらった。

——私、このままやったらなんで生きてるんか、わからんようになってしまふ。お母さんにも……お父さんにも、胸を張っていられる人間になりたいんです。

母が祖父母には強く出られないのを、私は知っていた。自分の両親に置き去りにされた母は、幼いお父さんを施設から引き取って立派に育てあげたおじいちゃんとおばあちゃんのことを、心から尊敬しているのだ。私は、それを利用した。そうでもしないと母は絶対に認めてくれなかっただろうから。

「いや、ほんまにありがたいわ。身に沁みました。……進路も決めたさかいあとでお母さんに伝えといて」

「ワシがか？ まあええけど。最近あれか、あんまり話してないんか？」

「んー、あんまり連絡来うへんくてさ。これがちょうどいい距離感なんかも。じゃあ、おじいちゃんも元気だな。おばあちゃんにもよろしゅう言うと言って」

なるべく元気に聞こえるように声に張りを利かせて電話を切った。

―母 不在着信（5件）

そして、画面が目に入らないように顔を背けながらスマートフォンを鞆にしまう。逸らした視線が壁のカレンダーを捉えた。

給料日まであと一日、いつの間にか一学期が終わっていた。

「よしっ！」

アルバイトから帰るなり、私は隆々たる気合を込めて夏休みの予定表を壁に貼り付けた。勉強の赤文字とアルバイトの青文字がパズルのように緻密にマスを埋めている、我ながら文句のつけようのない完璧な予定表だった。

「な、なにこれ〜」

なのに、かぐやがへろへろの声で文句を呟く。^{つづや}

「何って夏休みの予定表だけど。一日も無駄にできないから邪魔禁止ね」

「やだー！ かぐやと遊んで〜〜？」

そうくると思ったよ。

「追い出すよ……？」

私は鬼のような眼光で腰にしがみついかぐやを撃ち抜くと、

「あと、あれらは……？」

四畳半の一角を埋めるガラクタ群にもついでに照準を合わせた。見たことない変なキャラクターのぬいぐるみ、使い方のわからないおもちゃ、そもそもなんなのかさえわからない物、もの、モノ……。

「配信用の小道具たち！ 全部百均だから安心だよ！」

「配信って何？ 本気でライバーになる気？」

「もちろん！ ヤチヨカップで優勝するには、まずライバーにならないと。ねえ、見て。もう配信も始めたんだろ、どう？」

自信満々にPC画面を開いて見せるかぐや、手作りの下手くそなイラストが不気味に手を振っていた。

『かぐやっほー！ 月からやって来た、かぐやだよー。今日はやること思いつかないからこれで終わり！ じゃあねー………ん？ これで切れてるのかな？』

……後半は、実写画像に切り替わりながら。

「おいおいおいおい。最後インカメになってんじゃん、顔映ってるって！」

クオリティの割に再生数回ってると思ったらそういうことか。もちろん、ばっちりリスナーに見つかっているようで、『インカメw』『ヤチヨのライブにいた子？』『かわいくね？』とばっちり

コメントが残されている。まあ、手遅れなのはもういいや。それよりも、気になるのは動画のバックで流れている……何、この不協和音？

「ジングルだよ」

……ジングル？ 軽やかなメロディでリスナーの印象に残ることを目的とする、あのジングル？
「オリジナルで作ったの」

そうだろうな。こんな不安になる音源、フリー素材ですら落ちていないはずだ。

「って、待って。どうやって曲を作っ……あ、私のキーボード！ 勝手に出さないでよ」

もしかと思ったら案の上だ。私が昔使っていた六十一鍵のキーボードがガラクタの山に半分埋もれながら顔を出している。

「あ、その感じ。彩葉もしや弾けるね？ 全然うまくいなくてさ、いっちょお願いしますよ、先生！」

私のリアクションから腕前を察したのか、かぐやは上に乗ったガラクタたちをズサーッと弾き飛ばして電源を入れた。

「はあ？ 何で私がそんなこと」

「お願い☆」

慣れたもんで完璧なウインクをかましてくるかぐやだ。くっ、甘え方のバリエーションばっかどんどん増やしやがる。ああ、物もか。

「そもそもまずコードってのがあって……」

諦めて昔日の鍵盤に指を伸ばし、手元で旋律を作ろうとすると、

「あ……」

胸の奥で何かが弾けた。それは、私がずっと閉じ込めていた記憶。

『彩葉、音楽は自由に楽しむんで』

お父さんの言葉。幼い私は笑っていた。私がピアノを弾く時は楽器の音よりも笑い声の方が部屋に響いていた。隣でお父さんも笑っていた。お兄ちゃんも母も笑っている。母はいつから笑わなくなったのだろう。

きつと、お父さんのお葬式からだ。あの時から母は感情をあまり表さなくなった。お人形のように棺に収まったお父さんを、泣きながら見送る私。顔色一つ変えない母。

―ねえ、何で私は一人で泣いてるの？ お母さんは……悲しくないの？

ふと、我に返るとかぐやの期待に満ちた瞳が私を見つめていた。

いつの間にか、嫌になった音楽。遠ざけたピアノ。変わってしまった母の言葉。

―形無しで成功するんはホンマに一握りや。楽しんでる場合やあらへん。お父さんからもらったもん、遊んで食い潰すんか。

ええい、トラウマになどしたら母の思うつぼ。いったれ。

手が震えたのはほんの一瞬だった。一度白鍵に触れた指先は、草原に放たれた鹿のように鍵盤を駆け回る。

「わあ……」

音楽が溢れ出した。

キーボードからではなく私の中から。指が止まらない。一音が次の一音を導き、また次の一音を呼ぶ。指が鍵盤を弾くたび心にのしかかっていた重しがボロボロと崩れていく。

「彩葉、すごい！ 何、この曲？」

心の檻を破壊した指が掬い上げたのは、記憶の底にしまっていたメロディ。まだ音楽が好きだった頃の私が作った曲。

「ラ……ララ……誰も止められ——はしない——歌わずにいられ——ない」

かぐやと一緒に歌ってくれた。

即座にリズムを掴み、メロディを感じて、即興で歌詞を乗せている。

何て綺麗な声だろう。何て美しい歌声だろう。全身の細胞が潤うような、心に春風を吹かすような歌声。

「イエー！」

気が付くと一曲丸々弾き切っていた。鳥肌が全身を駆け抜けた。手はまだ震えている、恐れではなく興奮で。久しぶりに、本当に久しぶりに心から楽しいと思える演奏だった。その思いはかぐや

も同じだったようで、

「やっぱー、これ彩葉が作ったの？　すごすぎ！」

興奮に目を輝かせ、手を叩き、ぴょんぴょんと飛び回り、

「彩葉、プロデューサーになって！」

最後に綺麗なターンを決めて、とんでもないことを言い出した。

「は？　プロデューサー？　何で？」

「だってだって！　今、ヤチヨカップ暫定一位の黒鬼くろおにって三人組なんだよ、ズルくない？　かぐや

なんて一人で頑張って八千位なのに」

素早くノートPCを開き、ヤチヨカップの暫定順位を示して見せるかぐや。高らかに優勝宣言をしてみせたかぐやの順位は現在八千九百十位。なるほど、優勝なんて夢のまた夢だ。

「だからさ、一緒にやろ？　彩葉の曲を私が歌えば大バズ確定じゃん！　このボロアパートから伝説が始まる！」

ボロアパート言うな。

「無理です。作曲なんて時間な——」

——いこともないか。昔に作った曲をアレンジするだけなら今の私でもできるし、むしろいい息抜きになったりして……楽しかったしな。

なんて揺らぎを見せてしまえば終わりである。そんな大隙を、宇宙一の甘え上手が見逃すはずがない。

「お願い、彩葉。このまま終わリたくない……ハッピーエンドにしたい……な？」

涙を浮かべ、鼻をすすり、両手を握り締め、それはそれは完成度の高い可哀想な子を演じて、超必殺のおねだり顔を決めてくる。

……いや、それ。ズルくない？

絶対ダメ！ その手はくわん！ 邪魔しないならここにいていいって言ったでしょ！
言うべき言葉は次から次に頭に浮かんでくるけれど。

「ちょっとだけなら、いいけど……」

すでにKO済みの私の口からは、こんな負けセリフしか出てこなかった。

※

そこから、かぐやの快進撃が始まった。

当たり前の話だが、宇宙人のかぐやは配信のことなんて何もわからない。

だから、思いついたことは片っ端からやっていく。後追いだとか、二番煎じだとか、気負いだとか、照れだとか、そんな言葉はかぐやの辞書には存在しない。

宇宙人の思考は至ってシンプル、

「この動画のダンス可愛い〜。かぐやもやーろおっと♪」
である。思いついてから実行するまでのタイムラグがない。

「うひょ〜、芦花ろかの言う通りにメイクしたら自撮り爆盛できちゃった。はい、これもアップ！
いでに全然盛れなかったNGバージョンもアップ〜♪」

芦花に教えてもらった自撮りも、

「やった、真実まみおすすめのお店のお取り寄せが届いた！ 緊急で動画回しちゃいまーす」

真実直伝の食レポも、

「あー、そういうのどうでもいい！ キッチリ片を付け！ 忘れる！ 忘れるって人生で一番大切な能力だからね！ や、甘いこと言って責任とらないやつにはなりたくないし！ それがかぐやのやさしさ！」

ヤチヨの真似をしたお悩み相談も。

やりたいことに躊躇ちゅうちよしない。それがかぐやの流儀だった。

昔、母が言っていた。夢を阻はばむ最大の障壁は才能の欠如ではなく積極性の欠如だと。

その言葉が正しいかどうかはわからないけれど、

「よーし、今日はゲリラで歌枠配信だー！ 新しい衣装着てー、新曲歌ってー、振り付けも最後まで決まっていけどやっちゃんお〜」

少なくともかぐやにとっては、壁などまるでないように見えた。

「ねー、ねー、彩葉も歌枠しよ。一緒にツクヨミに潜って伴奏して〜」

やだよ。しないよ。勉強するよ。まったく。快進撃は結構だが、私を巻き込むことについては少しくらい躊躇してほしい。

だってー。

「見て、彩葉。バトルと演奏が同時に出来るキーボードを作ったの！これで歌枠の演奏しながらゲーム配信もできるよ。一緒にやろ」

やだよ、しないよ。バイト行くから。

「彩葉、彩葉！今日は料理動画作るんだ。ガパオライスだよ。食べるだけでいいからコラボしてよ」

やだよ、しないよ。勉強するから。

「いーろはっ！一緒にダンスのショート動画撮ろっ」

しないしないしないしない。勉強する、バイト行く。

「ねーねー、やろうよ。一分で済むよ。芦花もやるって言ってくれてるよ。ねえ、芦花？」

「うん、面白そうじゃん。真実もやるよね？」

「やるやるー。彩葉はどーするー？」

……ほら、こうなった。

こうなるのがわかってたから嫌だったんだ。いつかは断り切れなくなることがわかってたから。かぐやの周りを巻き込む力はブラックホールレベルなのだ。

「撮れたー！ 見て見て、彩葉めっちゃ可愛い。はい、これもすぐにアップ
はい、ストップ。これは絶対にアップ禁止だから。」

こうして、勉強とアルバイトという鉄壁の予定にいつの間にかぐいぐいと食い込んで『かぐや・
いろP』の配信活動は、日を追うごとにリスナーの耳目を集めていき、夏休みも中盤を迎えるころ
にはその順位を二百八十位まで上げていた。無名のド新人にしては大健闘だと思うけれど、

「まだまだ足りない！ どうすればいいのー！」

欲張りな姫様は全然納得していないご様子だ。砂浜に広げたレジャーシートの上で、ゴロゴロと
転げ回って不満を見える形で示している。

「s'づじょうじだ,s'い——!!」

かぐや、芦花、真実、私の四人で海に来た。知らぬ間にかぐやと芦花で水着を買いに行っていた
ようで、かぐやは宇宙人生初水着、芦花は新調したようだった。真実と私は去年と同じ水着での参
加だ。

「かぐや、暴れない」

せっかくの芦花のスタイリングだ、崩すわけにはいくまい。降り注ぐ陽光をそのまま身に纏った
ようなオレンジ色の水着は、ツインテールに纏められたかぐやの艶つややかな金髪と相まって、浜辺で
輝くもう一つの太陽のように見えた。私の水着は、パステルグリーンのセパレート式で、ホルター

ネックだ。芦花が外跳ねのポニーテールにしてくれて、確かにこの水着にはこの髪型がぴったりだと思った。それにしても、去年買った水着が今年も使えてよかった。せいぜい年一、二回くらいしか着ない服に許せるギリギリの、できるだけ手頃な価格のものを選んだが、それでも断腸の思いの出費だった。お前にはあと数年は頑張ってもらおうからな……。

「こないだの歌配信めっちゃよかったけどねー」

「ね、かぐやちゃんゲームも歌も上手いよね」

ああ、甘やかさないで真実、芦花。

「まあね。天っ才、歌姫ですから」

ほら、調子に乗った。かぐやの伸びた鼻が入道雲を貫くかのようなのだ。

「オリジナル曲もよかったしさ」

「わかるー。あれ彩葉が作ったやつなの？」

「彩葉、可愛い上に天才すぎー」

おっと、二人の称賛がこっちに向いてきたぞ。真実は去年彼氏と買ったらしいガリーなチェツクのオフショルに水色のフレアスカートの水着を纏い、夏バテ知らずで三皿目の焼きそばを啜^{すす}っている。芦花はツクヨミでのアバターのような太めの三つ編みに黒のワンピース型水着だ。胸元から肩を通して背中まであしらわれたバイカラーの大きなフリルが大人っぽくて、芦花に似合っている。去年はお嬢様っぽい白のセパレート水着にシアアのボレロを羽織っていた。あれも似合ってたけど、結局何着ても似合っちゃうんだな。すでに他の三人のヘアアレンジを完成させた芦花は、せ

っせと真実の髪の毛を結ってあげていた。編み込みをお団子にしている、結構手間がかかっていそうだ。

「あ、あれは昔に作ったやつだから……」

ニヤつく親友たちから目を逸らすと、凶暴な太陽の光に目を焼かれた。思わず頭にかけていたスポーツサングラスを正規の用法で使う。

波の音、潮の香り、そして、眩しい日差しの中で交わす、普段通りのくだらない会話。夏の海は、耳にも鼻にも目にも楽しい。無理をしてもビーチに繰り出して来て正解だった。勉強とアルバイトと配信活動に埋め尽くされた夏休みの、たった一日の遊びの時間だ。この一日を捻出するためにどれほどの睡眠時間が削られたかは、もはや言うまい。疲労を感じないと言えは嘘になるが、倒れでもしたら楽しい時間が辛い思い出になってしまふ。いっそう、気を張った。

——ほんまのエリートは遊びも疎かおろそにせえへん！ 仕事だけで満足した気になってるやつは話にならん。

母の言葉を真に受けたわけじゃないけれど、芦花と真実の誘いに乗って本当によかったと思っている。……あの頃のお母さんは、楽しそうだったな。

「ぐわあー。でも、やっぱり優勝したい！ こんなんじゃないよー」

うるさいなあ。満ち足りてる横で騒がないでよ、宇宙人。

「芦花くどうすればいいく？」

「うーん、もう結構色々やってるみたいだしなー」

かぐやと頬を引っ付けるようにして、スマートフォン画面を覗き込む芦花。かぐやの甘えられる人間を嗅ぎ分ける能力はピカイチだ。

「はいはい！ 私あるよ、ナイスアイデア。いろP初登場配信は？ これまで正体を隠していた彩葉がついにベールを脱ぐことにより新たな需要を――」

「はい、却下」

言い終わらないうちに、ピンと伸びた真実の手を引っ張り下ろした。

「えー、なんでー」

「何でじゃないの、私は絶対に配信には出ないから」

「え、出てるじゃん。このキツネの着ぐるみって彩葉だよね」

「……ぐっ」

鋭いな。貝殻パーツを散りばめた芦花のビーチネイルが、スマートフォンのサムネをこんこんと叩いていた。

そうなのだ。実は、かぐやの押しに負けて何度か配信に出してしまったことがある。でもでも、賑やかし程度だし、喋ってもいないし、着ぐるみも着ているから、セーフってことで……。

「と、とにかく、私は出ないから！」

こうなったらもう、大きな声を出すしかない。ホールスタッフ仕込みの腹式発声でNOを突きつける、と、

「そんなのヤダー！ 一緒出てー！ 新曲も作ってー！ 伴奏もしてー！」

わがままか。なんで断ってる人に対して二個も要求付け足せるの。

「……………ねえ、彩葉」

マズい、来る。素早くかぐやの超必殺技の発動を察して丹田^{たんでん}に力を込めた。

「このままじゃ、優勝できない……………」

はい、来た。そんな哀れな声を出されたってもう知らないからな。

「かぐやのこと助けて……………」

潤んだ目で見つめられたって聞いてあげない。

「彩葉に、演奏してほしい……………」

絶対に嫌。

さあ、言うんだ、私。三、二、一、ハイ！

「ま、まあ、時間が空いてたら……………ね」

「よしやー！ もっともっと配信するぞー！」

くそう。なぜ、言えない。なぜ、断れないんだ。

——頼み事なんて簡単にすることやない。憐^{あわ}れまれていいんか、彩葉。

「ちよろはー」

「ちよろはだねえ」

天に拳を突き上げるかぐやと地で白砂を握る私、そんな対比を眺めながら真実と芦花は花のような笑顔を咲かせた。ねえ、笑いごとじゃないんですけど。

「彩葉、明るくなったねー」

……え、真実？

「突然ふって、いなくなっちゃいそうだったもんね」

芦花も。

「かぐやちゃん、どんな魔法使ったんだろ。ちょっと悔しいけど、本気で応援したくなったかも」
波打ち際で波と遊ぶかぐやに複雑な視線を送りながら、芦花が髪の毛をかき上げた。え、まさか……。

「コラボ、しちゃおうよ」

「いいね」

美容系インフルエンサー『ROKA（ファン数十七万人）』と、グルメインフルエンサーの『まみまみ（ファン数十二万人）』と、かぐやが……？

「見て見て、彩葉ー！ 蟹、岩場にいた。いっぱい集めて軍隊作る！」
やってる場合か。ああ、また調子乗るんだろうな。

当の宇宙人は、やっぱり目の前のやりたいことに夢中だった。

※

人気インフルエンサー二人の後押しを受け、かぐや・いろPの注目度はうなぎのぼりに高まった。

だからといって、私は勉強とアルバイトの日々に戻るだけだが。

一方のかぐやは配信モチベーションがブチ上がったようで、今まで以上のハイペースで激辛食品実食動画、恵方巻一口食べ切りチャレンジ、自作ペットボトルバズーカ発射動画といった……変な動画ばかり上げてるなあ、もう。

普通に歌枠配信とかやらないの？　なんて聞いてしまえば私の負けだ。

「じゃあ、彩葉演奏して？」

って返されるに決まっている。でも、黙っていれば黙っていればで、

「彩葉、今日の夕飯はビーフシチューだよー。ち・な・み・に、明日の歌枠配信いろPが三十分伴奏してくれたら、百五十時間コトコト煮込んだタンシチューにアップグレードされるけど……どうする？」

などと人類には到底拒否できない取引を持ち掛けてくるから厄介だ。てか百五十時間かかったら少なくとも今日の夕飯にはなんないじゃん！

まったく、宇宙人のくせに馴染みすぎじゃないだろうか。こんな陽キャなかぐや姫がいてたまるか。

「みんなー、今日の歌枠は久しぶりにいるPが演奏してくれるよー。バイヴスが高まったらワンチヤン着ぐるみ脱ぐかもだから、みんなばっちり盛り上げてねっ！」

適当なMC入れないで。これは絶対に脱がないから。

まあ、かぐやの歌に合わせて演奏するのは楽しいけどさ……それでもやっぱり私にはエンターテインメントは似合わない。こうやって歌っているかぐやを裏方として横から見ると、いろいろがちょうどいい。

「みんなー、かぐやのこと好きー??」

かぐやは、キラキラだった。煌^{きら}びやかなツクヨミの中でも一際輝いて、見た人みんなを楽しませて虜^{とりこ}にしてしまう。絶対に本人には言わないけれど、アイドルになるために生まれてきたんだと思う。たまに私と目が合えば、

「彩葉、今日は何食べたい？」

集中しなよ。ほら、間奏後の入りミスった。

「えへへ、やっちゃった☆ 逆に神回かな？」

——本当にズルい。

ちなみに、芦花と真実はというとすっかりかぐやに取り込まれたようで、三人で集まってはせつせとゲーム配信なんかやってるようだ。もちろん、かぐやはゲームのことを何も知らないのです、

「芦花ー、真実ー、教えて？」

である。

私に聞かなかったのはかぐやなりに遠慮しているのだろうか。ありがたく勉強に励ませていただくが、私たちはワンルームで同居しているのでどうやったって配信の声は聞こえてくる。

「今、流行ってるのは、何と言っても『KASSEN』！ ツクヨミでプレイできるゲームなんだけど、同じくKASSENって名前のモードもあって、そっちは七対七のバトルロイヤル！ 今日やるのはSENGOKUってモードで、基本は陣取り合せ……って、うわー、ごめん、死んじゃった」

え、もしかしてプレイ中に説明受けてるの？ そんなゲームじゃないでしょうよ、KASSENは。

「あー私も」

「えー、芦花も？」

言わんこっちゃない。まあ、私には関係ないけれど。

「ヤバイヤバイ！ これ卑怯じゃん、こっちはかぐや一人なのに。うおー、地獄だ。息できない。これ、ボタン何？ どれが攻撃？ どれが攻撃？ 教えてよ。何か出たし。うわー、勝ったわ」
勝つんかい。でたらめすぎる。

「おー！」

「かぐやちゃん筋いいねー」

だから、甘やかさないでってば。まあ、私には関係ないけれど。

関係ないので次の日も眠気をエナジードリンクで叩き殺して勉強に没頭していると、

「彩葉！ 助けて！」

いきなり背後から抱きつかれて死ぬほど驚いた。何よ、いったい。

「このままじゃ、かぐや結婚しないといけないの」

ちよつと目を離してる間に何があった。

「なんかー、創作料理の配信してたはずだったんだけどー。求婚コメントが殺到してさー。めんどくさいからゲームで勝ったらいいよーって言ったら、今めっちゃ追い詰められてんの。彩葉代わりに戦ってー」

いやいや、急展開すぎるだろ。

「むーり」

「『SETSUNA』ってやつ！」

KASSENの対戦格闘ゲームモードだ。一対一で戦い、相手の体力ゲージを二本先取した方が勝ち。

「あつという間に一本取られて、二本目も……あ、もう死にそう」

「今、対戦中なんかい！」

しまった、ついコントローラーを握ってしまった。違うから。これは放置が許せないというゲーマー魂に火が付いただけで、決してかぐやの結婚を阻止したいというわけじゃなくてー。

「彩葉、何か言った？」

「何も言っていない！ おらあ、六十八ヒット！」

いろP怒濤の二十八連勝でリスナーを蹴散らし、若干の炎上を起こしつつ雑談配信の幕を閉じた。さあ、勉強の続きだ。文句のあるやつはいつでもかかってこい。

なんてドタバタするうちに、かぐや・いろPはグイグイとヤチヨカップの暫定順位を上げていく。それに付随して集まってくるのが、

「うひひひひ、ふじゅーがこんなに。うひひひ」

ファンの方々からのありがたいお布施である。

更にふじゅーはユーザーの脈拍や脳波をスマコンで検知し、感情がポジティブに動いたと判定されれば運営から支払われる仕組みになっている。それだけたくさんの方の心を動かしたということなのだが……。

「うひひひ、大判小判がザックザック」

露骨に調子に乗るとるな、この宇宙人は。

「あのね、かぐや。こんなのは所詮あぶく銭、水物なんだよ」

一応釘は刺しておくものの、

「でもー、合法でございましょう？」

そうだけどもなんかム力つく。

「せめて部屋は片付けてよ」

配信用のガラクタが加速度的に増えていくのは何とかしてほしい。四畳半のアパートは足の踏み場はおろか、息を吸う場所すらないほどだ。

「えー、無理だよー。この部屋狭すぎるもん。引っ越そうよ、いい物件見つけたんだ」

「マジで言ってるの、それ……」

「大マジ！ あ、でも、その前に――時間だよ、彩葉」

「ああ……うん」

わかってるよ、もちろん。ていうか、数時間前からほとんどそのことしか考えていない。

「まずは大掃除だー！ おりゃあああ！」

ブルドーザーのようにガラクタを壁際に追いやるかぐや、何とか二人分のスペースを確保して私に向かってピースサインを決めてみせた。それ掃除じゃないからね。

その後、かぐやは動きやすい服に着替えて柔軟体操からの発声練習、そして、謎のダンスで気合を入れてから、

「じゃ、行こっか、彩葉」

楽しくて仕方がないといったふうに関心を見せた。

今日はかぐやの初めてのソロライブ。いつもの歌枠配信ではなく、ツクヨミ内のライブハウスを予約して、宣伝を打って、スタッフを雇って、お客さんを入れて行う真正銘のコンサートである。

「……本当に私も行くの？」

伴奏はかぐやたつての希望で——いろP。

着ぐるみは着ていいし、しっかりとギヤラも支払われるというのでアルバイトも休んでOKしたけれど、本当に私でいいのだろうか。かぐやの記念すべき初ステージ、その横に私がいて、

かぐやはそんな私の不安を溶かすようにますます笑顔の輝度を上げ、

「来て。い・ろ・は！」

目潰しでもするようにじゃんけんチョキを突き出した。おずおずと私も同じチョキを突き出して互いの指をくつつけてから挟み合う。それからキツネのキス。かぐや考案のハンドサイン。覚え方は、

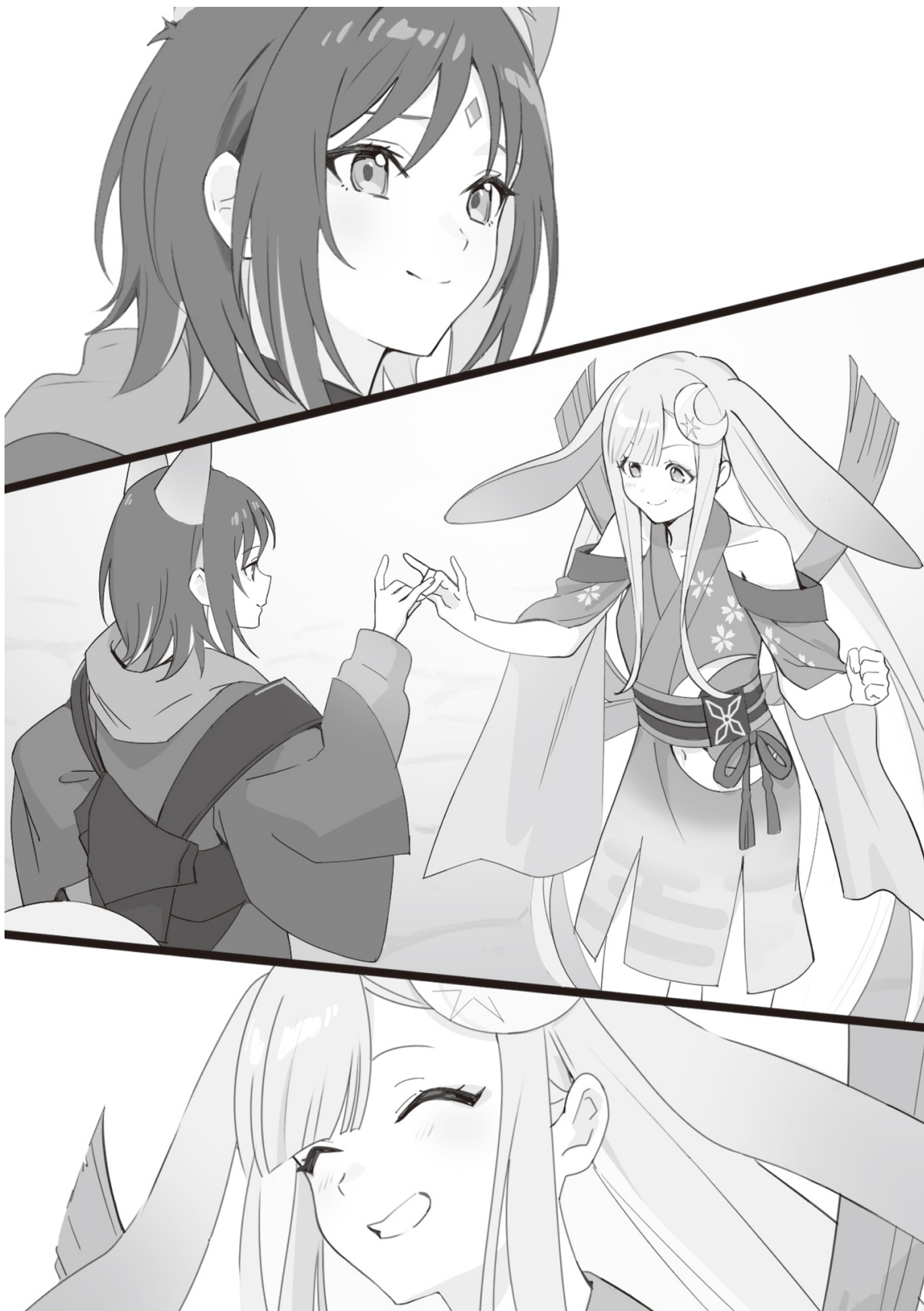
「ピースからの、チョッキンからの、こんっ！」

である。

「かぐやと彩葉の合図。仲良しのやつ♡」

ということらしい。照れくさくはあったけれど少しだけ緊張は楽になった。

指を繋ぎ合いながら二人同時にツクヨミに潜る。瞼を開くと、いつも一緒の犬DOGEが元気に私たちを迎えてくれた。



かぐやは、どこまで行くんだろう。私は、どうして隣にいるんだろう。

「間もなくです、五秒前！」

スタッフさんの合図が飛ぶ。

幕が上がる。

熱狂が押し寄せる。

ヤチヨの見た景色のほんの一部が垣間見えた気がした。

※

「彩葉、こっちこっち♪」

かぐやの初のソロライブは大盛況のうちに幕を閉じた。

SNSには数日たった今でも肯定的な反響が乱れ飛んでいる。そんなエネルギーに撃ち出されるようにかぐや・いろPのランキングは跳ね上がり、その余波を借りるようにかぐやは私を外に連れ出した。

「買い物に付き合って」、そう言って私の腕に自分の腕を絡め、散々寄り道した挙げ句にスキップで導いた先は――。

「え、不動産屋？」

「ねえねえ、こことかどう？」

物件探しを買い物として括るんじゃないよ。かぐやがネイルの乗らない人差し指で示したのは、不動産屋が大威張りで表通りに張り出した自信満々の看板物件。

〈極上空間を味わうデザイナーズタワーマンション 3LDK 家賃三十五万円〉

……眩暈めまいがした。こんなとこ住んでたら人間おかしくなるって。

「いいじゃーん。かぐやが出すからさー。見て、マンションなのに二階があるんだよ。二階がかぐやの配信部屋兼寝室ね、一階は彩葉が自由にしているから。ねえ、いいでしょ。吹き抜けで、システムキッチンでパントリーにバルコニーだよ！ しかも、最上階！」

「もう酔いそう。保証人もいないし、こんな小娘どもに貸してくれるわけ」

また眩暈に襲われる。とりあえず、かぐやを不動産屋から引き離そうとして……あれ、足元がフラついた。おかしいぞ。視界も歪む。立ってられない……嘘、これ物件酔いじゃ……ない……。

「ほえ？ なんかみつけたのー？」

気が付いたら膝から力が抜け無意識にしゃがみ込んでいた。

「大丈夫？ 彩葉、身体アツアツだよ？」

冷や汗が止まらない。かぐやの心配そうな声がやけに遠くから聞こえていた。

「……」

気が付くと、私はいつもの部屋でいつもの布団に寝かされていた。

なんで、家にいるの？ 不動産屋から家までの記憶が全くない。もしかして、かぐやが運んでくれたのだろうか。力強っ。いや、あいつ金持ちだしタクシー使ってるか……。

慎重に慎重に首を回すと、台所に立っているかぐやの後ろ姿が見えた。

……髪の毛、伸びたな。真っ直ぐな金髪がお尻を隠すほど伸びている。初めてここでオムライスを食べてた時は背中くらいまでだったのに……ん？

「違う！ ヤバい……バイト」

慌てて跳ね起きようとしたけれど、布団にしがみつかれているかのように身体が持ち上がらなかった。

「彩葉、しんどい？」

「平気、すぐ出るから」

駆け寄ってきたかぐやに強がってみせたがやっぱり身体が動かない。これはちょっと本当に無理なのかもしれない。せめて休む連絡を入れないと……。

「バイト休む連絡入れといたから。彩葉、もう休んで」

「……え、かぐやが？」

「あと、いっぱいふかふか置いといたから、いっぱいふかふかしてね」

「ふかふか？ ああ、ふかふかか……」

曇った眼鏡をかけたような視界で見回せば、選りすぐりのふかふかぬいぐるみたちが布団の周りを包囲しているのが見えた。

「……ありがと」

ぬいぐるみの一つを抱き締めてそう言った。まさか、かぐやがここまで気を回してくれるなんて。素直に嬉しかった。

「あっ、あと病院！ 病院行こつ、一緒に」

「え、病院？ ……は、お金かかるからやだ」

「そんなもん、かぐやに任しときっ」

お玉を握った左手で力こぶを作ってみせるかぐや。でも……。抱き締めたぬいぐるみにぎりりと爪が食い込んだ。

「やっぱり、無理だよ……」

この熱では下手をすれば入院だってあり得る。そうになったら、

「全部ギリギリで予定組んでるから……何日も休んだら、もう追いつけないよ……そしたら奨学金も……出ないかも……」

身体が弱っているせいだろうか、悪いイメージが連鎖する。考えすぎだとわかっていても止められなかった。

「彩葉……」

そんな私をかぐやは潤んだ目で見つめ、

「何で彩葉は、そんなに一人で頑張らないといけないの？」

生まれて初めて聞くような弱々しい声を漏らした。

「うっ、うっ……かぐやのせい？ かぐやもめっちゃ無理言っちゃったし……彩葉あ、死んじゃったらヤダあ〜」

嘘、泣くの？ みるみるうちにかぐやの大きな瞳に涙の膜が張り、眼球を押し流すかのように流れ出す。そこから先はもう洪水だ。水の出る穴全てからいろんな液体が溢れ出した。

「お、大げさな……死にやしないよ」

「だって、映画とかだと人間ってすぐ死ぬじゃん！ そんでゾンビになって生まれ変わって転生して宇宙に旅立って……わー、彩葉行っちゃやだー」

「何個の映画がごちゃ混ぜになってるのよ、大丈夫だから」

感情豊かなかぐやだけど、ここまで泣いたのは初めてかもしれない。

さすがに、今日は勉強もやめとくか……。

なぜか病人の私が看護人のかぐやの背中をさすりながらそう思った。

『何で彩葉は、そんなに一人で頑張らないといけないの？』

泣き止んだかぐやは、改めて私にそう尋ねた。それを説明するのはとてもとても難しい。熱に浮かされていればなおさらだ。一からちゃんと伝えようと思うと母との話を避けては通れない。

「うーん、うーん……」

黙っている私を見て、かぐやは何を言うか悩んで、言いかけては取り消すのを繰り返していた。宇宙人も困っていることあるんだ。その様子がおかしくて、少し気が楽になった。私の隣で膝を抱えるかぐやに、ぽつぽつと語った。

死んじゃったお父さんの話、出て行ってしまったお兄ちゃんの話、変わってしまった母の話、正しさに潰されそうになった私の話。母ならきっとこんなふうに体調を崩したりなんかしないんだろう。

——体調管理は全ての基本や。ここで躓くやつはどんな阿呆あほうよりも下や。

実際に、私は母が風邪を引いているところを見たことがなかった。母は誰よりも正しくて強く完璧で、母から見れば私はずっと何かが足りなくて。

だから私も出て行くことを選んだ。母が出来たこと、母が通った道を、一人で正確になぞることができて初めて私は母と対等に向き合えるのだと思った。

「……それで、私が一人で学費も生活費も賄うならって、やっと折り合いついたんだよね」

「えらい簡単に言ってるけど、みんなそんなことしてなくない？」

かぐやが隣で眉を顰ひそめる。

「お母さんはそのくらいのこと平気でやってたし、私も譲らなかつたし。最初にここで目を覚ました時のことよく覚えてる。何にもないし、誰にも頼れないけど、自分の力で生きるんだって思ったらめっちゃ力湧いてきた。なんかラッキー……みたいな？」

あの日は、本当に清々しい朝だった。静かな部屋の中、やっとここからなんだって。

「いやいやいや、ラッキーじゃないっつーの！ 宇宙人調べでもそのお母さん激ヤバおかしいって！」

かぐやの言う通りだと思う。私が話を聞かされた側なら、私だってそう思う。

でも――。

またぬいぐるみに爪を立ててしまう。

「かぐやには……」

「え？」

「ううん、何でもない」

何でこんな話してんだ、私は。相当熱に浮かされたらしい。

「……そっか。じゃあ、ご飯食べてお薬飲んで寝よっか」

そう言っただけかぐやはバタバタと台所まで駆けて行くと、帰りは慎重な足取りでお盆を運んで戻って来た。

「今日のメニューはネギ味噌ショウガと卵おじや。まずかつおぶし鰹節と細かく切ったネギとおろしショウガをクソほど練る。そこにアツアツの熱湯を注ぐ。出汁は鰹節から出るので調味料は最小限で〇

K。次に残りご飯を水で軽く洗ってから本だし少々を溶いたお湯に投入、卵を入れる前に鍋を反対方向にかき混ぜておく――」

ねえ、早く食べたい。病人に聞かせる解説にしては長すぎるから。

「卵は二個入ってるよ。あつあつだからふーふーして食べてね」

「あちっ」

かぐやの警告通り卵おじやは舌の先が火傷するほど熱いけれど、

「……超うまい」

残りの舌は全部とろけるくらい美味しかった。

「でーしょおおおおおう？」

くどいくどい。病人に見せるにしてはくどすぎるほどの笑顔を輝かせ、かぐやは謎のポーズを決めるのだった。

※

『みんなのために、わんわんお！ ヤチヨカップの公式実況担当、忠犬オタ公ちゆうけん ここうです。今日も元気に、職務果たしちゃいまーす！ 今週もヤチヨカップ特集、暫定四位までは公式を要チェキ！ 君の推しはいるか？ ではでは、トップスリーの発表だ。三位、癒やし系アイドル湯雲ゆくもぬくみ！ 二

位、ハイスペェルフ、テレリリ・ティートテート！　そして、下馬評通り独走状態だ。堂々第一位、ブラックオニキス！　もはや、この三人で決定か？　ちな圏外だけどランキング爆上げ中のチームがいるんだよね。みんな知って――』

「いやー、黒鬼^{くろおに}圧倒的だねえー」

久しぶりに四人で集まった真実の家。

一人掛けの籐椅子^{とういす}に腰かけた真実は、モニターで流していたツクヨミ公式ニュースを停止させてリモコンを放り出した。「んー、終盤でこの差はちょっとキツいかなあ」

三人用のソファを長々と占領する芦花も白旗を上げるように天を仰ぎ、

「むー、どうしたらいいのだー！」

一人バスタブに漬かっていたかぐやは、バスタオル一枚の半裸姿で頭をかきむしった。

人んちで何て恰好してるんだこの宇宙人は、と驚くなかれ。真実の家は真実の家でも、ここは仮想空間ツクヨミの中。グルメインフルエンサー『まみまみ』の家の中である。本当はリアルで集まる予定だったけれど、私の体調が戻ったばかりなのを考慮して急遽^{きゆうきよ}ツクヨミに変更になったのだ。

「いやー、黒鬼、強いねー。まあ、当然か。帝様だもんね」

ちなみに、家主やぬしの真実は帝のファンなので一人ご満悦の様子で自慢の釣り堀に釣り糸を垂らして
いたりする。

「真実の裏切り者お」

「一応、かぐやも二推しで推してるよー」

「やだー、かぐやだけにしてー」

「水ばしやばしやしないで。魚逃げちゃうから」

「くそー、帝みかど出てこい！ 勝負しろー」

「あ、それいいんじゃない。かぐやVS帝でゲーム対決ってのは？」

「さっすが芦花、それだ！」

それだ、じゃないわ。

「無理に決まってるでしょ、受けてくれるわけじゃないじゃん。向こうはトッププログラマーだよ？
格が違うって」

かぐやだって売れてきてはいるが、さすがにまだまだ人気もゲームの実力も雲泥の差だ。

「だってえー！ ヤチヨカップ終わっちゃうよ？ 迎えが来るかもしれないしー！」

ああ。あったな、そんな設定。

「来るなら早く来てくれー、連れて帰ってくれー」

「あー、いじわるゆるってる！」

今だ、今。今来るんだよ、月の仲間。遅いくらいよ、何サボってんの。

「……ん？ かぐやちゃん築地から迎えが来るの？」

「わー、家出ー？」

おっと、いけない。二人の前で堂々と喋ってた。油断しすぎだ。さあ、どうやって誤魔化そうか。そんなことを考えていると、

「わっ、ビックリした！」

かぐやの眼前にいきなり巻物のアイコンが出現する。メールだ。スパムや宣伝が大半なので、ヤチヨカップ出場以来ほとんどかぐやがメールを読むことはなかったけれど、

「……え、これって」

何かの予感があったのだろう、かぐやはすぐにメールを開いて驚愕きょうがくの声を漏らした。そして、異様にぎらつく目で私を見つめる。

「彩葉……」

何？

「いーろーはー……」

何、怖いって？

「彩葉言ったよね。プロゲーマー様は格が違うって……」

だから、何よ？

「……言ったよね？」

待って、嘘でしょ？　ねえ、やめてよ。悪い予感はしていたんだ。新しいものの好きのあの男が、かぐやの存在を見逃すはずがない。こういうことをしてくる可能性は大いにあった。だから、黒鬼閨連の情報はかぐやに見せなかったんだ。さっきも速攻で火消しにかかったんだ。それなのに……。

「じゃあ、断れないよね！　格上のプロゲーマー様からの挑戦は！　大物釣れたあ、よっしゃー！」

「かぐやちゃん！　魚が逃げるから！」

爆釣のかぐやは真実の制止を振り切って、バスタオル姿で釣り堀に飛び込むのだった。

『Blackonyx　帝アキラさんからのメッセージ』

初めましてかぐやちゃん！

俺はブラックオニキスの帝アキラ　ファン数　百万人おめでとう！

ここからは提案なんだけど、KASSENで

帝VSかぐやの竹取合戦

ってのはどう？

かぐやちゃんが負けたら……やっぱ俺と結婚、かな？

こっちが負けたら、なんでもお願い聞くとよ

俺らでツクヨミ盛り上げようぜ！』

終わった……。

※

『注目のイベントが始まります！ 王者ブラックオニキスが異例の速度でのし上がった超新星かぐや・いろPに宣戦！ そしてまさかの求婚！ 運命を懸けたK A S S E Nが今まさにここツクヨミ特設スタジアムで始まろうとしています！』

ソッコーで決まったかぐやと帝のバトルは、『世紀の竹取合戦』なんて大看板を背負って私の前に現れた。超満員の会場の中、モニター席では実況の元プロゲーマー・乙事^{おっこてること}照琴と解説を務める忠犬オタ公が盛り上げるための口上を述べている。

『ヤチヨカップの結果発表も残り一時間ですよね』

『この勝負の結果次第ではかぐや・いろPの逆転も!?』

『ルールはS E N G O K U』――

な、なんでこんなことに……。いつもの狐の着ぐるみを纏った私は、立ち尽くしていた。

上空には透明なボディの巨大なレプトケファルス——ウナギやウツボの幼生だ——が立ち昇る煙のようにゆるやかに身体をくねらせて泳いでいた。良いな——私も乗せて連れて行ってくれ——。

「あわわわわ……」

興奮して泡を吹きそうな真実を尻目に、深く溜め息を吐く。ちなみにかぐやは、

「まゝだゝ？」

と、未だ現れないブラックオニキスに対して不満げである。こちらの気も知らないで、嫌味なくらい普段通りだ。

かぐやが犬DOGEと遊び始めようとしたその時、会場上方の岩壁が爆発する。

『来ました！ 黒鬼です！』

砕けた岩の破片たちの隙間から、虎バイクに乗った帝が巨大な鬼と戦いながら落ちてきているのが見える。——なるほど、今日はそういう設定なのか。ちなみに、虎バイクとは虎が左右の前足で前輪を、左右の後ろ足で後輪を掴んだ状態で疾走するバイクで、虎の背中に乗って移動する乗り物だ。……意味わかった？ ごめん私もわかんない。

帝は虎バイクに乗ったまま鬼にタツクルし、衝撃の直前、虎バイクを蹴って跳躍した。宙に浮いた帝は、棍棒こんぼう型の武器から刀を抜く。一閃。いや、何度も。目にも止まらぬ速さで鬼の身体が刻ま

れていく。次の瞬間、それらは爆ぜて会場の空へとド派手な花火となって打ち上がった。あとに残るのは会場に降り立つ帝と、その後ろからやってきた雷らいと乃依のいだけ。試合前の余興だ。会場のボルテージが上がる。このためなら、なんでもする男だ。

『黒鬼！ ご来臨——！』

盛大な歓声に迎えられ、ブラックオニキスの三人が登場した。

今日、私はこの男たちに勝たなきゃならないのか……。この期に及んであまり前向きにはなれなかった。

「どーも、対戦受けてもらってありがとう」

「あの私っつ、ふぁふぁファンでっつ」

挨拶する帝に、どう見ても状況が見えていない真実が話しかけた。帝は真実を一瞬見やると、

「まみ、悪いけど今日は手加減できない」

と、ウインクを放った。名前は、大方ユーザーネームから推測したんだろう。撃ち抜かれた真実は顔中に『!?』を浮かべて止まる直前の駒のようになると倒れていった。……えっ、倒れたあ!?

「真実、大丈夫!?」

法螺貝ほらがいの音が鳴り響き、遂にブラックオニキスとのKASSENが始まった。

SENGOKUモードは三対三の三本勝負で、黒鬼の十八番だ。

円形のKASSENステージを左右に大きく二つに分け、右端にAチームの拠点である天守閣てんしゅかく、左端にBチームの天守閣があり、お互い自陣の天守閣にある幕营地ばくえいちから出発してどちらが先に相手チームの天守閣を落とせるか、というゲームだ。

左右の天守閣の間には三本の道があり、それぞれ上の道がトップレーン、真ん中の道がミドルレーン、下の道がボトムレーン。

相手の天守閣は最初から落とせるわけではなく、トップとボトムそれぞれにある櫓やぐらまで向かい、中ボスの牛鬼を倒して占拠する必要がある。味方チームのメンバーが櫓を占拠すると相手の天守閣前に大将落としが出現するので、それを天守閣に打ち込めば勝利だ。つまり天守閣を目指すメンバーと櫓を奪取するメンバーとに別れてスタートし、味方と連携して効率よく櫓を落とし、大将落としが出現した瞬間に天守閣に打ち込める形にするのが理想だ。

ストックー残機は三つ。味方がどちらかの櫓を占拠すると自陣の天守閣にジャンプ台が出現し、デスしてもそれを使えば占拠した櫓まで十秒ほどで向かえる。

地上には無数の中立ミニオンが配置されており、プレイヤーだけでなくこちらにも対処する必要がある。ミニオンから攻撃を受けるとHPが減ってしまうが、逆に倒してゲージを溜めると必殺技のウルトが撃てるようになる。ミニオンを倒すのにも時間がかかるため無視することもできるが、

できるだけ倒して必殺技を連打して打開する方法もある。この辺は状況やプレイヤーの好みによるところが大きい。

さて、私は巨大な黒いオオタカに、かぐやは自身の武器のハンマーのジェットエンジンに点火しその上に乗ってトップレーンへ。ヤチヨはサカバンバスピスが担ぐ神輿みこし、通称・サカバン神輿に乗ってボトムレーンへ向かった。まずはセオリー通りに二人と一人に分かれての進軍だ。

K A S S E Nに時折現れるお助けヤチヨは、基本的にチーム同士の实力差によってパワーが上下する仕様になっている。今回私とかぐやは黒鬼よりも弱いので、ヤチヨの能力にもバフが乗っているはず。一人でも生存できる可能性が最も高いのだ。

開始前の作戦会議ではリーダーのかぐやに、

「ガーツといってーしゅたたた——！　そんでバーン!!」

というありがたい作戦をいただいたので、とりあえずマップの位置情報で黒鬼の出方を見る。これは……。

『おーっと！　黒鬼はトライデント！　トライデントです!』

トップ、ミドル、ボトム、三つ全てのレーンに一人ずつで進む作戦、トライデント。複数の敵にも一人で応戦する必要があるので、多対一の対面でも倒しきる自信がなければ選択できない手だ。

「完全に舐めプされてんね」

「ええ〜〜？」

下方から無数の矢が飛んできて、私とかぐやは飛行モードを解いて落下する。移動のためのライドには飛べる高速なものと地上を進む中速のものがあり、高速のものはある程度まで進むと地上に無数にいるミニオンたちから総攻撃を受けるので降りる必要がある。中速のものは特に制限なくどこまでも乗れる。私とかぐやのライドは高速。ヤチヨのサカバン神輿や黒鬼の虎バイクが中速だ。

着地点付近のミニオンを一掃しながら落下していると、銃声が聞こえてくる。来た！ ミニオンへの攻撃をやめ、最速で付近の岩の後ろに隠れる。こちらを狙う銃声が近づいている。私は武器の双剣の両端を繋げてブーメランに変形させ、岩の背後から投げつけた。相手が躲かわす隙を見て飛び出す！ 避けられたブーメランを仕込まれたワイヤーで即座に回収して片手剣に変形させ、斬りかかった。相手も瞬時に反応して鰐迫り合いになり、火花が飛び散る。

「お前、彩葉だろ」

「違います」

帝アキラだ。ツクヨミにいればその活躍ぶりは嫌でも耳に入ってきたが、こうして言葉を交わすのは何年ぶりだろう。

私の背後からうなぎ形の弾丸が発射され、帝を狙い撃つ。かぐやのうなぎ砲だ。帝は私との膠こう着状態を脱して回避した。

「彩葉ー！」

「あっ、おい」

言うなって！——うぐっ。

かぐやを一瞬見た際に帝の棍棒でぽこぽこ叩かれる。

「そのスキン当てやすくして助かるわー。そのまま後悔しない？ 本気出そうぜ」

ここまでか。この着ぐるみはヒットボックスが大きい。私は覚悟を決め、着ぐるみを脱いだ。

「やっぱ、彩葉じゃん」

「私のアバターなんで知ってんの」

「お兄ちゃんにはなんでもお見通し——ってね」

喋りながら放った攻撃を喋りながら躲される。

「えっ、お兄ちゃん!？」

私に合わせてちょこちょこと攻撃を加えていたかぐやが手を止め、驚愕の表情でこちらを見た。

『お——っと衝撃の告白だー!! 帝というPは兄妹だった——!?!?』

大袈裟な実況の声が耳に届く。会場のざわめきが手に取るようにわかるが、もう後戻りはできな

い。帝——酒寄朝日。さかよりあさひ兄と交戦しながら櫓まで近づいていく。ヤチヨはボトムレーンで乃依と対面

中だ。

「そいや母さん気にしてたぞ。連絡くらいとりや良いのに」

「こっちにも順序ってもんがあるの！」



「うりやあゝゝ！ うわああ」

「それも母さんの教えだろ？ いちいち真に受けちゃうからギスギスすんの。母さんは反抗待ちなんだから」

「知らん！ □出さないで！」

帝がボイスチャットを配信用から内部通信用に切り替えて、お説教をしながら攻撃してくる。途中返り討ちにされてへろへろしてたのはかぐやだ。反論をじっくり考えたいところだがあつという間に牛鬼に辿り着かれてしまう。こちらが先に倒したいが、

「く！」

「ぐわああゝゝ」

マップを破壊してできた瓦礫^{がれき}で邪魔をされ、思うように動けない。帝が棍棒から刀を抜き、ウルトを発動して超加速。あつという間に牛鬼が撃破されてしまう。

「もっとうまくやれよな、俺みたいに」

ボイスチャットを配信用に切り替えて、決め台詞と共にウィンクを放つ。余裕^{よゆう}綽^{しゃく}々の態度にムカつくが、手捌きには文句のつけようもなかった。

『瞬殺ゝゝ！』

くそ。櫓と牛鬼の間には少しだけ距離がある。櫓を占拠される前に帝に追いつかなければ。『ボトムレーンのヤチヨも牛鬼を撃破！』

！ ヤチヨ……！！

『おーっと！ 乃依のカウンター！ 鈍足連射だ！ ヤチヨ動けない！』

『猶予ゆうよ一フレーム技ですが、止まりません！』

まずいな。いくらヤチヨとはいえ、助けに行かない限りいつまでも地べたを這いずることになるだろう。でも、今は帝を止めないと……！ 二つの櫓を一つのチームが両方占拠すると、その時点で試合がコールド負けになってしまう。

「うっ！ 乃依ちゃ、足止めが狙いだったかゝぎえっ」

『乃依が櫓を占拠しました！』

実況でボトムレーンの櫓が占拠されたことを知ると同時にマップのヤチヨが消え、乃依に倒されたこともわかる。

「早くも大ピンチ!? いて！」

「動きが直線！ 解釈一致！」

「ヴェ！ いったーんだけどまじ」

私がミニオンの処理に手間取っている隙にかぐやが帝に落とされる。すぐに私も斬りかかるが……。

『トライデントのまま両櫓占拠でコールドです！ 鮮やかっ！』

……一回戦は、呆気なく終わってしまった。良いとこなしだ。

「ごめんね、ずっとなめくじ状態でした」

「いやいや、ヤチヨは最強ですよ……」

本来なら、数的優位にあった私とかぐやが帝を倒して櫓を占拠し、ヤチヨに天守閣を落としてもらうべきだった。私たちが苦戦していたのでヤチヨが櫓を取りに行き、隙をつかれることになった。私のせいだ。

「ふっふっふ……」

落ち込む私をよそに、かぐやは空を見て悪役のような含み笑いをしていた。

「ねえ、帝ってさー」

……今度は何に付き合わされるんだか。

『二回戦が始まってブラックオニキス、当たり前のようにトライデント継続です！』

先ほどと同じく私とかぐやはトップレーンへ。ヤチヨはボトムレーンへ向かう。虎バイクに乗った帝を発見し、斬りかかる。

「かぐや姫は？」

「月に帰ったよ」

マップ上で、私とかぐやは同じ場所に表示されている。が、帝の視界には私しか映っていない。『ハンマー職のかぐやに隠密スキルはないはず』と私と斬り結びながらも、帝は考えを巡らしてい

ることだろう。

「あ、上か！」

「よっと」

上空でレプトケファルスに乗っていたかぐやがハンマーのジェット噴射を起動させ、ボトムレーンに向かっていく。

『ある程度以上の高度で飛べば地上からの迎撃がキャンセルできる！』かぐやから先程聞かされた話。

「雷、トップレーン！ フォロー！ 乃依がやられる」

帝の隙を見て、私は櫓へ一直線に移動する。かぐや、お願い……！ ボイスチャットから二人が乃依と交戦する音声が数度聞こえた後、

『かぐや、櫓を占拠！』

『2Dマップに上下情報がないことを逆手に取った攪乱かくらんです』

『メロンパンあげると乗せてくれるとかwww 初耳ンゴwww』

私もそんなこと知らなかった、なんて呆けていると視界がぐるん、と回転した。

錐揉み状きりもじように吹き飛ばされながら帝に攻撃を受けたことを知り、あつという間に櫓を占拠されてしまった。

「あと一歩ってとこだな」

王のように見下ろす帝を、睨みつけることしかできなかった。

自陣の天守閣付近にリスポーンするとかぐやから得意げなボイスチャットが飛んでくる。

「……ごめん」

開口一番出たのは、どうしても謝罪になった。

「ダイジョーブ！ 絶対取り返す！」

「彩葉！ かっこいいけど、ヤッチョとかぐやもついてるからさ！ 頼って——♪」

すかさずヤチヨの声。とはいえ、私が最速で向かってても決着までに間に合わない。私にできることはもうない。

「……勝って！」

「うけたまかしこまつり……☆」

かぐやとヤチヨが帝と交戦し、そして、

『なんとー！ かぐやいろPチームが一矢報いるー！ かぐやの奇策がハマったー！』

「「いえ……い！」」

現実感のないままヤチヨとかぐやのハイタッチを眺める。……本当に一勝したんだ、ブラックオニキス相手に。

「……かぐや、すごいね。」

つい、口をついて出た。伝えようとも思わなかったその言葉をかぐやの地獄耳はしっかりキャッチし、パツと笑顔になった。

「彩葉と、勝ちたいから！」

『激戦っす！ 櫓を各々取得し、かぐやいろPはジャンプ台から櫓へ！』
『待ち受けるのは帝との一騎討ち！』

三戦目。雷と乃依はヤチヨに任せ、私とかぐやは帝のもとに向かった。

「遅かったな」

「なんでこっちに？ ミドルから天守に行けば、勝ちだったんじゃない」

「ブラックオニキスはな、みんなに夢見せなきゃいけないーんだよ」

睨み合いをやめて、帝と激突する。かぐやと私は一戦目よりずっと連携が取れるようになってきた。それでも、あと一歩攻めきれない。

——お父さんがいなくなつて、お兄ちゃんの家にいることが多くなつた。ずっと続けていたサッカーもやめて、家では本を読むかゲーム。私が母と揉めているとすぐにやってきて、矢面に立って

くれた。性格だって、もっとずっと生意気で向こうみずな悪ガキって感じだったのに、静かで穏やかになった。まるで、お父さんみたいに。

いつしかお兄ちゃんはゲームが好きになって、プロになって上京して、私は家の中で母と二人きり。アキラって名前で活動してるのは知ってたから、配信はちょこちょこ見てた。色々なことを抜きにして、お兄ちゃんが活躍するのを見るのは好きだった。お兄ちゃんがツクヨミで帝アキラとしての活動を始めて、ヤチヨを知って、それからはずっとヤチヨに支えてもらって——その間も、お兄ちゃんはずっと腕を磨き続けていた。

勝てんわ。そんな言葉を堆積した溜め息のように吐き出す。

ぎゃあ〜と奇声をあげながらかぐやが隣に転がってきて、すぐにまた立ち上がる。

「ちくくしょ〜！　だが勝つ！」

かぐやは、瞳を輝かせて笑った。……お兄ちゃんとゲームしていた頃のことを、少し思い出した。

「もしうちらが勝ったら、そっちもお願い、聞いてくれんだよね？」

問いかけに帝が頷くのを見届けて、私とかぐやは二手に分かれて走り出す。高台にのぼり、上空から攻撃を仕掛ける。私の手にはかぐやのハンマー。かぐやの手には私の双剣だ。

「武器の入れ替え！　はっ！」

帝の周囲に円を描くように武器を投げては交換しながら足場を破壊し、柱の前まで追い込んでいく。今！ワイヤーを伸ばしたままの双剣の片割れを帝の背後に勢いよく突き刺した。ワイヤーの先のアンカーはかぐやのハンマーに刺さっている。

かぐやは帝を攻撃しようとして空振りしたハンマーを地面にめり込ませてしまい、頑張って抜こうとしている――フリをしてる。

実際にはハンマーを地面に固定し、アンカーが抜けないようにぐいぐいと押し込んだ。

『わざと彩葉を無視して前に出続けたから、帝は強自我かぐやちゃんだと思ってくるはず!!』
かぐやはいつも相手のことをよく見て、勝つために、裏をかく。

『彩葉と、勝ちたいから!』

とても賢くて、強い。

「ゲームセットだ」

帝がかぐやにトドメを刺そうとしたその時。柱に刺していた双剣を引き抜いてたわませていたワイヤーを一気に巻き取り、帝を締め上げ拘束する。

「ハンマーにワイヤー……？おとり 囹おとりはかぐやちゃん！」

作戦はかなり大雑把で戦いながら考えた部分が大半だった。でも、こっちはかぐやのおしめだつて替えてきたんだから――

「かぐやの考えることくらい、わかってるっつーの！」

私が振りかぶった剣は、帝を一刀両断した。

「……やりやできんじゃん」

お兄ちゃんは、最初からこれを望んでたみたいに静かに笑った。

……あんなに煽^{あお}るようなことばっか言ってたのに急にそんな態度取られたって、どうすればいいのかわかんないよ。

帝の声を聞き届けて、喜び勇んで走ってきたかぐやとハンドサインを交わした。

ライドに乗って、天守閣を目指す。ヤチヨが雷と乃依を相打ちで倒してくれたから、今生き残っているのは私とかぐやと帝だけ。帝はリスポンからの出発だから、順調に行けば逆転されることはないだろう。

「彩葉が危なくなったら、かぐやが助ける！」

「かぐやがミスっても私は置いてくー」

「なんで!？」

「あははっ」

なんだかおかしくて笑ってしまった。私が笑うのを見て、かぐやは目に涙をためて喜んでた。……変なやつ。

二人ならどこまでも行ける。そんな気がした。

『帝もかぐやチーム側の天守閣に向かうー!』

「こっからは見てて! かぐや大活躍!」

ミニオンを蹴散らしながら天守閣に登っていくかぐやの勝利を見守る――

「うえーい、勝ち確――!! ……s」

はずだったが、かぐやは炎と共に上空に舞い上がった。ん? 爆発? 爆発してない?

『あー! 雷の地雷トラップ――!』

雷の置き土産で、かぐやはあっさりと残機を失ってしまった。あ、ありえん! あのアホ! 状況を理解した私が天守閣を駆け上がろうとするも、

『帝いそぐ!』

結局、ウルトで超加速した帝が全てを蹴散らして爆速で辿り着き、

『逆転ー! 決まっちゃった。勝者、ブラックオニクスーっ!』

最後に天守閣で突き上げられたのは、ブラックオニクスリーダー帝アキラの拳だった。

※

「あーっ! 負けた! 負っげっだっああああ!」

「ちょっと、かぐや落ち着いて」

床に壁に自分の頭^{もた}に足にお腹、叩けるところを全部叩いて悶えるかぐや。悔しいのはわかるけれど身体を叩くのはやめてほしい。

「だってだって、負けちゃったんだよ！ かぐやと彩葉なのに負けちゃったんだよ！ たくのやしかったー！」

何て言ったの、最後？ 「たのしかった」と「くやしかった」がキツチリ混じって聞こえたけど。

「彩葉、かぐや、お疲れ様！ もうちょっとだったのにねー、ヤツチヨもたくのやしかったー☆」

やめて、ヤチヨ。それ流行らないから。

「でもね、お二人さん。落ち込んでる暇なーんてない。今からお待ちかねの発表タイムなんだから」

……発表？

「そうだぞ、小娘ども！」

空間に黄色い波紋が走り、中から飛び出て来たFUSHIがヤチヨの肩に飛び乗った。

「お前ら、ヤチヨが何のために助っ人に入っただのか忘れたのか？ 投票時間ギリギリまでこのイベントを盛り上げるためだ！」

「投票……そっか、忘れてた」

「忘れるな！」

ごめん、FUSHI。実は私も忘れていた。そうだ、このKASSENのそもそもの目的は――。

「いと大儀――☆」

さっきまで目の前にいたはずのヤチヨが上空高くに浮かんでいた。優雅に空を泳ぐエイのようなその姿をいくつものスポットライトが捉えていた。

「とりっても楽しいKASSENでした。そして、たった今！ ヤチヨカップの投票を締め切ったよー。FUSHI集計お願い！」

「はい。一、二、サン、スー、ファイブ、セイス、ズイーベン、ヨドウル……ちーん！ 集計完了」

「それではヤッチョとコラボる人を、発表ー！」

FUSHIの口からによきと吐き出された巻物をヤチヨが受け取る。

同時に夜空に巨大なスクリーンが発生した。ツクヨミの全ユーザーが注目する中、棒グラフが伸びていく。続けて下から順番に凄まじい速さで参加ライバーの名前が発表されていった。

「ヤチヨカップの優勝者は――☆」

元気に発表を盛り上げようとするヤチヨだったけれど、結果はほとんどのユーザーにとって明々白々なものだった。絶対王者の戴冠を待っただけの確認作業。

そして、誰もが予想したその名前がスクリーンに刻まれる。

―第二位　ブラックオニキス　新規獲得ファン数101万4221人

……え、二位？

「って、ことは!？」

ふてくされてしゃがみ込んでいたかぐやが顔を上げた。私の手を握り締め、ぶんぶんと振り回す。

「彩葉、出た!?　名前、もう出た!？」

「ごめん、見てなかった。でも多分……」

「多分？」

今から、出る。

「ヤチヨカップの優勝者は☆☆」

一本残った棒グラフはまだまだ伸び続ける。グラフを押し上げるのは、いくつもの言葉。思い思いの言葉たちが流星群のように集まってグラフをどこまでも押し上げていく。あれはファンの人たちからの……気持ち？

※

「おめでとう、かぐやちゃん、彩葉」

どれくらい茫然^{ぼうぜん}としていたのだろう。すぐ目の前で帝アキラにそう言われるまで、私の意識は飛んでいた。雷を引き連れてこちらまで来たようだった。通ってきたであろう道の人だから、モーゼばりに割れている。

勝ちって何？ 勝ったのは私たちで……あ、でもK A S S E Nには負けたから……。

「げっ、やばっ、結婚！」

かぐやが今の今まで忘れていたかのように声を上げた。もちろん、私も忘れていた。

「これじゃ、勝ったとは言えないな」

「ん？ お？ あー……」

「ま、元々無理やり結婚する気なんてねーし」

「だよな！ かぐやも知ってた！」

嘘つけ。あんたは絶対信じてたでしょ。

「つーわけで、俺らファンのところ行くから」

私とかぐやの戸惑う顔が見られて満足したのか、帝アキラと雷は踵^{きんす}を返してログアウトした。一千九百万人のファンのもとに帰っていくのだろう。……そういえば乃依がないけど、多分あれだな、飽きて先に帰ったな。

ヤチヨカップの勝敗は、ファンの総数ではなく期間中に新たに獲得したファンの数で競われる。ほぼ国内のファンが飽和していたブラックオニキスと、ゼロからスタートした私たちでは、一票の獲得の難易度が全く違うはずだ。

それでも、不平を述べずトップとギリギリの二位を掻^か攪^{さら}うブラックオニキスは、王者としてのありようを行動で示しているように思えた。

「ふったりともう。よくきかな〜☆」

結果発表を終えたヤチヨが、公式の表情を脱いで降りて来た。どんな顔をしていてもヤチヨはヤチヨだけれど、それでもこうして目の前にいることがまだ信じられない。喋^{しゃべ}りたいのにろくに声も出てこない。

「やるじゃねーか、マグレに頼る天才だな」

「んー。でも、全然だめだったあ。どうしたらヤチヨみたいにしゅばばって動けるの？」

それに比べてかぐやは……。すごいな。憎まれ口を叩くFUSHIをふんづかまえてリフティングを始めるところも含めて、なんというかもう、すごい。

「それはもう、日々の努力の玉藻の前というかゝゝ、気まぐれアメンボロードというかゝゝ」

「はあ？ ヤチヨって、いつもテキトーじゃない？」

「んっんー。ヤチヨは優柔不断で悪いやつなのですゝゝ。かぐやは、かぐやだから強いんだなつて、ヤチヨは思ったよ」

「なんにも言っていないなー」

ねえ、敬語とか使いな。

「さーて、ここからはクライマックスに向けてハードな展開が待っているかも。このお話を、最後まで見届けてね？ 運命の荒波に揉まれる覚悟はいいかー？」

「おー！」

確かに、これで終わりじゃない。むしろ、ここから始まるんだ。ヤチヨとのコラボライブに向けてやらなきゃならないことはたくさんある。それは多分、楽しいことばかりじゃなくて、辛いことや苦しいこともあるんだろう。それでも、精一杯頑張ろう。

ヤチヨの言葉を、その程度の激励げきいと捉えた私とかぐやは、ツクヨミの夜空に向かって無邪気に拳を突き上げるのだった。



四章

ヤチヨカップ終了後、私たちの身边は激変した。

無名のまま優勝したことによるファン数の激増や、注目度のアップ、毎日届く案件の依頼やコラボの依頼とか、諸々のそういうこととは関係なく、

「では、また後ほど。十五分くらいで着きますので」

「はい、向こうにもう一人いるんで、よろしくお願いします」

単純に引っ越しをしたからだ。

物件はいつだったか、かぐやがスキップ交じりに導いたあの不動産屋のタワーマンション最上階。引っ越しを打ち明けた時のかぐやの驚きようたるや、

「え、いいの!? やったー!」

動画を回しておけばよかったと思う辺り、私も配信者の隣にすぎたのかもしれない。

「何で！ 何で！ どういう風の吹き回し？」

かぐやはしつこくそう尋ねた。

私としては本意ではなかったけれど、かぐやはどんどん物を増やし、顔バレもしていることを考えると、今までのアパートのセキュリティでは不安がある……という表向きの理由と、単純にかぐやが喜ぶだろうなという極秘の理由、さらに保証人が見つかったという事務的な理由が重なったの決行である。

「保証人ってまさか……？」

そう、そのまさか。

「帝アキラだ！」
みかど

さかよりあさひ
酒寄朝日だ。お兄ちゃんは二つ返事でOKしてくれた。ただ一つ勘違いをしていたようで、印鑑をもらいに会いに行くと、

「なに、保証人？ 一棟買えって話じゃなくて？」

と本気で目を丸くしていた。頼めば買ってくれたのだろうか、この成金は。やらないけどさ。

「うおおおおお、すごいすごいすごい！」

新居に踏み入ったかぐやは段ボールを蹴散らして、窓を突き破る勢いでバルコニーに突進していった。

「ちょっと、落ちないでよね！」

「眺めヤバッ！ すっげー」

タワーマンション最上階の絶景を堪能するかぐや、ビルの風が歓迎するように金色の髪の毛にじゃれついた。

「最強になった気分……」

私も同じ意見だった。なぜかわからないけれど、多分かぐやは最強なのだろう。

正直、私は全然落ち着かないけれど……。

「じゃあ、ちょっと買い物行ってくるから」

「さみしーから一緒行く！」

「だめ、荷ほどき死ぬほどあるでしょ。ちゃんと片付けといてね」

渋るかぐやを人差し指で釘付けにしてマンションを下りた。別に急ぐ必要があるわけでもない。雑貨を買いに出たのは、一度地上に足をつけたかったからかもしれない。

家賃と標高は劇的に高まったけれど最寄り駅は変わらないので土地勘はある。目指すは駅前の激安スーパーだ。

「こんな物はあぶく銭、こんな物はあぶく銭、こんな物はあぶく銭……」

呪文のように繰り返しながら自動ドアを潜った。買わなきゃいけないのは、かぐやのシャンプーとかぐやのコンディショナーとかぐやの化粧水と……かぐやのモンばかりだな。

「なんか、子供中心の母親みたいじゃん」

などとひとり言ちてみるものの、目に付くのはかぐやの好きなホットケーキミックスだったりして。

「買って行ってやるか……いやいや、何考えてるんだ」

「いろはっ！」

「うわっ、どこから出た！」

まるで頭の中から抜けて出てきたように、かぐやが後ろから抱き着いてきた。

「彩葉いろはがいなかつまーんなーいよー」

くるくると踊りながら最後にポーズを決めるかぐや。回った拍子に棚に手をぶつけていたけれど、それはなかったことにする気のようにだ。痛みに耐えながら根性で笑顔を作るかぐやがおかしくて、めっちゃ笑った。

「かぐやもそれやるー！」

「ちよっと、危ないって。邪魔ー」

引越して初めての昼ご飯は、かぐやたっての希望で二人してパスタを作ることになった。とはいっても、私にできることはあまりないので任命されたのは、製麺機というのだろうか、古いタイプのカキ氷のようにハンドルをゴリゴリ回して生地の手を麺にする係。これがなかなか面白い。ので、

「かぐやもやらしてー！」

すぐにこのザマである。楽しいので交代交代でハンドルを回して、最後の一回しは二人一緒に回した。どこのカップルチャンネルだろう。ここは動画を回す必要ない。

パスタはすぐに出来上がった。匂いの時点でもう美味しい、お皿に盛りつけたらさらに美味しい。仕上げとばかりにかぐやが二つのチーズおろし器を両手に構え、カンフーよろしくポーズを決めて、

「はいっ！」

二つはいらないので左手をチーズに持ち替えてこすこすとパスタに散らした。

「いただきますっ」

顔を突き合わせて二人一緒に手を合わせて、二人一緒に口に運ぶ。その味はもちろん、

「う〜〜ま〜〜♡」

である。

美味しすぎてかぐやが立ち上がり、パスタ美味すぎダンスが飛び出るほどだ。

「一番、かぐや！　ここ十年でさいこー！」

あんた生まれて一ヶ月でしょ、なんて突っ込んでしまったら負けなことはわかっているけれど。

「あんた生まれて一ヶ月でしょ！」

元気いっぱいにつっこんで、また二人でめちやくちや笑った。

とはいえ、笑ってばかりもいられない。やっぱり、私には勉強があるし、アルバイトがあるし、夏休みが明ければ学校もある。私がかぐやの配信活動を助けるのは時間のある間だけと明言してある。実質的には夏休み終わるまで。

私はあくまでも女子高生であり、配信者でもプロゲーマーでも、ましてやミュージシャンでもない。だから、

「ヤバッ、怖くて眠れない……」

夜になるとヤチヨとのライブが怖くて仕方がない。

だって、私が？　あのヤチヨと？　コラボライブ？　無理無理無理。恐れ多くて吐きそうだ。

昼間かぐやと二人で過ごしているとそうでもないが、夜一人で布団に入ると途端に肋骨の辺りがざわつき始める。今夜もまたライブで大失敗する夢を見て飛び起きることになるのだろうか。

「もう一回だけ練習しとこうかな」

いや、だめだ。ライブ前日のしかも深夜に練習したっていいことはない、早く寝ないと。でも、寝れない。誰か助けて。

「彩葉！」

そんな私の助けに応じるように、寝室の扉がノックもなしに開かれた。

「彩葉、助けてー」

あ、違った。向こうも助けを求めてた。

「これなに？ どうやって開くの？」

「え？ あ、勝手に見ないでよ」

ライブ前日に何やってるんだ。かぐやが当たり前のように覗いていたのは私のノートPC。どうやってたどり着いたのか、画面に表示されていたのは『ドキュメント』から『家族』↓『整理』↓『ミュージック』と、どんどん下った最下層にある――。

「……あ」

一瞬、動けなくなった。

それはずっと忘れていたもの。忘れたと思い込んでいたもの。でも、ずっと心の奥底にあり続けたもの。私の心の一番真中、大切な大切な私の思い出。

「これ……聞いたの？」

「うん、すっごく素敵な曲だった」

「そっか」

「何か途中までなんだー、続きは？」

「ない……もう作れないんだ」

一言目は無理だったけれど、二言目からは笑顔が取り繕つくろえたと思う。

ファイルの名前は、『タイトル未定（彩葉と共作）』。

お父さんと幼い私が一緒に作った曲だ。

もう、どんな曲かも覚えていない。でも、

——彩葉、次はどうする？

——次はこう！　でえ、こう！

——ええな、ワクワクするやろ

あの時の気持ちは今でもはっきりと思い出せる。

あの頃の私の指は恐れなんて知らなかった。お父さんが受け止めてくれたから。受け止めてくれると信じていたから。お父さんがいた頃はみんなが笑っていた。みんながお父さんを信じていた。

恐らくそれは家族だけではない。お父さんに関わる全ての人間がお父さんを信じていただろう。お父さんはそういう人だ。誰の気持ちも受け止めて、誰のことも疎かにしない。じゃあ、そ

んなお父さんの気持ちを誰が受け止めていたのか。

「聞いてみる？」

「いいよ。もうどんなメロディかも忘れたし」

「彩葉？」

「いいのいいの。明日は本番だし、もう寝よ」

「そうだね。はー、ライブの曲クソむじーんだが」

私がノートPCを閉じると、かぐやはあっさりと話題を切り替えた。ライブ前日に、夜の夜中に、朝まで待てず寝室に飛び込んでくるほど気になっていたはずなのに。もしかすると、気を遣ってくれたのかもしれない。

「ヤチヨのやつAーだからってさー」

「まだマスターしてないの？ 練習しとく？」

「ううん、何とかなるっしょ！」

得意の変なポーズを決めてかぐやは笑った。強がりでもなんでもなく、本気で何とかできると思っている笑顔。やっぱりかぐやは呆れるほど最強だった。呆れるほど強くて、呆れるほど可愛くて、

「グー……むにゃむにゃ……」

呆れるほど寝つきがいい。

ねえ、何で私の布団で寝てるのよ。広い部屋に引っ越した意味よ。

「まったく、寝室分けた意味ないっつの」

渋々同じ布団で横になると、かぐやのシャンプーが微かに香った。三種の天然精油が配合され、たかぐやのお気に入りの香り。確かローズとオレンジと……三つ目はなんだっけ？ 候補を二つも挙げないうちに深い眠りがやってきた。

※

ライブ当日、お陰様でぐっすり眠れた。

多すぎもせず少なすぎもせず、起きた瞬間から頭も身体も軽く感じるベストな睡眠。アルバイトは休ませてもらっているので今日一日のスケジュールには余裕がある。練習は十分に重ねてきた。進行は完璧に頭に入っているし、機材のチェックも抜かりない。不安な要素は全て潰してこの日を迎えることができた。

「ヤバイヤバイ、怖い怖い」

だからって、全然緊張するのだけれど。ツクヨミ内ライブステージの控え室、私は肋骨を突き破りそうになる心臓を必死に宥^{なだ}めていた。

「だらららら、蟹！ だらららら、うさぎ！」

ちなみに、かぐやは謎の物真似ルーレットをずっと私に見せつけている。今の私にどんな反応を期待しているのだろう。

「はいはい、可愛い可愛い」

仕方がないので適当にいなしていると、

「だらららら、どじょう！」

ヤチヨが控え室にぽんっとどじょうポーズで出現した。

「うわ、ビックリした！」

「あ、ヤチヨだ。おつー」

ねえ、言葉遣いちゃんとしな、マジで。

「おっつー☆」

ごめん、別にいいみたいだわ。私が気にしすぎてた。

「ねーねー、彩葉。練習しすぎてお腹すいたー。終わったらパンケーキ食べよ？」

始まる前から終わった後の話とか、どんだけ大物なんだろう、この子は。私は緊張でご飯食べれなかったのに……。

「パンケーキいいなー。ヤチヨも食べたいなー」

ふわふわと宙に浮かんだヤチヨがくるくると回転しながらパンケーキに思いを馳せる。

「一緒に食べる？」

「よよよ、ヤチヨは電子の海の歌姫なので食べられないのです」

「えー、それ何の拷問？ かぐやだったら絶対無理！」

確かに。食べるのも作るのも大好きなかぐやにとって、絶食の生活なんて生きる意味がないとすらいえるだろう。

「ヤチヨ可哀想、何かしてあげられないかなー」

「よよよ、泣けること言ってくれるねえ、お嬢さん。でも、大丈夫。ヤチヨは代わりにキラキラを食べて生きてるから」

キラキラ？

「そう、ツクヨミに集まってくれた人たちのみーんなのキラキラ。それを見るのがヤチヨは何よりの大好物なのです」

「そうなんだ。じゃあ、これあげる」

そう言っがかぐやが差し出したのは、生まれてこのかたずっとかぐやの手首を飾っていた金のブレスレット。

「こちら。こういうのは、もっと大切な人にあげるもんなんだよ☆」

「ふーん……？」

『各所、準備OKです』

空間に舞台監督からのメッセージが表示された。

時間ピッタリ、いよいよ出陣だ。

「いざ、ゆこうか」

回転を止めたヤチヨの顔は、歌姫のそれに切り替わっていた。

「入って、入って」

ヤチヨに導かれ、控え室の一角に設えられた板間に上がった。ふわりと音もなく床が浮き上がり、すると上昇を開始する。それは私たちをステージへと運ぶ昇降機、上がり切った瞬間が、ライブが始まるその時だ。

「うわー、すごい」

初めてシースルーのエレベーターに乗った子供のよう、かぐやは歓声を上げて辺りを見回した。私は、また暴れ出した心臓を何とか深呼吸で抑えにかかる。ヤチヨはそんな私の傍らかたわに立ち誰に言うでもなく呟いた。

「毎度ヒリヒリなんだよね、この雰囲気」

「ヤチヨでもそうなの？」

「当然っ。みんなが楽しんでくれるかなって、ヤチヨはいつもガクブルだよ」
そうなんだ、ヤチヨでも。そう思ったら少しだけ呼吸が楽になった。

「ねえ、ヤチヨ？」

「なんだいなんだい？」

思い切って話しかけるとヤチヨは気さくに笑みをくれる。乾いた大地に深く染み込む慈雨のよ
うな笑顔。

……綺麗だな。この期に及んでもまだ信じられない。私を救ってくれた神ともいえる推しと、
私は今から同じステージに立つのだ。

辞退することも考えたけれど、私は今こうしてここにいます。私もヤチヨみたいに誰かの助けに
なれるのなら、そう思ったから。

「ヤチヨのデビュー曲ってもう歌わないの？」

——『Remember』。

海の底で溺れかけていた私に、一塊の空気を届けてくれたヤチヨのデビュー曲。あの歌をヤチ
ヨは長らく歌っていない。もちろん、今日のセトリリストからも外れていた。

「あれはもう届いたから、お役目かんりよ☆☆」

「え？ それってどういう……」

「ほら、時間だよ」

意味を尋ねるより先に、昇降機は昇りきっていた。

その瞬間、圧倒的な圧力に握り潰されそうになった。それは詰めかけたファンたちが発する歓声と熱狂。荒れ狂う興奮は、まるで形を持ったかのように四方八方からばしと身体中の皮膚を叩く。電撃のような鳥肌が全身を駆け抜けた。

まるで銀河のただ中にいるようだった。

無限にも思える星々が客席を埋め尽くし私たちを照らしている。

眩しく熱く、激しく輝く力に満ちた幾万の星。

私も昨日まではあの光の一つだった。サイリウムを握って、ステージのスターを見上げていた。でも今日、ここに立って初めて知った。

「ヤオヨロ〜☆ みんな生きるのはどうですか？ 良い事あった？ それとも泣いちゃいそう？ よしよし、全部大丈夫。どんなに孤独な道のりでも、楽しかったなーって記憶が足元を照らすよ。この時間も忘れられない思い出にしたいから……どうか一緒に踊ってくれる？」

演者もまた客席を見上げていたことを。

※

「ヤチヨ、サイコー！」

「ヤチヨー！」

「かぐや、結婚してくれー！」

「かぐや、愛してるぞー！」

歓声はまだ鳴りやまない。余韻よいんというにはあまりにも激しすぎる熱量が、まだ会場に渦巻いていた。

それは驚くほど一瞬で、でも驚くほど熱くて、驚くほど消耗して、

「……彩葉」

……かぐや。

「め——っちゃ、楽しかった！」

そんな一時間だった。

かぐやは興奮に潤んだ目で客席を見回し、

「彩葉、好き」

「私？」

最終的に横の私を見つめてそう言った。
待って、何で私なの。

「あー、もー、彩葉と結婚しよっかなー」

だから、私じゃないだろう。客席ではまだ熱の冷めないファンたちが愛を叫んでいるというのに。

「ダメ？」

その顔止めて。ライブの後の興奮をはらんだ妙に色っぽい顔で言われても、ダメっていうか、無理っていうか、法律っていうか……。

「まあ、生活費折半してくれるなら、一緒に住むのはいいけどさ」

「え、本当？」

……お迎えが来るまでだけど。

私の照れ隠しの一言は、未だ興奮冷めやらぬファンたちの声援にかき消された。会場の熱は冷めることを知らない火山群のようだった。興奮が叫びを生み、叫びがまた興奮を煽る。あお

そんな叫びの一つが、

「かぐ……やー！ ん……あれ？ なんか、今、音声乱れた？」

小さな違和感に気付く。

それが、始まりだった。

異変は連鎖的に東京中で発生していた。一つ一つは小さな違和感。しかし、寄り集まることによりタイルを蝕む蠍かひのように次々と現実と仮想空間を侵食していった。

一つの違和感はツクヨミ内広場のモニターに染み入って、挨拶でもするように己の出自を画面に示した。

「何、あれ……月？」

また一つの違和感は仕事中のサラリーマンのスマコンに入り込み、電子データに足跡を残して通り過ぎた。

「うわあっ、何だ！」

また一つの違和感は無線LANに足を引っかけ、多くのデバイスに不意の断絶を引き起こした。

「ネット切れちゃった……」

また一つの違和感はライブステージの外部モニターに張り付いて、画面いっぱいメッセージを書き込んだ。

「何、あれ？ 故障？」

また別の違和感も。

「表示、どうなってんの？」

また別の違和感も。

「モニターどうなってんの？」

また別の違和感もまた別の違和感もまた別の違和感もまた別の違和感も。

「これ……何の数字だ？」

『2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12
2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12
2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12
2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12
2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12
2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12 2030/09/12』

結集した違和感は会場に別種のざわめきを生む。

ざわめきにつけ込んだ違和感はスクヨミ内のアバターに取り付き、乗っ取り、人の形を得た。
一つまた一つと違和感が人型を獲得する。

「ん？ なんだろ」

最初に気付いたのはかぐやだった。何かを察知して客席を覗き込む。

どうしたの？ 尋ねようとした私の横を、

「――」

何かが通り過ぎた。

白い腕だ。人型を得た違和感が、後ろからかぐやの腕を掴んでいた。

「かぐや！」

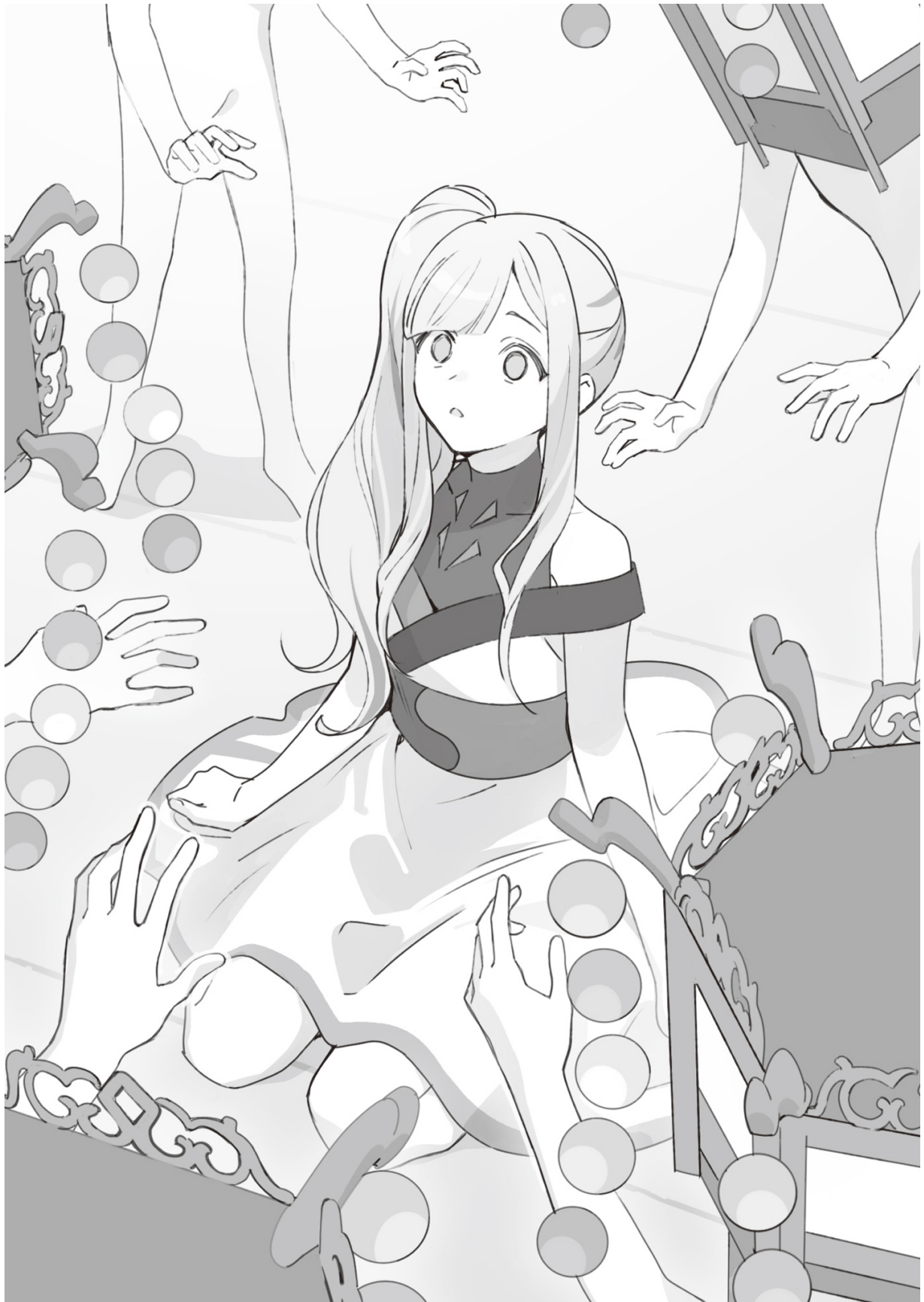
声をかけるより先にかぐやが崩れた。まるで電源を落とされたように膝からがくりと崩れ落ちる。

なんだ、こいつら。いつの間にここにいた。

もう囲まれていた。無機質が人型を取ったかのような白い違和感。また腕が伸びてくる。

「来るな！」

咄嗟とっさにキーボードで振り払うと、嫌な手応えを残して簡単に折れた。ボトリと落ちる腕、だが落ちただけだ。人型は意に介する様子もない。切り口からは花びらではなく、どす黒い液体が流れ出て床を汚した。



なんだ、こいつら。明らかにツクヨミのルールの外にいる。

恐ろしい。その感情を苗床にするように人型は数を増やしていく。ログアウトして逃げたいけれど、

「しっかりして、かぐや！」

かぐやがまだ動けない。瞼こそ開いているものの何も捉えていない視線は、じわりじわりとにじり寄ってくる人型をただ素通りするばかりだ。

そして、また白い腕が伸びてくる。

「かぐや！」

しかし、今度の腕はかぐやに触れる直前に身体ごと吹き飛んだ。一体、また一体と人型が吹っ飛んでいく。まるで、目に見えない何かに弾き飛ばされているかのように。

「おいたは、だめだよー」

ヤチヨだった。

海色のネイルに飾られた人差し指を指揮棒のごとく振るう度、消しゴムでも弾くように人型が吹き飛んでいく。残った人型は数歩後ずさると、

「モウシワケゴザイマセン」

今、何て言った？ 人型が日本語を発したのか？

そして、次々と人型が消滅していく。誰かに消されるというよりは、自ら撤退を選んでいるような消え入り方。最後に残った一人が、ヤチヨに向かって恭うやうやしく礼を取ったように見えたのは、私の気のせいだろうか。

何はともあれ、突如として現れた侵入者は違和感と恐怖を残したまま煙のようにかき消えた。

……なんだ、こいつら。

「ヤチヨ、今のは？」

「……」

どうして何も言わないの？

「**今のは、一体？ 何が起こってしまっただ？ 続報を待て！**」

ヤチヨは私の質問には答えずに、またざわめきの残る客席に向かって大声を張り上げた。

「なにになに？」

「ヤチヨ、こういうの好きだからなー」

「演出か？」

演出として終わらせるつもりなのだろう。

「**みんな、今日は本当にありがとう☆☆**」

早々に幕が下りた。緊急で通信が切断され、客席とステージが完全に分断される。

「ヤチヨ、今のって」

改めてもう一度尋ねると、ヤチヨは数秒考えるふりを作ってから、

「うーん、バグじゃなさそうだし、やんちゃっ子の悪戯いたずらかにやゝゝ、調べとくよ☆」

キュートな角度に首を傾げた。つい今しがた、侵入者を弾き飛ばした人差し指を顎あごに添えて。嘘をついている。直感的に確信した。

かぐやはステージに膝をついたまま、ただ一点を見つめている。

まるで、そこから別世界を覗いているかのように。

※

『今日午後十時頃から東京都立川市全域にて、原因不明の通信障害が発生しました。市内の通信機器やテレビモニタ、公共施設のサイネージ広告など広範囲で同時多発的に発生した模様です。警視庁によりますと、特定団体や企業のPRである可能性は低く――』

「ねえ、かぐや……」

リビングルームでつけっ放しにしたテレビニュースは、ドライヤーの音にかき消されてほとんど聞こえていなかった。

ソファの上でお人形のように膝を抱えているかぐや、その金色の髪の毛をドライヤーで乾かしてやりながら、私は「ねえ、かぐや」に続く言葉を紡げずにいた。

ツクヨミから帰ってきたかぐやは意識こそ取り戻したものの、まだ薄い膜に包まれているかのようで自ら声を発しようとはしない。

「コラボライブ、終わっちゃったね」

私が無理に元気を装ってそう言うのと、

「うん。でもー、まだまだやりたいことだらけなんだー。明日もまた食材届くし♪」

「欲深怪獣かぐや」

「がおーっ」

一応答えてはくれるけれど、怪獣のポーズにも叫び声にも、どこか取り繕うようなものが感じられた。それは本人もわかっているようで、

「まだ、具合悪い？」

そう尋ねると、

「んー、ちょっと疲れたかな。寝まーるす」

素直にソファから立ち上がった。

「おやすみ」

「おやすみ、彩葉。大好きっ」

「うん」

ぴんと手を挙げて螺旋階段を上っていくかぐや。精一杯元気に振る舞っているけれど、私より先に寝ると言い出したことも、手摺てすりを使って階段を上るのも今日が初めての事だった。

かぐやの様子がおかしい。

やはり、あの謎の人型に触れたせいなのだろうか。

あれはいつたい、何だったんだろう。意識の隙間を突くように伸びてきた白い腕、あれを落とした感触がまだ掌てのひらに残っている。普通、欠損したツクヨミのアバターは桜の花びらとなって散るはずだ。あんなふうに床に落ちて不気味に血のようなものを流しはしない。

あれの目的は何だったのか。タイミング的に市内全域に通信障害を引き起こした原因とって間違いないだろう。あの人型の集団が通りすがりの人のスマコンに侵入し、スマートフォンの操作を乱し、PCの回線を断った。そして、そこら中のモニターに謎の数字を映した。

『2030/09/12』

日付と考えるのが自然だろうか。

今日は八月三十日。もしそうならば、あと十三日後に何があるのか。

とりあえず、日付を検索しようとクッションの下に埋もれたスマートフォンを引きずり出すと、

「うわ……」

画面の表示にげんなりした。

『母 不在着信（10件）』

なぜだろう、字面からすでに機嫌の悪さが伝わってくる。

「そろそろ、無視し続けるのも限界かな……」

これ以上、お爺ちゃんやお兄ちゃんに心配をかけるのも違う気がする。

わかってはいるけれど、電話に出る気が起きないのはその先の展開が見えているからだ。まず、電話に出るのが遅いと責められ、折り返しがなかったことを責められる。そこから近況報告を求められ、逐一のダメ出しが始まるのだ。私がどんな結果を残したところで母は決して満足しないのだから。

私が首席で高校を卒業したとしても、東京大学に首席で入学したとしても、大学院に進んでも、一流企業に就職しても——って、なんだこれ。

「……これがわたしのやりたいこと？」

口に出して、ゾツとした。

そして、ゾツとしたことに驚いた。今までだって何度も反芻^{はんすう}し、これで間違いないと選んできた私の目標だったから。

『何で彩葉は、そんなに一人で頑張らないといけないの？』

いつかのかぐやの言葉が頭を巡った。

私の中の何かが、以前とは変わりつつあるのだろうか。では、私はなんのために……。

「だめだ。今は違う」

首を振って、頭の中を覆っていた黒い霧を追い出した。

いけない。かぐやがいないと、私はいつも母のことを考えてしまう。でも、今は違うんだ。今はやらなければいけないことがある。

スワイプ一つで履歴と思考を画面外に弾き飛ばし、検索フォームを開いた。覚えた数字を慎重に入力する。

『2030/09/12』

虫眼鏡のマークを親指で弾いてしばし待つと――

「出た……」

画面にずらりと並ぶのは、

『2030年9月のカレンダー』

『2030年9月12日は何の日?』

『2030年9月12日の暦と日付情報』

『2030年9月12日 次の満月は――』

「次の満月？」

四番目の検索結果で指が止まった。そうだ、ジャックされたモニターに表示されたのは謎の数字だけじゃない。

「月の画像も……」

また、いつかのかぐやの言葉が頭を巡った。

『迎えが来るかもしれないし〜！』

そんな、まさか……。

また、ライブの後の映像が頭に蘇る。次々と消えていく人型、最後に消えた一体が恭しく頭を下げる。あの相手は本当にヤチヨだったのだろうか。

そのすぐ横にかぐやが座っていたはずだ。



五章

次の日。私は布団に横たわりながら、一分前から待ち構えて目覚ましアラームを停止させた。夜明け前に眠りからは覚めていたけれど、起き上がる気になれなかった。

かぐやと顔を合わせることが怖かった。こんなことは初めてだ。話さなくてはいけないことがたくさんあるはずなのに。

再び掌でスマートフォンが震えた。あともう一回スヌーズが起動するまで、そう決めて私は枕に頭を落とした。

十分後。制服に着替え、髪の毛を括ると共に腹も括った。

さあ、行くか。少し前からドタバタと人の動く音が聞こえている。同居人はもう起きている。かぐやはどんな顔をして朝を迎えているのか、そんなことを考えながらリビングルームに下りていくと、

「おはよう、いろは彩葉！」

「え？」

出刃包丁の煌めききらに出迎えられた。

いや……え？

キッチンで真剣な表情でまな板に向かうかぐや、
俎上そじょうには尻尾がはみ出すほど大きな魚が乗っている。

「これは、一体……」

「白甘鯛！ 通称シラカワ！」

魚種を聞いたわけではなく。

「料理配信用に買ったの」

そういえば、昨日届くって言ってたけど。

「こんなに早く来るもんなの？」

「炭で焼きたいんだけどお、ダメ？」

やめなさい。『タワーリングインフェルノ』の未来しか見えてこない。

「だめかー。制服着てるけど、もう学校始まるの？」

「ううん、夏期講習。ずっと行ってたでしょ」

「そだっけ？ 昨日は？」

「日曜日じゃん」

「ほんとだ、夏休みだから曜日の感覚なくなってたー」

「あんたはいつも日曜でしょ」

「たっはー」

おどけて額を叩いて見せるかぐや、私も釣られて笑ってしまった。

……こんな話がしたかったんじゃないのに。

随分早起きだね、眠れなかったの？

私は眠れなかったよ。

何を考えて眠れなかったの？

私はあなたのこと。

昨日のこと覚えてる？

「じゃあ、私出るから」

「いってらー」

……どうして、何も言ってくれないの？

結局何も話すことができないままリビングルームを出た。学校指定のローファーはまるで初めて履くように足に馴染まない。

「行ってきます」

聞こえるはずのない音量でそう言って扉を開くと、

「――」

ふと全身を悪寒^{おかん}が貫いた。

何だろう、この感覚。覚えがある。ごく最近だ、目に見えない何かが真横をすり抜けた感覚。

「かぐや！」

振り返ると、かぐやは出刃包丁をまな板に放り出し自分の腕を眺めていた。いや、あれは腕じゃなくて手首……を飾るブレスレット？

しばしブレスレットを眺めてから無然とした表情で顔を上げるかぐや、視線の先には――何も
ない。ソファと壁、その間の何もない空間を見つめている。

「かぐ……や」

「彩葉？」

何を見ているの？ 何が見えているの？

「いってらっしゃい」

かぐやはオレンジ色に輝く瞳でそう言った。

……どうして、何も言ってくれないの？

※

「……ですのでここは自分ではどうしようもないという意味になります。また、せ給^{たま}うという表現があるためここの主語は位の高い人であることがわかり――」

夏期講習は今日が最終日だったけれど、講義の内容は虫食いでしか頭に入ってこなかった。今朝のかぐやは何を見ていたのだろう。頭に巡るのはそのことだけだ。瞳が輝いていたことを考えればスマコンを装着していたのだろうか。

だとすれば、もしかして。

「では、ここの訳を酒寄^{さかより}さん、わかりますか？」

……え？

「酒寄さん？」

はたと我に返ると、担任の立花^{たちばな}先生が私を見つめていた。

「あ、えっと……わかりません」

「……大丈夫ですよ。ここの助動詞は――」

わかりません、教室で初めてそう答えた私を立花先生は少しだけ心配そうに座らせた。

「かぐやっほー☆ 今日のは白甘鯛の三枚おろし、やってくよー！ 三枚おろしに必要なのは、まず根性！ いい？ 出刃より先に根性だから！ 内臓グロくナイゾー、なんつって！」

家に帰ると、キッチンからかぐやの賑やかな声が聞こえて来た。宣言通り料理動画を撮影しているようだ。

また話せなかった、まだ話さずに済んだ、二つの思いを抱えながら自室に引っ込むと、鞆を下ろすと同時にスマートフォンがメールの着信を知らせて震えた。

『芦花^{ろか} 夏期講習終わった？ 今からツクヨミ集合ね』

「昨日のライブよかったー！」

「良すぎちゃった！」

呼び出されたのはツクヨミ内の待ち合わせスポットでお馴染みの河原喫茶、通称ツクヨミ川床。到着するなり、待っていた真実^{まみ}と芦花が興奮気味に詰め寄って来た。

「彩葉の演奏！」

「感動して泣いたー！」

「あ、ありがと……でも、ほら、周りに人もいるから静かに、ね」

「無理！ 騒ぐ！」

「いろP、さいこー！ 私たちいろPの友達でーす」

お願いだからやめて。制止の声など聞こえていやしない。芦花も真実もまだライブが続いているかのようなテンションではしゃぎまくり、

「花丸つけたげるー」

最後に私のおでこにしゃしゃっと丸を描いてくれた。これも、ありがとうでいいのだろうか。

「で、どうなの、一夜明けた感想は？」

ひとしきり騒いで満足したのか、芦花はようやく座布団に腰を下ろした。

「推しとのコラボどうだった？ 私もヤチヨとお近づきになりたいな」

真実もインフルエンサーの顔をのぞかせつつテーブルに肘ひじを乗せてくるけれど。

感想……感想、か。

「どうだろう、よくわかんないかな」

「えー、なにそれ？」

ごめんね、謙遜けんそんでもなんでもなくわからないんだ。つい昨日のライブが、もう遠いことのように。

「そういえば、かぐやはどしたー？」

いるはずもないかぐやを捜して真実がきよろきよろと首を振る。

「あー、かぐやは……魚」

「魚？」

「魚、捌さばいてたよ」

嘘をつかないように言葉を選ぶと、我ながら無茶苦茶な返答が口をついた。

「へー、魚あ」

「そっかー、魚かあ」

それでもなぜか納得したふうの二人。一瞬の目配せを交わし合うと、

「じゃあ、ちょうどいいかもね」

「だねー」

謎の眩きを漏らしながら芦花が空間に四角を描いた。感知したツクヨミが四角を埋めるように表示したのは一枚の電子チラシ。内容を問うまでなくデカデカと、

『花火大会』

と書き付けられていた。

「夏の終わりに花火などいかがかなー、お嬢さーん」

なんでそんないかがわしそうな言い方するの。

「よくない？ ツクヨミもいいけどお、やっぱりリアルで浴衣着てー、うちわ持ってー、屋台全部巡ってー、ね？」

真実の狙いは多分屋台の方なんだろう。てゆーか、全部って言った今？

「どう、彩葉？」

「うん、いいんじゃない。電車で一時間くらいか。みんなで行くよね？」

あ、でも浴衣ならタクシーの方がいいのかな？ 四人で割ればまあなんとか私もいけるし……
ってこれかぐやに毒されてる？ 私の選択肢にタクシーが入ってくるなんて！ などと頭の中で
やり繰りしていると、

「ノンノン、我らには大事な使命があるから行けないのです」

なぜか発案者に拒否された。

「夏休みの宿題を完全に放置してたのです」

「というわけで」

「あとはよしなに」

私が口を挟む間もなく言い終わると、芦花と真実はさっさとログアウトしていった。二人とも
宿題はさっさと終わらせるタイプだ。……優しいな、ほんと。

手元に残された花火のチラシをもう一度読み返してみる。

日付は今日だ。

「……かぐや」

にわかに湧き上がってきた緊張に押し出されるように、私もログアウトして自室に帰った。

部屋着に着替えてリビングルームに下りる。

動画の撮影は終わったようで、かぐやはまな板に余るほどの鯛を握り寿司に変えていた。

「かぐやさん、絶好調っすか」

なんだか妙に気恥ずかしくて変なキャラを入れつつ話しかけると、

「お、彩葉。いいところに来た」

金髪の寿司職人は刷毛でささっと醬油を塗って、握りたての甘鯛を口の中に放り込んできた。
イノシン酸だかグルタミン酸だかわからない強烈な旨味が口内を刺す。

「なにこれ、うますぎ」

である。

「でしょ？ 明日は麺からラーメン作る！」

「すげえ……」

撮影のテンションを引きずったかぐやは、褒められてさらに興奮したようにテカテカの顔でブイサインを決めてみせた。

どこことなく空気が軽い。今朝までかぐやの周りを覆っていた透明の膜は、すっかり溶けて消えたように……なんか、今なら言えそうだ。

頑張れ、私。似合わんことをする勇氣出せ。

「……かぐや」

「ん？」

それでもやっぱり、面と向かつては恥ずかしい。だから、私はポケットからスマートフォンを取り出して花火のページを表示させ、

「あ、遊ぼー」

下手くそなかぐやの真似をして誘うことしかできなかった。

※

「やった！ やたやた！ やった――！ やった――！ やったああ――！」

喜びすぎ喜びすぎ。

花火に誘われたかぐやは、狂喜乱舞という言葉は今産み出そうとするかのようににはしゃぎまくり、乱れまくり、踊りまくり、

「すぐ行こっ！」

そのまま私の手を引いて玄関に突進した。謎のテンションすぎる。

「待って、かぐや。落ち着いて」

「無理！ やりたいことがいっぱいなんだもん！　すぐ行かないと」

「だからって、その恰好じゃ外出れないから」

「大丈夫、服は着替えられるから！　お店も……はいっ、今予約入れた！　さあ、行っくぞー！」

「包丁しまう!!」

刃物を携えて表に飛び出そうとする宇宙人を何とか部屋に引き戻し、出刃包丁をキッチンにしまった。危なかった。あわや警察沙汰になるところだ。ついでに出しっぱなし白甘鯛も冷蔵庫にしまい、食器類を食洗器に――、

「そんなん、いいから早く早く！」

――放り込もうとする前に焦れたかぐやに拉^ら致^ちられて、引きずられるようにマンションを出た。

「ねえ、かぐや。急ぎすぎだから」

「だってだって、彩葉から誘ってくれたの、初めてなんだもんっ！」

……そんなに喜ばれても。太陽のように笑うかぐやが、私の瞳の奥でいつまでも輝いていた。

そんなこんなでまず飛び込んだのは、手ぶらで入店OKを売りにしている駅前和服レンタル屋さん。せっかくだから浴衣を着て花火大会に行こうというかぐやの提案に乗った形だ。

「ねーねー彩葉、かぐや彩葉の浴衣選ぶからさあ、彩葉かぐやの選んでー？」

「え、良いけど」

「きゃっほ——！ い・ろ・は・に・に・あ・い・そ・う・な・の・はー♪」

るるんと歌いながら選び始めるかぐや。うーん、かぐやに似合いそうなのかあ……。

十分ほど店内を吟味^{ぎんみ}して、二人とも選び終えた。似合いそうなのを、と考えつつも私の好みが入っちゃったなーとか思いながら「せーの！」で見せ合うと、

「あ、彩葉ひまわり選んでるー！」

「かぐやも？」

私が選んだのは紺色に淡い黄色一色でひまわりが描かれた落ち着いた浴衣、かぐやが選んだのは白地に大輪のひまわりが描かれた元気な印象の浴衣だった。

「……私、あんまひまわりっぽくない？」

「んええー？ 一人で真っ直ぐ立ってて、綺麗で、彩葉っぽいよ！」

上向いてて明るくて目を引いて、絶対かぐやっぽいと思うけどな。

着付けとヘアメイクをしてもらって完成。店員さんに「めっちゃ仲良さそうですねー！」と声をかけられ、かぐやが「やっぱわかったちゃうかー」と返していた。やかましい。

お揃いの髪飾りをつけてもらった私とかぐやは、最後に店の前の大鏡で二人並んで、はいポーズ。

「和服良き〜☆」

「なんか変じゃない？」

「何着ても似合うよ〜！」

まあ、確かに、ちょっと、良い感じ、かも……。

「あ、彩葉照れてるー！ ふんふんふんふーん♪」
上機嫌すぎ。

「もう行くよ」

このままだと一生出かけられそうにないので、速足で鏡の前から離れた。

二人なので電車で会場まで移動する。改札を抜けるまでは少し照れ臭かったけれど車内にも何人か浴衣の子がいてちょっと安心した。浴衣にしてよかったな。

「見て見て、彩葉」

子供のように座席に膝を乗せて窓を覗き込むかぐや、一瞬注意しようかと思ったけれど、
「すっごーい、早ーい！ うわ、ぶつかる、怖っ！」

電車なんて何回も乗ってるのに初めてみたいな反応だ。今日は本当に元気。

「駅に着く時は前向いて座ってね、かぐや」

子供を連れ出す親の気持ちが少しわかった。

駅を出て会場まで歩くうちに浴衣姿の女の子はどんどん増えていった。色とりどりの花模様を浴衣に咲かせる女の子たちは、花火が始まるまでのイベントの主役だ。焦げたソースの匂いがほのかに香って来た。

「彩葉、こっちこっち！」

何度も私を振り返りながら土手の階段を上るかぐや。上から水面を見下ろすと涼やかな河原の風に迎えられた。引越した時もあったけれど、かぐやはなぜか風と仲が良い。

多分あの辺から上がるはずだと指を差すと、すでに花火が打ち上げられたかのようにかぐやの目が輝いた。

「さてと、始まるまでまだ時間あるし。どうする？」

「屋台！ 全部回る！」

だから、全部は無理だから。

それでも、時間の許す限界まで屋台を見て回ることにした。

「彩葉、銃あるよ、銃撃とう！」

銃って言わないで。まずは射的、エイムには自信があったけれど一つも当てられなかった。これは多分銃が悪い。

「かぐやは当たったもんね」

はいはい。次は蟹釣り。ちょっと怖いから私は見てるだけにさせてもらう。

「二匹釣れた！」

すごいじゃん。

「見て見て、指食べようとしてる」

痛くないの、それ。指挟まれてるけど。

「やっぱ、現実さいこー！」

私はツクヨミも好きだけどね。

「次！ 次！ 次は何する？」

「もう花火始まっちゃうよ」

「ヤバッ、ご飯買わないと！ タコ焼きと焼きそばとカキ氷と唐揚げとじゃがバターに焼き鳥に牛串とフルーツ串ときゅうり串と……それからそれから」

ねえ、本当に全部回ることになっちゃうから。

「ふう、間に合った」

両手にずっしりと重い戦利品をレジャーシートに下ろした。まさか、あれから本当にほぼ全種の屋台を巡ることになるとは。花火が始まっちゃいそうまでヒヤヒヤした。

「ひょえ〜、楽しすぎー！」

かぐやはそんなバタバタすら楽しそうだったけれど。

「楽しキングダム！」

あ、なんか国が出来た。えーい、もうノリだ。かぐやの真似をして両手を高く空に掲げる。

「うえーい、彩葉真似っこー」

恥ずかしっ。やらなきゃ良かった。

私もちよっと、はしゃいじゃってるかな。多分、無意識に気負っているのだろう。これから話さなきゃいけないことに。

「ねえ、かぐや……」

「ん？」

「……いつも着けてるよね、それ」

だめだ。また言えない。誤魔化すようにかぐやの銀のブレスレットを指で示した。

「あー、なんか落ち着くんだー。故郷って感じ？」

「そっか、故郷か」

「うん」

「……」

やっぱり、まだ言えない。不意に発生した沈黙を埋めるように、花火大会決行の号砲が上がった。いよいよだ、見物客が期待にざわつく。

「はー、楽しキングダム最高だよねー」

何も言えない私の代わりに、かぐやが軽口を引き受けた。話したくなるまで待つよ、そう言ってくれているかのように。

「月ってさあ、味も温度もなくてまじつまんないの。決められた役割をずーっと、繰り返すだけなんだよね」

「……そうなんだ」

「こっちでいえばゲームのNPCみたいな感じで、真似っこすら誰もしてくんなかったんだよね。終わればまた始まり、始まればまた終わる。そのループを繰り返して、新しいお話なんて、いつになっても始まらない」

全然想像つかないよ。

「そもそもそんなこと考えることがもう異常っていうかさ……かぐやだけ、浮いてたんだー」
そんな悲しい言葉を、そんな綺麗な笑顔で言わないでよ。

突然、周囲から歓声が湧いた。空気を切り裂く高音と共に光弾が筋を引いて上っていく。そして、

「……わぁ」

花火が弾けた。

夜空に大輪の花を煌めかせ、どんっと鼓膜を振るわせる。

「綺麗……」

素直な感想がかぐやの口から漏れた。そこからは立て続けだった。空を割ろうとするかのよう
に連続でスターマインの花が咲く。白い肌を花火色に染めながらかぐやが言葉を続けた。

「寂しいし、退屈。毎日繰り返し、退屈、死にそう。もうやだ。どっか行きたーい、って思っ
たら、違う世界が見れる窓を見つけたの」

……窓？

「窓から彩葉たちの世界を見たら、みんな好き勝手に動いてて、複雑で、一回きりで、自由に見
えた」

「私たちが？」

「うん。でも、こっちに來てわかった。みんな抑えてもいるんだよね、自分の気持ち。多分、も
っと大事な物のために」

なんだ、よくわかってるじゃん。ついこの間までパンケーキねだって泣いてたのに。あれはい
つのことだったか。一ヶ月？ 三週間？ そんなかぐやの成長が嬉しくて、少し怖くて、少し悲
しくて、

「なに、大人じゃーん？」

ついつい茶化すように言ってしまう。

「えへへ、彩葉の真似かな」

かぐやは特に気を悪くした様子もなく微笑むと、

「ねえ、一個聞いていい？」

「何？」

「彩葉、お母さんのこと好き？」

笑顔を崩さないままそう尋ねた。突拍子もない質問だったが、かぐやの中ではそれが重要な確認なのだろうか。

「好き……好き、か？」

ずっとあの人のことを考えてきたけれども、今となってはそんなシンプルな言葉で表現できるような感情ではない。

「……どうだろう、わかんないな」

家族が好きだった。いつも優しく、音楽のことを教えてくれるお父さん。いじわるだけど遊んでくれるお兄ちゃん。かっこよくて、綺麗で、強くて、みんなに憧れられているお母さん。普段の厳しいお母さんと、お父さんといるときの柔らかい雰囲気のお母さん。お母さんに褒められると涙が出るほど嬉しかった。突き放されると全てが否定された気持ちになった。私の気持ちを、お母さんが利用しているのが嫌と言うほどわかってても、私は、お母さんが——大好きだった。認めてほしかった。そのためなら死んでもよかった。

でも、どれだけ頑張っても私は完璧にはなれなくて、お母さんは変わらなくて、笑ってくれなくて、責められて、ぶつかって、そしていがみあうことを望んでいるようなところが耐えられなくて、逃げ出した。矛盾していて、ドロドロで、目を覆いたくなるほど生っぽいものが私の中にある。

「そうだね……嫌いになれたらって、何回も思ったよ」

泣くことができたらどれだけ楽だっただろう。涙をかき消すように花火の音が夜空に響く。一つ目の破裂に遅れて無数の小玉が連続で弾ける。まるで光の花束のようだ。

「そんなん、彩葉、余計に可哀想じゃん」

かぐやの明るい声色と相反して目に涙の膜が張る。事情を知らない誰かに言われたらムツとするだろうその言葉が、なんだか染みるようだ。そうか、私、可哀想だったのかもな。

「ごめんね、あの時」

あの時？

「お母さんのことおかしいって言っちゃって」

ああ、あの時……。

「てか、怒ったってよかったのに。かぐやにはわかんないって、言いたかったしょ？」

——あんたには、まだわからん。

不意に、母の言葉が頭に響いた。同時に目の前に蘇る棺ひつぎと祭壇と、涙一つ流さない喪服の母、泣きじゃくる私。

——お母さんは悲しくないの？

悲しくないはずがない。辛くないはずがないのに。私はただ、お父さんがいなくなっちゃって寂しいね、お父さんのこと大好きだったよねって、お母さんと話したかった。受け止めてほしかった。お母さんはもう受け入れて次に進むんだって、自分が頑張らなきゃって思ってたんだろ。でも、私は違ってた……違うことが、悲しかった。

——あんたには、

どんっと、下腹に響く爆発音で我に返った。一際大きな花火が鮮やかに夜空を照らす。

「違うよ、言いたかったんじゃない」

「……彩葉」

「言いたくなかったの」

すごく、悲しかったから。

どうしても、言いたくなかった。

「そっか……」

指先に温もりを感じた。かぐやが私の手に掌を重ねてくれた。

私はその手をすり抜けて、逆に手首をギュツと握り返す。滑らかで、細くて、それでも芯の通ったかぐやの腕。いつの間にこんなに強い腕になったのだろう。電柱から出て来た時は、ふかふかで、頼りなくて、力を込めれば指が肉を通り抜けそうだったのに。

あんなに小さかったのに、もう……。

「ね、かぐや」

「うん？」

「かぐや……」

「……うん」

「帰っちゃうの？」

「うん」

かぐやはあっさりと頷いた。やっと聞けたのに。ずっと聞きたくて、ずっと聞きたくなかったことなのに。

「いやー、月の仕事放り出してきちゃってさ。強制送還的な？ あはは」

かぐやの苦笑いを真似るように、花火が夜空に笑顔の絵文字を描いた。続けてハート、その次は土星。ユニークで自由、そんな花火を見上げながらかぐやは言う。

「……かぐやは、かぐや姫だったみたい」

振る^{よじ}ように打ち上がった光弾が破裂し、キラキラと色を変えて広がった。夜空に万華鏡を覗くかのように。

「次の満月の夜にお迎えが来る」

2030/09/12

次の満月を示すあの数字は、やっぱりかぐやが月に帰るタイムリミットだったのか。

「お迎えって、うちに来るの？」

「ううん、多分ツクヨミに来る。仮想の世界って月ととても近いから。あそこなら舟を飛ばさなくても簡単に干渉できるはず」

月の人たち……ライブの後に襲ってきたあの人型のことか。あいつらが月に高度な文明を築く宇宙人だとすれば、ツクヨミでの人知を超えた振る舞いの数々も納得がいく。

かぐやはとっくに気付いていたんだろう。いや、思い出したというべきか。多分、月人に触れられたあの瞬間に。

かぐやの手首を掴んだ手に力が籠もった。あんな腕、また振りほどけばいいじゃないか。

「また、逃げればいいじゃん」

「え？」

「かぐやは、かぐや姫じゃないよ。もっとハチャメチャで！ めちゃくちゃで！ だから、おとぎ話とは違うじゃん！」

あんな腕、何度でもへし折ってやる。逃げればいいじゃないか。なんで一緒に逃げてって言ってくれないの？ そんなのかぐやらしくないじゃん。子供みたいに泣いて喚いて暴れたらいいじゃないか。それが、かぐやじゃん。いつの間にそんなに――。

「そんな、ハチャメチャかぐや姫にもお迎えが来ましたが、最後の日までめちやくちや楽しく過ごしましたとさ。って、そーゆーのがいいじゃん☆」

いつの間にそんなに、大人になっちゃったの。

また、私だけが泣いている。

「これが私のエンディング！ チョー楽しく運命に向かって走ってく」

ヒーローよろしくポーズを決めてかぐやが言い放つ。

『受け入れて覚悟するしか、ない』

それはいつかの私のセリフだった。そんな綺麗な顔で言われたら、もう何も言えなくなるじゃん。

また花火が弾ける。広がった光の粒が尾を引いて夜空に長く垂れ下がった。

しだれ柳、まるで光の涙を流しているかのような。夜空だけが私と一緒に泣いてくれていた。

「そりゃあ、本当はさ。もっともっと、彩葉と歌いたかったよ。新しい曲だってたくさん。あ、

そうだ、ライブしたいなー。お迎えが来る日！ 派手に！」

その言葉に応えるようにスターマインが派手に弾けた。

かぐやは連続で弾ける火花を食い入るように見つめ、

「うおおお、腹に響く！ 煙の匂い！ いいな――」

花火に負けじと飛び切りの笑顔を咲かせた。

可愛いな、かぐやは。

それから、私たちは黙って空を見上げ続けた。

花火が終わるまで。周りから誰もいなくなるまで。二人っきりになるまで。川のせせらぎが聞こえるまで。

「もう、おうちに帰らなきゃ」

かぐやが静かにそう言うまで。

「帰れなくなっちゃう」

それがかぐやの気持ちなら尊重しなきゃ。そう思えば思うほど、苦しかった。

※

花火から帰ってすぐ、かぐやはライバーの引退と卒業ライブを発表した。

SNSは即座に沸騰し、驚きと悲しみと撤回を求める声で溢れ返った。それを追いかけるように真相を語ります系や、陰謀論を絡める考察まで混じりこみ、阿鼻叫喚あびきょうかんの体ていをなす。

かぐやはそれら全ての声に対し『楽しかったけど、これでおしまい!』とだけ答え、それ以上一切の言及を避けた。

『かぐやちゃん、やめちゃうの?』

『かぐやちゃんと何かあった? 大丈夫?』

『かぐやちゃん、どうした? 何かあったら相談しろよ』

真実や芦花、兄からも心配するDMが届いたけれど、かぐやがああ言った以上私から言えることは何もない。

『ありがとう。大丈夫だから』

ただそれだけを記して返事とした。

嘘は何も言っていない。かぐやが月に帰るだけ、かぐやが家に帰るだけ。それは決まっていたことだし、かぐやも受け入れているのだから、『大丈夫』。

そして私も、元の日常に戻るだけなのだから、『大丈夫』だ。

進学校の始業式は極々簡素に執り行われ、早速授業が始まった。

学校が終われば即、アルバイト。戦場のようなBAMBOO cafeでも、私は淡々と仕事をこなす。

「酒寄さん！ ど、ど、どうしよう、誤発注でカボチャ四百注文しちゃった！ もうキャンセルできないって、おしまいだああ」

「ごめんなさい、店長！ 私のせいでえええ」

落ち着いて、店長とみおちゃん。九月はカボチャが旬だから臨時のカボチャフェアを開きましょ。そうだ、何も騒ぐ必要はない、全ては通常運転なのだから。

「お疲れ様でしたー」

いつもの時間にアルバイトを終え、いつもの道をいつものように歩いて帰る。見上げれば、私たちの住むタワーマンションが暮れなずむ空を分断していた。

かぐやがいなくなったら、あそこも引越すことになるだろう。また安いアパートを探さねば。そうすれば、全ては元通り。完璧女子高生、酒寄彩葉の平和な日常が戻ってくる……。

「え？」

歩道を踏む足がビタリと止まった。

そこは、ついこの間かぐやと浴衣を着付けてもらったレンタル着物屋さんの前。二人並んで浴衣姿を見せ合った大鏡に、今にもボロボロと崩れ落ちそうな私の姿が映っていた。

いつもの暮らしがやっと戻ってくるってだけ。元の私に戻るだけ。それなのに……。

「……何て顔してんだろ」

鏡の中の私の顔に触れてみた。冷たくて固くて無機質な頬。そう、これに戻るんだ。この、日常に。

「ただいま」

「おかー」

マンションに帰ると気の抜けた声に迎えられた。かぐやはリビングに洗面器を持ち出して、手をかざしたり引っ込めたりを繰り返している。

「何してるの？」

「蟹ビビらしてる。おらー、グーだぞー。恐れおののけ」

本当に、何をしてるのよ。

ダイニングテーブルに鞆を置いて、蟹を眺めるかぐやをさらに眺めた。絨毯じゅうたんに長々と寝そべりながら蟹と遊ぶかぐや。乱暴に水を汲んだのだろう、洗面器の周りがぐっしりと濡れていた。

「……ねえ、かぐや」

「チョキー。これはあいこー、運が良かったな」

「卒業ライブするんだよね」

「するよー。さあ、次が最後の勝負だ。何が出るかな、何が出るかな」

「新しい曲……作る？」

「え!？」

途端にがばりと飛び起き上るかぐや、腕が当たって洗面器に大波が起きた。

「マジ！ いいの？ 新曲作ってくれるの？」

「うん、いいよ」

「やひやふー！ やほやほっ、ひゅー！」

防音の利いたマンションに引越してきてよかった。かぐやは狂気じみた顔で万歳三唱を決め、蟹との最後の勝負に敗北するのだった。

「うまくできるかわかんないけど。どんなのがいい？」

「あの途中で終わってた曲！」

「え？」

イメージを聞いたつもりだったけれど、まさか具体的に曲を指定されるとは思わなかった。途中で終わっていた曲ってつまり――。

「ほらほら、これこれ」

だから、勝手に人のPC開かないでって。かぐやがモニターを突き破る勢いで指し示したのは、『タイトル未定（彩葉と共作）』。

よりによってこれか。一瞬、胃袋がズドンと重くなった感覚に襲われたけれど、

「わかった」

私は深く頷いた。

「じゃあ、ちょっと……集中して作るから」

かぐやにそう宣言して、自室に籠もる。

曲を作るなんていつ以来のことだろう。鍵盤けんばんに指を乗せて一呼吸、思うままに走らせた。心地良い高音が躍り出る。

——形無しで成功するのはホンマに一握りや。楽しんでる場合やあらへん。

母にそう言われてからずっと封印していたピアノ。でも、本当にその言葉だけが、ピアノから離れた理由だったのだろうか。

——彩葉。

低音のリズムに紛れるようにお父さんの声が聞こえて来た。

鍵盤に触れると、いつもお父さんを思い出す。ピアノの音はお父さんの声だ。鍵盤はお父さんの指。その上に引く赤い布はお父さんの髪の毛、かな？ お父さんはピアノを弾く私の横でいっぱいお話を聞いてくれた。

― ねえ、お父さん。今日幼稚園でめぐちゃんに褒められてん。

― よかったなあ。彩葉は上達が早いから、父さんの誇りや。

― ねえ、お父さん。お兄ちゃんがまた変なこと言うてきてん。

― 朝日は子供やさかい、彩葉が窘めてやり。あさひ たしな あ、これは朝日には内緒やで。

― ねえ、お父さん。お母さんが遊んでくれてん。

― 紅葉は彩葉のことが可愛くてしゃあないんやな。もみじ

ピアノに触れるということは、死んだお父さんの思い出と向き合うということだ。幼い私はそれが怖かったのかもしれない。そんな私を開放してくれたのは……。

両手の指が速度を上げていく。語りかけるように細かく音を繋いでいく。

ねえ、お父さん。私、大切な人ができたよ。とっても可愛くて、とってもだらしなくて、優しくてわがままで、腹が立って、笑顔をくれる人。お父さんもお母さんに同じことを思ったのかな。ねえ、お父さん。聞こえてる？

お父さんにとって、この世界はどんなふうに見えていたんだろう。

私はお父さんのことを何も知らない。一緒に過ごしたのは数年だし、記憶の中ではいつも笑っていて、誰かのために心を砕く姿ばかり。怒ったり悲しんだり、苦しそうな顔は終ぞ見せなかった。つい

時折思う。優しすぎるお父さんにとって、きっとこの世界は好ましくなかったんじゃないだろうか。

お父さんは事故で亡くなった。けれど、それは振られたサイコロがそちらに傾いただけで、本当は……。そんなことを考えたこともあったけれど、真相はもはや誰にもわからない。ひよっとしたらお母さんは全てを知っているのかもしれない。でも、何を抱えていたとしてもあの人は墓場まで持っていくだろう。

どんな気持ちだったの？ どうして、誰の言葉も届かない場所へ行ってしまったの。お母さんを、私を置き去りにして。

指が止まる。無音を奏でるような沈黙が暗い部屋に広がった。

「……ねえ、お父さん」

私、もう大事な人を失いたくないよ。

へとへとになった指を鍵盤から離してスマートフォンを握った。メールの宛先は、芦花と真実と、お兄ちゃん。

『ごめん、全然大丈夫じゃなかった』

そんな書き出しで始まるメッセージを全員に送信した。

※

「かあゝゝ、かぐやちゃんが本当に月のプリンセスとは……わかるっ！」

何が？

何がわかったのかはさっぱりだが、帝^{みかど}アキラは腕を組みながら何度も大きく頷いた。

急な呼び出しにもかかわらず、芦花と真実と帝に加えブラックオニキスのチームメイトの雷^{らい}と乃依^{のい}、さらにはヤチヨまでもがツクヨミ内の屋外ミーティングルームに集まってくれている。

事情は既に全て話した。かぐやが七色に光る電柱から生まれたこと、月からやって来た宇宙人であること、次の満月にお迎えが来て月に帰ってしまうこと。

口に出して喋ってみると一から十までうさんくさい話でしかないが、

「築地生まれじゃなかったんだー」

「海行っても肌真っ白だったもんね」

「電柱から生まれた……わかるっ！」

みんな各々に腑に落ちるところがあるらしく、拍子抜けするほどすんなりと信じてもらえた。となれば、あとは作戦だ。

「ヤチヨ、かぐやを守ることでできないかな」

月人はツクヨミに迎えにやってくる。ツクヨミの管理人であるヤチヨならあるいは。

「調べてみたけど、どこからアクセスしてるかもわからなかったんだよね、ごめん」

「じゃあ、ライブも中止して、かぐやちゃんが一生ここにログインしないというのは？」

芦花の意見は私も考えた。しかし、かぐやは元々電柱から現れたような存在だから、私たちとは違う仕組みで生きているように思える。もしかぐやがツクヨミに行かなくても、きっと月人は強引に、現実のかぐやを現世からログアウトさせるように、攫^{さら}って行ってしまう気がした。

……どうすればいい。全員が黙り込む。早くも絶望が空気に満ち始めるが、

「相手が現実で手出しできないなら、ツクヨミで追い払えばいいんでしょう？」

帝だけは、同じ空気を吸っていないかのように笑っていた。

「なんだよ、その顔は。そのために俺らと呼んだんだろ。任せとけて。宇宙人だろうがなんだろうが、ツクヨミに入ってきてくれるなら好都合だ。引き込もうぜ、ここなら俺たちが一番つえーし。力づくで叩き潰す、月に帰りたくなるまでな」

何という暴論だろう。根拠も理屈もない、どこへ出しても恥ずかしくない正真正銘の暴論だ、と、

「……私もやる。何ができるかわからないけれど……お願いします」

私もそれしかないと思うから、覚悟を決めて頭を下げた。月人、ブツ飛ばすべし。

「よし！　じゃあ準備だな、乃依」

「えー、あれー？　めんどー」

「リーダーは絶対」

「はいはい」

方向性が決まればブラックオニキスの行動は早い。ぶーたれる乃依を雷が窘め、暴論が通る可能性を一パーセントでも高めにかかる。多分、今までもこうやってこの三人は不可能を可能にしてきたのだろう。敵に回したことがあるからわかる、黒鬼はやっぱり最強のチームだ。

「彩葉、来年もみんなで海行こうね」

芦花がそう言って微笑んだ。

「温泉も行こー！」

真実も笑顔で手を合わせる。

「……ありがと」

そして、私は芦花と真実がいる。この二人の笑顔が今は何よりも頼もしかった。

どこまでできるかわからない。でも、最後まで足掻いてやる。そんな思いを心に灯してくれるから。

「……あ、彩葉。おかえりー」

ツクヨミから戻って目を開けると、当たり前のようにかぐやが部屋にいて、当たり前のように私のPCを弄^{いじ}っていた。

「これ、すごくいい感じじゃん！」

どうやら、作りかけの曲を勝手に聞いているらしい。どこまでいっても行動がかぐやらしくて逆に安心する。

「歌詞で苦戦してるけど、もうちょっとで完成するから」

スマコンを抜き取りながらそう言うと、

「楽しみー。本当に好き、このメロ〜。彩葉天才！」

かぐやはヘッドホンに両手を重ねてうっとり天井を見上げた。

「……いや、私だけじゃなくて。これ、お父さんと一緒に作りかけてた曲なんだ。初めての曲」

「そうなの？」

「お父さんが死んじゃってからは……何曲かは作ったんだけどいつも何か違う気がして、やめちゃった」

「そっかー、かぐやは好きだけだな。彩葉の作った曲全部」

「ありがと。とにかくこの曲は何が何でも今日中に仕上げちゃうから」

「じゃあ、かぐやも手伝う！ 彩葉の代わりに勝手に歌詞作っちゃお。お父さんも喜ぶに違いない。『壁ドンだって暮らしを盛り上げるプレリユ〜〜ド〜〜♪』。はい、これでいいんじゃない」

ん？」

いいわけあるか……いや、でも。

「いいのかもね」

そう思えちゃうからかぐやは不思議だ。

「サビはこんな感じだよ！ この一瞬をくく最高のパーティーにしよう」

「ねえ、かぐや」

「ん？」

「……いや、何でもない。ヤチヨがライブの演出引き受けてくれるって」

「頼んでくれたの!? やりー、振り付け考えてくる」

ヘッドホンを放り出して駆け出していくかぐや。すぐにリビングからドタバタと暴れる音が聞こえて来た。こんな時でもかぐやは変わらない。強くて自由で真っすぐで。それなのにどうして……。

「いや、今はいい。私は曲を仕上げなきゃ」

かぐやが放り出したヘッドホンを装着してPCに向き合う。

不思議なものだ。私はかぐやを失いたくない。そのために密かに人を集めて月人撃退の作戦まで練っている。その裏でこうやってせつせと卒業ライブの曲を作っているのだから。みんなが知ったらどう思うだろうか。

ごめんね。でも、諦めたわけじゃないから。これはただ、私が個人的にかぐやに贈りたいだけ。

「さあ、最高のパーティーにしよう」

作曲を再開すべく、再びDTMソフトを弄りはじめる。

編曲済みのサビが耳に流れ込んでくる。かぐやのリクエストに応え、強めのアップテンポで疾走感に溢れた仕上りのメロディ。

出来たばかりの歌詞を合わせて口ずさんでみる。

『この一瞬を——最高のパーティーにしよう——』

「……あれ？」

思わず声が漏れた。

曲を止めて十秒戻す。またサビが流れ始めた。自然と身体が動き出すような軽快なリズム。作ったばかりのかぐやの歌詞。

『この一瞬を——最高のパーティーにしよう——』

「まただ……」

違和感がまた襲ってきた。いや、これは違和感じゃない。既視……感？

もう一度サビの頭に戻す。再生。今度ははっきりと捕まえた。そうだ、この感覚だ。

前にも後ろにも進めなかった私に、翼が生える感覚。

疲れた頭がつつい^{つむ}紡ぎ出^だしてしま^うう感覚。

月を見上げて涙が零れる感覚。

泣き止まない赤ちゃんがスヤスヤと眠りに落ちる感覚。

『大切な——メロディは流れてるよ——』

——Remember

「同じメロディ？ 何で……」

ヤチヨのデビュー曲。無意識に盗作してしまったのか？ ヤチヨの曲を聞きすぎて無意識に入
れ込んでしまったか？ いや、違う。この曲はお父さんと作った曲だ。もちろん、ヤチヨがデビ
ューする遙か前に。じゃあ、ヤチヨが？ それもあり得ない。この曲はずっとこのPCに眠って
いた、私と死んだお父さん以外、母でさえ知らない曲なのだから。であれば、偶然だ。偶然にメ
ロディのワンフレーズが一致した。それだけのことだ。

「よくあること……だよね」

そう言い聞かせて作業を再開したけれど、違和感は消えていない。
何か重要なことを見逃している、そんな思いが長く尾を引いた。

※

二〇三〇年の九月十二日は、あっさりとやって来た。

午後零時を迎えた瞬間に迎えが来たらどうしよう、そんなことを考えていたのは私だけのよう
で、

「彩葉、おっはよー！」

かぐやは憎らしいほどいつも通りに起きてきて、

「はい、二十三番かぐや！　ここ十五年で最高の出来栄え」

いつも通りに美味しい昼食を作り、

「ふふ〜ん♪　ふんふんふ〜ん♪」

配信部屋で鼻歌交じりにライブの準備を始めた。

最後のつもりだとしたら、随分とあっさりしたものだ、かぐやがそうしたいのなら私に言うことはない。だから、私も極力普段通りを心がけて配信の手伝いをして、

「……え？」

ふと気付いてゾツとした。

かぐやがいない。ちよつと足元が気になって目を下げただけなのに、顔を上げたらもう私は一人になっていた。

嘘でしょ。電撃のような悪寒が身体を貫いた。そんな、まさか……まさか。

「かぐや！」

「何？」

いるんかい。机の下からによつきりとかぐやが伸びて来た。

「何してるの、そんなとこで」

「ん？　これが落ちたから拾ってた」

そう答え、いつも着けているブレスレットを人差し指に嵌めてくるくと回すかぐや。

「驚かさないで」

安堵で膝をつきそうになった。かぐやはそんな私をじっと見つめ、

「彩葉、心配性く。はい、これあげる」

ついさっき拾い上げたばかりのブレスレットを差し出した。

「え、これって」

「ヤチヨが言ってたんだ。こういうのは大切な人にあげなさいって。だから、彩葉！」

「……ありがとう」

「それに、もらったから、名前！ お返し！」

「……名前？」

『名前は人生最初のプレゼント』……つけたな、そういえば。

「うん」

頷いてかぐやは笑った。

雲のない夜空のような、誰の足跡もつかない雪原のような澄んだ笑顔。いつも通りなんかじゃない、今まで見たことのない神々しさすら感じる笑顔。

そこに見えるのは覚悟と決意。いつも通りなんかじゃ、なかった。

「かぐや……」

「行こっか、彩葉」

二人で手を繋いでツクヨミに潜った。

ライブ会場の控え室で、私は一人本番が始まるのを待っていた。

かぐやは先ほどヤチヨがステージに連れて行った。今頃、『KASSEN』のフィールド内に作られた舞台に驚いていることだろう。

私がヤチヨにお願いして作ってもらった特設ステージ、やっぱり戦場はここじゃないとね。

「ただいまー☆」

前触れもなくぽんっとヤチヨが現れる。私ももう慣れたものでヤチヨにも、突然の出現にも驚かない。

「お帰り、かぐやはどうだった？」

「喜んでたよ。燃えるーってさ」

「そっか。ありがとう、ヤチヨ」

「どういたしましての板挟みく☆」

飛び切りのウインクを決めて空間に星を飛ばすヤチヨ。私はそんなヤチヨを見つめながら、心の中で言うべき言葉を探った。

「もし私がヤチヨだったら、かぐやは帰りたくないって言ってくれたのかな？」

零れ出たのは、他意もないただの疑問のつもりだったけれど、

「え……？」

ヤチヨが目を見開いて固まった。そんなに変なことを言ってしまったのだろうか。

「あ、ごめん、わけわかんないよね。忘れて」

「ううん、そんなことないよ。ただ、びっくりしただけ……両想い、だったんだね」

ヤチヨの言葉の意味が、私にはよくわからなかった。でもきつと、私には知りえない世界の話なんだろう。

『各所、準備OKです』

また、いつかのようにライブ開始のメッセージが表示される。

「じゃあ、始めようか。……ごめんね、ヤッチヨはこれから先には行けないことになってるんだ」

驚きはしなかった。ヤチヨはもともと、遙か遠い存在だと思っていたから。どんな事情があっても不思議じゃない。

「……そういう運命だから？」

それはヤチヨが時々する言い回しだった。ヤチヨは頷く代わりに苦笑いをして

「彩葉なら……大丈夫！」

何の根拠もない言葉と共にガッツポーズをとる。

無責任だけどあくまで前向き、かぐやが好きそうなノリだな。そんなことを思いながら私は立ち上がった。

いざ、出陣だ。

※

『何という急展開！ 突如ツクヨミに現れたフリーダム、超新星のかぐやの卒業ライブ！ 泣いている場合じゃないぞ、最後のファンサだ！ 目に焼き付けろ』

かぐや推しを公言するツクヨミ公式実況の忠犬オタ公ちゆうけんは、泣くなと言った張本人でありながら明らかに涙交じりの怒鳴り声をマイクに叩き込んだ。K A S S E N フィールド特設会場に詰めかけたファンたちも、実況に負けじと炎のような歓声を吐く。

そして、会場とモニターで閲覧しているツクヨミ住人たちの興奮が最高潮に達したのを見極めたように、ステージに幾本ものスポットライトが灯された。

その中心に現れるのはもちろん、

「みんな、ありがとー！」

今日の主役のかぐや姫だ。

「今日でお別れみたいなんだけど、悲しくはしたくないんだ！ みんなでお見送りしてハッピーに卒業させて！」

かぐやの呼び声に応え、ファンたちが一層大きなコールを返す。

そして、限度を超えた熱量と音量が空間を破ったかのように、空に数百の花が咲いた。誰もがライブの演出だと思ったことだろう、花卉が弾けて現れた異形の月人たちを観客は拍手と歓声で迎え入れるのだった。

さあ、早速おいでなされた。姫を浚う月人どもめ。みんなが演出だと思ってくれるならちょうどいい、私たちもそれに紛れ込ませてもらう。

月人に立ちはだかるように落下する六つの桃。K A S S E Nのスポーンを模して現れるのは、

「さあ、盛り上げて行こうぜ！」

「……勝つだけだ」

「けっこー面白そうじゃん」

帝率いるブラックオニキスト、

「かぐやちゃん、いえーい！」

「かぐや〜見て見て〜！」

美容インフルエンサーROKAと、グルメインフルエンサーまみまみ、ご来臨だ。当然いろPこと酒寄彩葉も横に控えている。

『鬼あちー！ かつて鎬しのへを削った黒鬼くろおにが、かぐやのラストライブに駆けつけたぞ！』

スペシャルゲストの出現に会場が天井破りの盛り上がりを見せた。怒濤どとうのような歓声にかき消され、芦花や真実の言葉はかぐやに届かないが、

「……かぐや」

リアルですぐ隣にいる私の声だけは別だった。目を開けて肩に手を乗せ、かぐやの耳に口を近づける。

「ライブの余興と思ってよ。私たちは私たちが精一杯やるから。万が一勝っちゃったら、ドンキで買い出して全部乗せのパンケーキつくろ」

「彩葉……」

かぐやも瞼を開いた。

私たちの意識は一時的にツクヨミを離れ、暗い配信部屋でオレンジ色に光る眼を合わせる。かぐやは私の手に自分の手を重ねると、

「そっか……そっか……みんな自由だ！」

ひまわり
向日葵のような笑顔でそう言った。

その笑顔が開始の合図だった。再び瞼を閉じてツクヨミへ潜る。かぐやはマイクを持ってステージへ、私は以前かぐやが作成した演奏とゲームが同時にできるキーボードを持って戦場へ。

侵攻はすでに始まっていた。以前やって来た型とは見た目からして全然違う、七福神を模したような人型の月人が群れをなして迫ってくる。いつの間に学習したのか、K A S S E Nのルールに則った残機表示が頭上に表示されている。

さながら未開の部族の祝祭に付き合う文明人のような振る舞いじゃないか。ちようどいい。そっちがお付き合いしてくれるなら、とことんやってやる。

「戻って来たか、彩葉。むやみに突っ込むなよ、あいつら守備は固そうだ」

「お兄ちゃん？」

踏み出そうとした一步を帝アキラに止められた。意識が数秒途切れたことに気付いたのだろうか、私を守るような形で剣を抜いている。

「……あ、ありがとう」

「なんだよ、最近やけに素直じゃん。配信始めてお兄ちゃんの偉大さに気付いたか？」

「別に、そんなんじゃないし」

帝のガードから離れてそう言うと、

「俺のこと避けてただろ」

月人から目を離さずに尋ねてくる。

「……気付いてたの？」

「まーね。ちょいちょい見てたし」

「何それ？ 何でそんなこと……」

「ま、お兄ちゃんですから」

一瞬だけこちらを振り返った帝アキラのスキンに、昔のお兄ちゃんの顔が重なった。やんちゃ
だけど要領がよくて、誰からも好かれるお兄ちゃん。私が母とぶつかり、いつの間にか飄々
と間に入ってくれたお兄ちゃん。

……ずっと気にしてくれてたってこと？

見捨てられたと思っていたのに。私を置いて家を出たあの日に。もう私なんていらなんだっ
て思ってたのに。なんだよ、それ。

「……あほらし」

その時、甲高い風切り音が耳を突いた。見上げれば、空を覆うほどの氷の矢が頭の上を通過し
ていく。月人が乃依の射程範囲に入ったようだ。

「行くで、彩葉。久しぶりのキョーダイ会議や」

京都弁で帝が言った。

「うわ、懐かし」

釣られて私の返事にも京都のイントネーションが乗る。

キョーダイ会議。まだ実家にいた頃兄妹でゲームすることをそう呼んでいた。母とぶつかって
落ち込む度、お兄ちゃんは私をキョーダイ会議に誘った。そうして、母より容赦なくボコボコに

してくれた。

「楽しかったなー、あん時は」
「楽しいわ。」

「二人でゲームばかりしててな」
「今もしとるけど……。」

「何も変わらんと思ってたけど一個だけ変わったよな、彩葉」
「私が？」

「お兄ちゃんを、人を頼るようになってくれて嬉しいわ」

「……なんでもかんでも頼ってくるやつがおったからさ、その影響かも」
月人が反撃を開始した。チート級の長距離光弾が空を切り裂く。

「そうか。ほな、ずっとここにおってもらわんとあかんな」

そう言って、弾雨の中に突っ込んでいく帝アキラ。雷、乃依がその後続く。最強の三叉トライデントの槍が月人の軍勢を切り裂いていく。

芦花も真実も迎撃を開始した。

私も切り込む、地を埋め尽くすほどの大群に。彼我の戦力差は歴然だ。それでも行く、私たちに力をくれるのは、

『もっと衝動的な音で——もっと感情的な歌で——』

ステージから届く、かぐやの歌声だ。

ねえ。見えてる、かぐや？　これが私たちだよ。かぐやが月から覗いていた地球人だよ。好き勝手に動いて、複雑で、一回きりで、自由。

得体のしれない月人を、電柱から赤ん坊を産み出せるやつらを、本当に追い払えると思っているわけじゃない。

それでも今かぐやの歌を聞きながら戦っていると、不思議な一体感や楽しさを感じている。まさに祝祭の踊り子のように、私たちは踊り続けている。バッドエンドになんか、させない。

※

何度武器を振るっただろう。何人の月人を撃破しただろう。

想いが身体を動かし、限界を超えさせる。

無限に近いエネルギーが、無限に近い力と、無限に近いスピードを引き出させる。

ただ、 “近い” だけだ。

無限そのものではない。月人のように。

「くっ……」

まず、雷がやられた。反則レベルの集中攻撃を受けて櫓やぐらごと消失する。

「キリないね」

乃依は懸命に狙撃を続けるが月人の大軍が押し寄せ、呑み込まれてしまう。すぐにリスポーンするが二人とも残機はもうゼロのはずだ。

「彩葉……っ！」

「ごめんね……」

そして、真実と芦花も落ちた。

「こんなもんか？ 宇宙人どもは。まだ俺と彩葉が残ってるぜ」

踏み止まっているのは私と帝だけだ。しかし、それもいつまで保つのか。

スツと日の光が陰った。見上げると、頭上に一体の月人が顕現けんげんしている。

デカイ。伝説の獣を模した巨大な月人が錫杖しゃくじょうを振り下ろしながら落下してきた。

まるで隕石だ。衝突の爆風に吹き飛ばされて地面を転がる。が、

「——っ」

帝アキラは動じない。ボロボロになりながら月人の落下攻撃を剣一本で受け止めている。

「お兄ちゃん！」

「……雷、乃依、使うぞ」

「御意」

「はい」

空間が歪むほどのエネルギーを全身から噴き出させた帝アキラは、

「おらあああ！」

そのまま力任せに腕を振り抜き、月人の巨体を天高く空の彼方へかつ飛ばした。まるで月まで送り返すかのように。

なんだ、この異常な攻撃力は。それに、顔に浮かんた禍々しい紋様……これってまさか。

『チートモードだあ！ たった今、ブラックオニキスの帝アキラ、雷、続いて乃依にもチートモードの使用が確認されました！』

忠犬オタ公がなりたて、観客席にどよめきが走る。

やっぱり、チートモードだ。ゲームをプログラム側から弄って強制的に全ての攻撃ステータスをぶっ壊れレベルまで引き上げるチート技。もちろん、禁止技であり使用すればツクヨミ側から自動的にBANされて全て失ってしまうはずなのに。

そこまでしてくれるなんて、と胸が熱くなった。

「まだまだ行くぞ！」

限界を突破したブラックオニキスが再び、月人を押し返す。

だが。それでも。まだ足りない。

月人は無限の湧き水のごとく顕現し、数の力で地球人を圧倒する。

「ここはいい！ 走れ、彩葉！」

私はかぐやのもとに走るしかなかった。

走ってどうなるものでもない。わかっていながらそれでも走った。せめて、かぐやの傍でと駆ける私を、

「――っ」

突然出現した月人が幾重にも取り囲む。

そして、かぐやの歌が終わった。

アウトロがフェイドアウトし、踊りが止まる。

それを待っていたかのように空の色が変わった。見上げた空を月人の大軍が覆い尽くしていた。こんな規模の人数をいつでも転送できたのか。あるいは、彼らは本当にただ歌が終わるのを待っていたのかもしれない。戦いではなく、儀式のようなものとして。

かぐやは、全てを悟ったような笑みを浮かべ、敗着を受け入れる。その表情は少しだけヤチヨのようだった。

「……かぐや」

私はもう走れなかった。月人も重ねて攻撃を仕掛けようとはしない。かぐやの姿が見えるように身を引いてくれすらした。

ややあって、一人の月人が歌い終わったかぐやの前に進み出る。そのまま恭しく跪いて見せた。かぐやはまるで旧知の友人を迎えるような顔で、

「はるばるようこそ」

屈託なくそう言った。

「逃げちゃってごめん。でも、すごい、すごい、楽しかったんだ」

顔を上げた月人の表情は変わらない。それでもなぜか、微笑んでいるように見えた。

そして、かぐやが上っていく。

足元に現れた光る雲の上に乗って。大勢の月人と犬DOG Eに伴われて。ゆっくりと空へ。ツクヨミの月に向かって。

「最高の卒業ライブでした！ いっぱいお土産もらっちゃった。みんなありがとう！」
詰めかけたファンに手を振りながら。

「えへへ、名残惜しいけどこれでお終い。それから……」

「彩葉」

現実の肩に温もりが乗った。頬が肩が胸が背中が、温もりに包まれる。

かぐやだ。かぐやが抱き締めてくれていた。

目が開けられなかった。これが最後だとわかったから。

膝から力が抜けていく。崩れそうになる身体をかぐやが支えてくれた。

いつの間に、こんなに大きくなったのだろう。あんなに小さかったのに。手の中に納まるほどだったのに。お腹が空いたと泣いていたのに、外に出たいと泣いていたのに、遊びたいと一緒にいたいと泣いてばかりいたのに。今は私だけが泣いている。

待って、行かないで。

まだしたいこと、いっぱいあるって……。

「……大好き」



どさつと何かが配信部屋の床に落ちる音がした。膝が崩れて座り込む。

自分の身体を抱き締めた。その身に残ったかぐやの最後の感触が消えないように。

肌が悲鳴を上げるほどきつくきつく握り締めたけれど、それでも、温もりはゆっくりと消えていった。

「みんな、お疲れ様でした。本当にありがとう……先帰るね、ごめん」

多分、そう言ってツクヨミをログアウトしたのだと思う。

気が付くと、私は現実世界の配信部屋に立っていた。とにかく、涙を見せないように、頑張ってくれたみんなに失望を見せないように、精一杯平然を装ったつもりだったけれど、うまくいったかどうかは自信がない。

スマコンを抜き取って部屋を出る。

玄関を横目に見つつ真っ暗な廊下を踏み締めた。僅かに開いていたお風呂場のドアを閉め、キッチンを通り過ぎてリビングルームへ。そこでぐるりと周りを見回した。

あらゆるところにかぐやがいた。

脱ぎ散らかした靴、廊下まで溢れた配信用のガラクタ、お風呂から漏れる香り、出刃包丁、冷蔵庫に貼られた簡単レシピと注意書き、壁に染み込んだ笑い声。

家中が、かぐやの面影に溢れていた。

ある日突然やってきて、完璧だった私の生活を引っ掻き回し、ある日突然いなくなった宇宙人。

「お金勝手に使うし。滅茶苦茶やるし。片付けないし。ずーっと、邪魔だったよ。本当、最悪だよ」

ポケットのスマートフォンのお知らせが鳴った。かぐやからの入金のお知らせだった。

『使っちゃった分、返す！ ご迷惑かけました』、だってさ。

「こんな大金、使えるかよ。馬鹿やロー……」

リビングの床に膝をつく。

どうしようもなく涙が溢れた。



終章

その日の明け方から雨が降り出した。

嘘だ、本当はいつから降っていたかなんて覚えていない。降雨に気付いたのがたまたま朝だったというだけのこと。私はリビングルームで膝を抱え、雨の音を聞いていた。雨音以外はなにも聞こえなかった。

顔を上げると、キッチンには指揮棒のようにお玉を振るうかぐやの姿が見える。

「ヤバッ、今日も傑作の予感♪」

ソファの上には、アコースティックギターをでたらめにかき鳴らしながら歌っているかぐやがいた。

「ねえ、聞いて。かぐやも曲作ってみた。前髪切りすぎ歌！」

廊下では、かぐやがドタバタと謎のダンスを踊っている。

「見て見て、これ今SNSで流行ってるやつ。頑張ってるようになったけど今見たら全っ然振り付け違うの。ウケる」

配信部屋に入ると、ペンライトを振り回しながらアイドルの動画を見ているかぐやの声が耳に響いた。

「うへー、この子可愛い〜。ダンスうまい！ 私がここに入ったら金色担当かな？」

私は立ち上がると、マンションのそこかしこに残ったかぐやの残渣ざんさに一つ一つ触れて回った。時間をかけてかぐやの思い出を確かめながら、全てを片付けて行った。

このマンションにこれ以上住むことはできない。金銭的な理由もちろんだが、こんなにたくさんのかぐやを連れて前に進むことはできないから。

お風呂場からは一緒に入ろうとねだるかぐやの声がする。トイレからはタブレットを持って閉じ籠もったかぐやがなかなか出てこない。玄関にはインターホンの音に反応して駆けて行ったかぐやが、宅配の人と延々と話し込んでいる。

そんなかぐやと一人一人向き合っていることを思い出し、何度か日が昇り同じ数だけ沈んだ後、私はついに誰もいないリビングルームにたどり着いた。

ここの壁ってこんな色だったんだ。

私は妙によそよそしい部屋の隅で膝を抱え、新しい空気に身体を慣らすと、シャワーを浴びて丸一日眠った。

目を覚まして、もうかくやの声は聞こえない。片付ける場所もうなかった。前を向くべき時がやって来たのだろう。

次の朝、制服に着替えてローファーに足をつ込む。

「行ってきます」

私の声がからんとした廊下を素通りした。

※

「あ、酒寄さかよりさんだ。もうコロナ治ったの？」

「あれ、留学したんじゃないかったっけ？」

「よかったー！俺結婚したなんて信じてなかったっすよ！」

どうやら数日学校を無断欠席した間に、あらゆる種類の噂が飛び交っていたようだ。いちいち否定して回るわけにもいかないので、私は一様に「おはよう」で通して職員室に直行した。そして、まっさきに立花たちばな先生に頭を下げて、ずっと提出できていなかった進路希望調査票を提出する。

「……やっぱり、法学部か」

先生は私の顔をしばし眺めると調査票を手にとった。

「すみません、ちょっと色々あって」

「酒寄は今まで出来すぎだったから、むしろちょっと安心したよ」

「でも、もう大丈夫なので。法学部目指します、今度受験対策の相談乗ってもらえますか？」

「もちろん」

そう言って、また古びた山羊やぎのような笑顔を浮かべる立花先生、結局最後まで無断欠席について一言も責めることはなかった。

職員室を出ると、廊下で芦花ろかと真実まみの登校を待ち、

「連絡返せんくて、ごめん！」

一目散に頭を下げに行った。

「本当にごめん！ マジごめん！ その、何て言うか、あの……本当に、ごめん！」

何一つ言い訳することができないから廊下で平謝りに謝り倒す。

「無視ひどー」

「家乗り込もうかと思ったよ」

冗談めかして拗ねてみせる二人。

「すまん！ すまん！」

さらに深く頭を下げると、

「……私たちはさ」

「いろは彩葉が生きてればいいから」

真実と芦花は苦笑交じりにそう言った。

「ありがとう、ごめんね」

「それにしても、酷い顔。ご飯食べてなかったんじゃない？ わっ、お肌もがさがさじゃん」

真実が私の頬に触れ、もの悲しそうに撫で回す。

確かに、ここ数日水しか飲んでいないかも。

「よし！ じゃあ、彩葉復活祝いでご飯行こっ！ ちゃんと食べるまで見届けてあげるから」

「いいねー。早速今日……は真実が無理か。じゃあ、明日の晩メシね。この前行ったカフェで、彩葉の奢りだよ」

目にも止まらぬ速さでスマホの画面を叩く芦花が、真実の提案をすぐさま予定へと昇華させる。さすがのコンビネーションである。

「それより、あっちは？ B A M B O O c a f e のカボチャフェア！ あれ行きたい」

「いや、あれ彩葉のバ先じゃん。嫌でしょ、彩葉」

「ううん、別にいいけど」

返事をしかけてチャイムが鳴った。「ヤバッ」と声をハモらせて駆け出す二人、私も一緒に走り出し……あれ。

足が止まった。頭の中の引っ掛かりが足を止めさせた。

二人はなんでカボチャフェアを知ってるんだ？

みおちゃんの誤発注がきっかけで始まったBAMBOO cafeのカボチャフェア。住宅街の隠れ家的カフェのコンセプトから、店にはSNSもなければホームページもない。フェアの存在は店を訪れないと知ることができないはずなのに。

「彩葉、何してんの！」

「遅刻になっちゃう。うちらまだ鞆置いてないんだって」

階段の前で焦れたように足踏みをする、真実と芦花。

まさか、来てくれたのか、BAMBOO cafeに。私を心配して。

いや、それだけのはずがない。わざわざやって来てアルバイト先にだけ寄るなんてありえない。きっと一番にマンションを訪れているはずだ。私のマンションはオートロックだ、私が応えない限り入れない。インターホンは鳴った……か？ 鳴ったかもしれない。でも、私は応えていない。だから、追い返された二人は仕方なくBAMBOO cafeへ。

「彩葉、先行くよ！」

その言葉より早く駆け出した。駆け出して、

「きゃあ！」

「何？」

二人の身体を抱き締めた。

「ごめん」

「え、彩葉？」

「ごめん……なさい」

「どしたの？」

今、ようやく気が付いた。自分がどれほど身勝手だったのか。自分がどれほど傲慢めこうまんだったのか。

「ごめんなさい」

どれほど空しかっただろう、無言のインターホンに追い返されるのは。どれほど辛かっただろう、友人に門前払いを食らうのは。どれほど悲しかっただろう、思いが一方通行だと知らされるのは。

「ちよつと彩葉、マジで遅刻するから」

それなのに二人は笑ってくれた。私を責めることもなく、『家乗り込もうかと思ったよ』と笑い話にしてくれた。

「本当に……ごめんなさい」

今、ようやくわかった。今まで二人がどれほど私のことを思ってくれていたのか。カフェに連れ出してくれた時も、海に誘ってくれた時も、花火に行けと言ってくれた時も。

「彩葉。もう、いいから」

「泣かないで。大好きだよ」

一人で生きて来たつもりだった。東京に出てきて、一人の力で生きているつもりだった。馬鹿な私は、二人にどれだけ支えられていたのか今頃気付いた。

「ありがとう……芦花、真実」

馬鹿みたいに涙が溢れた。三人で抱き合って廊下で泣いた。この先の人生で、私がどんなに二人のことを大事に想っているのか伝え続けるから。ずっと友達でいてね。

……彩葉。

瞼の裏で、かぐやの笑顔が見えた気がした。

私のかぐや。ありがとう。あなたがなぜ、私のもとに現れたのかは今もわからないけれど、あなたは私を救ってくれた。あなたが私を変えてくれた。

不思議だね。かぐやとはいろんなことがあって、いっぱい怒って、いっぱい腹立って、いっぱい困らせられたけど、それでもずっと、最初から好きだった気がする。かぐやはどう？

瞼の裏のかぐやは、何も答えずに笑っている。

私、かぐやのこと忘れないよ。何年経っても何十年経っても。いつかこの笑顔が瞼の裏から消えてしまっても、絶対に忘れないから。

私、かぐやとの思い出を胸に、前に進むよ。

おとぎ話のようなかぐやとの日々が終わり、彩葉に日常が戻ってきました。

これが彩葉と、かぐや姫の物語。

めでたし、めでたし。



続・終章

「って、そんな風に終われるわけないしょっ！」

あつぶねー、終わるとこだった。幕下ろすところだった。

そんなわけないのに！ このままで終われるわけないのに！

別に嘘をついたわけじゃない。さっきの気持ちは全部本当だ。

でも、もう戻る日常なんてない。かぐやのいない日常なんて、日常じゃなくなってるんだ。

「このまま終われるかあああ！」

「うわあっ！」

ドバーンと職員室の扉を開いたら、立花先生がドバーンと椅子から跳ね上がった。そのまま先生の机に突進して提出したばかりの進路希望調査票をひったくる。

「すみません！ もうちょい悩めます」

「……ごゆっくり」

引き気味の先生に見送られ職員室を出た。そのままマンションまで走って帰る。別に走る必要など全然ないけれど、別段急ぐことなどないけれど、それでも走った。過去の自分や、逡巡^{しゆんじゆん}や、戸惑いや、恐れやためらい、その他諸々を置き去りにするように走った。

『ハッピーエンドじゃない。普通のエンドで結構です』

そんなわけない。

『これが私のエンディング！ 超楽しく運命に向かって走ってく』

そんなわけない。

『かぐやとの思い出を胸に、前に進むよ』

『そんなわけないっ！』

配信部屋に飛び込んで片付けたばかりのキーボードを引きずり出す。あとPCとヘッドホンとエナジードリンクとその他色々を持ち込んで、

「やるぞ！」

二度と人間界に戻らない勢いで扉を閉めた。

「あ、その前に」

同じ過ちは繰り返さない。芦花^{ろか}と真実^{まみ}、それからB A M B O O c a f eに連絡だ。親友にはまた数日学校を休むけど元気だから心配しないでと、バイト先には流行り病にかかって動けないからしばらく出勤できませんと、それぞれ真逆の内容のメールを送る。

返事はすぐに届いた。

『真実…りょー。明日のご飯はどうする？』

『芦花…延期でいいじゃん、姫の気が済んでからにしょ。その代わりちゃんと食べること！』

『みおちゃん…酒寄先輩、店長から聞きました。心配しないでゆっくり休んでください。今までいっぱいフォローしてもらった分、私が全部穴を埋めます！』

ありがとう、真実。芦花。みおちゃん。

「みんな、ありがとう！」

しっかりと声に出して感謝を述べ、スマートフォンに頭を下げた。そして、改めてキーボードに向き合った。キーボードを通して自分とかぐやに向かい合った。

ねえ、かぐや。私はね、あなたに言いたいことがある。絶対に伝えなくちゃいけないことがある。あなた、言ってたよね、花火の日に。

『もっともっと、彩葉いろはと歌いたかったよ』

「私だって、もっと……」

もっと歌いたかった。もっと話したかった。もっと遊んで、もっと出かけて、もっといろんな景色を見て、もっと笑い合って。

「もっと、かぐやと一緒にいたかった！」

その思いを歌にするんだ。今、どこにいるの？ 月にいるの？ 宇宙にいるの？ どこでもいいから届けてやる。思いの全てを詰め込んだ曲を。力を貸してお父さん。キーボードに指を添えた。そのタイミングを待ち構えていたように携帯電話が鳴動する。着信だ。不思議と相手が誰だか察しがついた。画面に表示されたのは、

『お母さん 着信』

迷わずに電話を取ると。

「もしも――」

「ああ、やっとではったね。根性なしが」

私の一言目も待たずに、場違いに涼しい声が耳を刺した。

「私何回電話したかね？ 甘ちゃんやから話すの怖いもんね？ 学校も連絡せずに休んでらっしゃるそうで。大層なご身分やね。一人で生きてるつもりなんか？ あんたが一つ滞らせることで、どれだけ多くの人間が迷惑をこうむるかまだわからんか？ その自分中心を改めへん限り、あんたのことを誰も評価なんかせんよ。勝手に沈んでくれたとほくそえむだけや」

止まらない止まらない。すごいな、相変わらず。耳元からスマートフォンを離してもクリアなお説教が聞こえてくる。急速に充電が減っていくかのようだ。こうやって、私に何も答えさせ

ず、矢継ぎ早に追い詰めて、ひたすらに瑕疵^{かし}を挙げ連ねる、これがお母さんのやり方だ。受け流せとお兄ちゃんは言ったけど、私には無理だ。私にだって私のやり方がある。

「……ごめんなさい」

でも、今回だけはどう考えても私が悪いので、スタートは謝罪から入ることになる。が――。

「反論を持たず謝ったらあかんで。私は謝罪されて黙るようなやわな人間やない。それともサンドバックにしてええんか？」

そんな謝罪一つで母は揺るがない。そんなことはもうわかっている。

「聞いて、お母さん」

「……ええよ。……気を付けて話しいや。あんたが今から話す内容次第で、私は不可逆な決断を下すつもりでいるから」

「……わかった」

「話してみ」

少しの沈黙の後、私は大きく息を吸った。長ったらしい前置きは無駄だと知っている。

「……私、お母さんの理想にはなられへん」

「……」

「私、ずっと頑張って来てん。お母さんと対等に話せるようになるために。お母さんとまた家族になるために。でもさ、わかったんよね。お母さんと私は違う人間なんやって。同じ気持ちでい

たいなんて、土台無理な話やった。でも……それでええ」

「……」

「お母さん、私やりたいことを見つけない。誰かに褒められるためとかじゃなくて、認められるためとかじゃなくて、本当にやりたいことを見つけない。私の人生をそのために使いたい」

「そうですか」

「だからって、応援してくれなんて言うつもりはないよ。でもせめて、それを見つけるまでの時間を……ください」

スマートフォンを握りながら頭を下げた。見えるはずないとわかっているけれど、深々と下げた。母は、長い時間黙り込むと、

「甘いんよ。あんたは昔から――」

もちろん、一ミリも揺らいではいなかった。

そこからはただの言い合いになった。スマートフォンを挟んだ直線距離二百キロメートルの言い合いの果てに、

「ええよ」

母は急にそう言った。

「やってみ。ただ、好きなことをするには責任が付きまとう。向いてたかどうかなんて最後までわからんし、最悪誰もおらんとこで一人で死ぬことになる。それを忘れたらあかんよ」

それだけを言い残して一方的に電話は切れた。脅かして怖がらせて、そんなふうにししか心配を伝えられないんだ。お母さんは。

倒れこむようにしてソファに横になった。

「……言えた」

言えた、母に。

不思議と何の感慨も湧かなかった。今までの私なら、母に認めてもらえたら天に舞い上がるほど嬉しかったはずなのに。

「そっか……」

私の中の一番が、とっくに変わってたんだ。

少し寂しくて、少し嬉しい。この感情は何なんだろうか。

頭の中の声に耳を澄ましてみたけれど、母の声はもう聞こえてこなかった。

それから、何度か月が昇った。

睡眠と食事以外の時間とエネルギーを全てキーボードに注入し、

「……できた」

それは生まれた。

苦しんで苦しんで、それでも最後はまるで月明かりに導かれたかのようにすんなりと。

「お父さん、ありがとう」

……私、ちゃんと楽しめたよ。

出来たばかりの、まだ脈動している曲を抱き上げて立ち上がった。

窓を開け、月明かりに照らされたバルコニーを裸足で踏む。風のない夜だった。見上げると左半分を闇に隠した月が私を見下ろしている。

かぐや、そこから見てるんだよね。聞いてくれるかな。あんまりうまく歌えないかもしれないけれど。一生懸命曲にしたんだ、私の全部。

かぐやから受け取った銀のブレスレット、月明かりに煌めく^{きら}かぐやの欠片を両手で包んで私は夜の空気を吸い込んだ。

「――昨日の続き――喋りたかった――くだらなくても――ちょうどよかった――本音を聞かせて――ただ叶えてみたいから――」

何度も何度も繰り返して歌い続けた。

かぐやを思いながら。かぐやとの日々を思いながら。

いつしか、歌声は一つじゃなくなっていた。

二人で歌っていた。相変わらず、曲覚えがいいね、かぐや。

かぐやと一緒に歌っていた。空耳じゃない。確かに聞こえる。かぐやの声だ。

『そんならかぐや、もう一回！』

笑っている。駆け出している。歌おう、何度でも。

私はまた歌い始めた。今度は二人で。二人……あれ？

「何、この声……？」

聞こえるはずのない、三人目の声が聞こえてきた。

何だ、これは。私とかぐやだけの世界に入り込む、三人目の声。誰の声だ、なんて思わない。

私がこの声を間違えるはずがないから。でも、どうして彼女の声が。

「――あ」

その時、夜空に星が流れた。誘われるように私の頭にも流星が走る。何個も何個も。それは無数の閃きとなり、頭の中を隅々まで照らし出す。

おかしいと思っていた。最初からずっと。

音楽を捨てたはずの私が、なぜ彼女の曲に魅かれたのか。

彼女の曲は、なぜここまで深く私の心に染み込んだのか。

彼女はなぜ、私の作った曲と同じメロディを歌っていたのか。

そしてなぜ、いつもこの先の運命を知っているかのように、静かに笑ったのか。

全ての『なぜ』が一つに収束し、

「ヤチヨ……」

私は、私の女神の名前を呼んでいた。

※

「ヤチヨは最近ドジョウ掬いすくを練習してるんだー。すっごく面白い踊りだから紹介するねー。じや、いくよ。あ、それっ♪ あ、よいしょっ♪」

ツクヨミに潜ったのは、かぐやの卒業ライブ以来だった。

往來のモニターにはいつものようにヤチヨの配信が映し出されており、何人かのアバターが立ち止まって眺めていた。笑っている人も何人かいるけれど、あれは再放送だ。ヤチヨの全てを追いかけている私にはすぐにわかる。こんなことは初めてだ。

やっぱり、ヤチヨに何かあったんだ。確かめようにも電話もメールも繋がらない。一縷いちるの望みに縋すがってツクヨミに来てみたものの、やはり、ヤチヨに会うことは……。

「——ん？」

何だ、今の。視界の端で何かが動いた。私に気付いたように逃げて行く。咄嗟に追いかけた。

「待て！ 何であんただけで」

こんなに早く動けたのか。それはちょこまかと路地を駆け回り、袋小路にたどり着いてやっと止まった。

「どこにいるか、教えて」

私は、ようやく立ち止まったFUSHIに向かって尋ねた。

いつもヤチヨの傍にいるはずのFUSHI、ヤチヨと一心同体のはずのFUSHIは、

「……」

黙ってこちらを振り返った。口を噤^{つぐ}んだままじっとこちらを見つめ返す。返事をするつもりはないようだ。なら、もう結構だ。

「自分で探すよ」

そう言い捨てて踵を返すと、

「ばかたれ」

ようやくFUSHIが口を利いた。

「どこを探すって？」

「教えてくれないなら、世界中」

答えるとFUSHIは小さな眼で私を見つめ、

「……目を開けてみる」

目を？ 一瞬言っている意味がわからなかったが、瞼を開いてみると、

「こっちだ」

何で？ FUSHIが部屋の中にいる。現実世界の私の部屋にFUSHIがいて、私を導くように走り出している。スマコンのAR機能がONになっていることにすぐに気づいた。考えている暇はない、部屋着のまま追いかけて外へ飛び出した。

FUSHIは現実世界を知り尽くしているようにすいすいと街を駆け抜けた。角を曲がって坂を下り、電車まで使って、私をとあるマンションの一室にまで導いた。

鍵は開いている。ゆっくりと扉を開くと、

「……何、ここ？」

じつとりと籠もった熱に迎えられた。

そこはサーバールームというのだろうか、大量のPCとストレージ機器と、ネットワーク機器が雑然と詰め込まれた空間だった。デタラメな散らかり方だが、どこか既視感のある散らばり方でもある。部屋のあるのは、

「水槽……？」

ぼこぼこことエアーが湧いている水槽と満たされた謎の液体、そこに沈められているのは……タケノコ。数秒考えたけれどタケノコにしか見えない。何だ、あれは。見れば見るほどタケノコだけど、見れば見るほど目が離せなくなる。知っているけど初めて見る感覚、これは——そうだ。初めて月人を見た感覚。

「これが、ヤチヨだ」

「……え？」

「ここから、ツクヨミに入れ」

F U S H I に言われるまま瞼を閉じてツクヨミに潜る。少し、時間がかかった。いつもとは違う感じ、まるで裏口からこっそりと忍び込むような感覚——。

「……」

そこは初めて見る部屋だった。

無数の灯籠とうろうが鈍く光っており、微かに聞こえる風音から相当な高層階であることがわかる。

特別で居心地が良さそうで、でも少し寂しい部屋。

誰かの私室なのだろう。多分、今日の前で背を向けて座っている、誰かの。

「……かぐや」

長い髪を床に広げた後ろ姿がかぐやに見えた。

かぐやに似ていた。でも、振り返ったのは、

「ヤチヨ」

——だった。

私は、私の中で天啓のように舞い降りた馬鹿げた推論を、ツクヨミの歌姫に投げかけた。

「ヤチヨは、かぐやなの？」

「……」

「変なことを言ってるのはわかってる。でも……」

ヤチヨは驚いたように目を丸くした後、薄く微笑んだ。

そうしてゆっくりと立ち上がる。

「今は昔——」

そして、語り始めた。いつも通りのヤチヨの話し方で。

「月に帰ってバリバリ社畜してた、えらえらかぐや姫のところに歌が届きました。それはかぐや姫のために作られたかぐや姫だけの歌」

私の歌だ。

「かぐや姫は大喜び。それでもつかい地球に行こうって、お仕事爆速ですっかり片付けて引き継ぎも完了。ただ、地球の時間では大遅刻。でも、安心。月の超テクノロジーは時間も越えられます。時を超えて、地球に向かうかぐや姫。でも、もう少しのところで、でっかい石に当たっちゃったの」

……。

「いや、やっぱりタイムトラベルともなるとさすがの超テクノロジーでも制御が激ムズだったんだよね。……舟は致命的なダメージを負って難破寸前。ヘロヘロになりながらやっとのことでたどり着いたのは、ざっと八千年も前の地球でした」

……。

「壊れた舟の僅かな力で、同行していた犬DOG Eだけが身体を得ました。たまたま近くを泳いでいたウミウシになれたのです。かぐやはウミウシを通してだけ、世界と交流を持てました」

——私は、何を聞かされているのかもよく理解できないまま、立ち尽くしていた。

「時は経ち、人は見えないものを形にし、多くの人とながる力を手に入れた。それは月の世界と少し似ていて、かぐやは初めて、魂だけの自分が世界と関われる可能性を知りました。そして、仮想世界ツクヨミの歌姫として再び彩葉と出会うことが出来たのです」

……私と？ それって——

「うん、彩葉と」

そう言くと、ヤチヨは大失敗とばかりに額を打って、

「つつつてえー、これじゃあ手放しでめでたしめでたしとはならないかゝゝ、やっぱ♪」
おちやらけたように笑った。

いつものヤチヨの笑い方で。



「……私といたかぐやは？」

尋ねるとヤチヨは少しだけ笑みを解き、

「今もまた、同じ輪廻^{りんね}を巡っている」

寂しそうにそう言ってツクヨミの月を見上げた。

「私たちはその輪から外れることはできない」

あるいは、それは自嘲^{じちよう}の顔なのかもしれない。

「……全然わかんないよ」

全く理解ができなかった。いや、したくなかった。ヤチヨは何を言っているのだろう、同じ輪廻？ そんな、そんな馬鹿な……。

ということは、私の知るかぐやは、私のかぐやは……。

「全然、わかんないよ」

今頃八千年前の地球に飛ばされてるってこと？

たった一人で？ 私の歌に誘われて、私に会うために――。

「ただのおとぎ話、あんま深く考えないで……。とにかく今は再会をお祝いしましょ☆」

冗談めかして笑いながらヤチヨは私の手を取った。それ以上考えてはいけない、そう言われたような気がした。

そのままバルコニーへと連れ出される。随分と高い所にある部屋のように、バルコニーからツクヨミの夜景が一望出来た。

「ここからの眺めがヤチヨは本当に大好きなの」

夜景を抱き締めるように両手を広げてヤチヨが言う。ツクヨミの風がじゃれつくように長い髪の毛を躍らせた。風と仲がいいのもかぐやと同じだ。

綺麗だな、その横顔に見惚れてしまう。

「どうして……？」

「ん？」

「どうして、ヤチヨはずっと笑っている？」

大それたことを、荒唐無稽ことうむけいにすぎる話を、昔話としてケラケラと話すヤチヨ。なのに私には、なぜかヤチヨが泣いているようにも見えたから。

「それがヤチヨだから」

答えを用意していたんだな、と思わせる速度だった。それは何かからの逃避であり、真実なのだろうと思った。

ヤチヨはまたツクヨミの夜景を愛おしそうに見下ろして、

「でもね……」

欄干らんかんを握む指を震わせた。

「ハッピーエンド、連れて行くって約束したのに」

指の震えは腕に伝播し、

でんぱ

「彩葉の歌を聞いて戻って来たのに」

肩に伝播し、

「ごめん、ドジっちゃった」

最後に声を震わせた。

「キラキラのかぐや姫は、もうおばあちゃんです」

それでも、ヤチヨは笑っていた。

涙一つ流さずに、笑いながら泣いていた。

「……かぐや」

かぐやはそんな顔しなかったじゃん。

長い沈黙の後、ヤチヨが恐る恐る口を開いた。

「彩葉、もし知りたくなかったなら、忘れてもいいよ。そういうこともFUSHIなら出来る」

「ヤチヨ！」

自分でも驚くほど大きな声が零れ出た。自分でも理由はわからなかった。でもすごく――悲しくて、寂しくて、腹立たしかった。

ヤチヨが目を丸くして私を見ている。踵きびすを返し、どすどすと足を踏み鳴らして部屋に戻る。突き破る勢いで板敷に腰を下ろすと、

「聞かせてよ」

「え？」

「八千年、あったこと全部聞かせてよ」

「ええ？」

「私、寝ないから！」

「……無茶言うねえ」

ヤチヨは、少しだけ若返ったように笑った。

ヤチヨが手を払うように動かすと、今までいた部屋が、私の住んでいた1Rのアパートに変わった。机の上にはお菓子とコーラが置いてあって、まるで、私とかぐやが暮らしていた時のよう。

だけでもう驚かない。先にここに踏み込んだのは私なのだから。

「んじゃ、まずは縄文人と魚とった話から。よく覚えてるのが、ナガツノだったけかな。髭がめっちゃ長い海老がマジで貴重でね。茹ゆでなくても真っ赤であれお寿司にしたかったなあ。あとオオ

ツキナマズね！ 月の夜しか捕れないでっかいナマズ！ 薪で焼くと濡れタオル絞ったみたいに脂出んの。そんでそんで――」

喋ること喋ること。丸二日ほど止まることなくぶっ続けて喋りまくり、

「おやすみなさいよ、彩葉。死んじゃう。」

私の方も当然限界だが、まだまだ、と気丈に答える。

「ネムッテ！ ネムッテ！」

「あっちゃー、ヤチヨの方が寝る時間だ。じゃ、お休みー」

F U S H I のアラームに打ち切られ、ブツツリと糸を切られたように倒れて眠った。

板敷に横たわるヤチヨに恐る恐る忍び寄る。寝息はついていないけれど、確かに瞼は閉じている。多分、寝ている。

「ヤチヨの活動限界は五十二時間だ。充電とアップデートと記憶の整理のために定期的にスリープ状態になる必要がある」

ヤチヨの身体に飛び乗ってF U S H I が言った。

「……ヤチヨってこんなにお喋りだったんだね。いつも聞いてもらえばっかりだったから、私なんにも知らなかったよ」

「ずっと、けらけら笑っちゃって」

ずしりと重い頭を振って、眠るヤチヨの横に座った。眠りながらヤチヨの顔はまだ笑っている。その髪の毛を優しく撫でた。愛でるように、労わるように。

「……笑い話ばかりじゃないはずなのに」

八千年かけて作り笑いを覚えちゃったんだね。

私みたいになっちゃったんだ。

「ねえ、F U S H I ?」

「……」

「ヤチヨが隠してること、あるよね？」

「……」

思慮深いウミウシはすぐには何も答えなかった。長い長い沈黙を挟み、

「……ヤチヨが言わなかったのなら、それは……」

「見せて。私、かぐやの全部を見なくちゃ」

「人の身体で耐えられるかわからない」

「問答無用」

そこからまた、F U S H I は黙り込む。しかし、今度の沈黙は答えに迷っているふうには見えなかった。

「ヤチヨは……さっき久しぶりに、本当に嬉しそうだったんだ」

「うん」

「行くぞお！」

ウミウシの目が赤く光った。レーザー光線のような視線にさらされるそばから、積み木を崩すようにバラバラと部屋が壊れていく。

そして、私の身体は落下を始め――

『ヤチヨ、どっかにいるんでしょ？ 出てきて……助けて……』
「かぐや！」

あつという間にかぐやの意識と同化して、八千年前の地球へと飛んだ。

※

……どこ、ここ？

気が付くと、私は誰もいない砂浜にいた。

……何で、こんなところにいるの？

確か、歌が聞こえたはずだった。

彩葉の歌が聞こえて、地球のことを全部思い出して、自分の複製を作って、それから姫と協力して舟も作って、歌いながら出発して。

……そうだ、隕石にぶつかって、装置類が誤作動して……ええい、このピーキーな時間遡行^{そこう}アルゴリズムを開発したのは誰だー！ あっ、担当かぐやだったわー、計算完璧だったのに残念無念、机上の空論、ここは奈落の底ってことかなあー！

……彩葉。

……私、失敗しちゃったみたい。

……彩葉っ！

叫ぼうとして、声が出ないことに気が付いた。

……彩葉っ！

駆け出そうとして、動けないことに気が付いた。

……彩葉あっ！

水面に映る姿を見て、身体がないことに気が付いた。

あ、これやばい。オートで『擬態』できなかったんだ。

月人は肉体を持たない思念体だ。だから、月製の舟『もと光る竹』は、着陸した星の環境を調べ上げ最適化された肉体を乗員に付与する。となると、依代^{よりしろ}を見つけないと私は幽霊みたいにな

っちゃう？ うおおん虚^{むな}しい。

機能が死んでるのか？

……『もと光る竹』、応答して。

そんな。

……『もと光る竹』、応答して。

いろんな可能性全部シミュレーションしたじゃあん、かぐやちゃん力及ばすってことッ？

……『もと光る竹』、応答して！

マジかよ。声も出せず、姿も見えず、ここから離れることもできず、自分でプログラムした最強の外殻で消えることもなく？

……彩葉。

頭を抱えることすらできなかった。

状況を理解するたびに徐々に思考がクリアになっていく。私は自分の身に起きたことを一つ一つ整理して、丁寧に現状と照らし合わせ、

……ああ、ドジっちゃったなあ。

ゆっくりと時間をかけて、絶望していった。

それから、何年の月日が過ぎただろう。

朝が来て夜が来て、ギラギラとした日差しが照り付けて、雪が降る。そんなことが何度繰り返されただろう。暑さも寒さも感じない私は、ただただ波打ち際に座っていた。存在しない膝を抱えて。

永遠とも思える時の中で、私はずっと歌っていた。頭の中で。たった一つの歌を。

……この一瞬を、最高の、パーティーにしよ。

そして、何千回目かのリフレインで、

「」

聴覚が何かを捉えた。

これは、何だ。とても頼りなくて、はかなく、懐かしい。

「」

これは声だ。人の声。

顔上げると、砂浜に男の子が立っていた。小さな子だ。耳を澄ませている。私の声が聞こえるの？

「」

男の子が後ろを振り返った。誰かに呼ばれたのか。だめ、行かないで。ここにいて、私の話を聞いて。お願い。

そんな思いがどう繋がったのだろう。私の意識はウミウシの犬DOG Eの身体に入り込み、
「待って！」

男の子がこちらを振り返る。意志の強そうなその顔は私に誰かを連想させた。言語が通じていない様子。やはりここは彩葉といた世界とは違うのだろう。遙かな未来か、あるいは過去に来てしまっている。

思念体の月人にとって、ご当地言語の解読と再現はさして難しいことではない。ただ、この身体では十分な発話はできず、意思の疎通は困難だ。私は彩葉といたころ得意だったボディランゲージですぐに男の子と仲良くなって一緒に遊んだ。毎日毎日、男の子が急に来なくなるまで。

どうしたんだろう。ウミウシの身体を引きずって会いに行くと、男の子は一人で横になっていた。顔色が悪かった。冷や汗をかいていた。彩葉が倒れちゃった時と同じだった。酷く辛そうだった。なのに、誰も看病する人がいないのはどうしてだろう。お医者さんは？ お薬は？

「――」

男の子がうわ言のように言葉を漏らした。歌ってよ、そう聞こえた。

ウミウシの身体から出る音を歌というかわからないが、精一杯歌うと少しだけ笑ってくれたように見えた。だから、私は歌い続けた。男の子が辛くなるまで、動かなくなるまで。誰もいなくなっても。

また一人になった。ここがもし、彩葉のいた世界よりもずっと昔の地球なのだとしたら、私はずっと後に再び彩葉と会えるのだろうか？ 今の右も左もわからない状況からは、とても確からしい予測には思えなかった。

ヤチヨ、どっかにいるんでしょ……八千歳だったのは嘘だったってわけ？ 助けてよ。
もちろん応答なんてない。

時は、想像してたより早く過ぎていった。

市井^{しせい}で値切られ続ける行商人も、墨^{すみ}で指を黒くしながら物語を書く文人も、恋の歌だけをひたすら詠み続ける歌人も、税と戦のことばかり考えている官吏^{かんり}も、戦のたびに旗印を変える将軍も、都を牛耳^{ぎゅうじ}る豪族たちでさえも――みんな等しく、せいぜい五十年かそこらで、ふっと画面からフェードアウトするみたいに死んでいく。

戦も、本当に多かった。人の歴史をカレンダーに色分けしたら、ほとんどのマスが火と叫びと血の赤で埋まる。

城の炎上も、海辺の小競り合いも、名もない村の略奪も、遠くから見分には同じ赤い点でしかないのに、そのたびに、誰かの子供と、誰かの恋人と、誰かの「これから」が消えていくのを、私は、ただじっと見ていた。

月での暮らしとは、あまりにも対照的だった。

あらかじめ解かれてしまった方程式の中で、誰も歳を取らず、誰も本気で争わず、誰も死なない。

完璧に設計された水も波も立たない巨大な水槽を、延々と眺め続けているような感覚。だから私は、一回きりの「終わり」というものを受け入れるのに、ひどく時間がかかった。

季節の移ろいを肌で感じることも、涙を流すことも、みんなの運命を変えることもできないまま。

ただこの小さな柔らかい身体で潮に揺られながら、人間たちが生まれては死んでいくのを何千年も見送り続けた。

好きになった人もたくさんいた。私に恋した歌人、空襲で焼け跡になった街で花を売り続けた少女、二人三脚で太夫たゆうを目指した花魁おいらん。命を賭して生きる人たちの覚悟を、私は必ず愛してしまったから。

助けられなかった人々を思い出す度、内側に引っかけ傷ができて消えなくなる。

私がうまく伝えられていたら。どうにか導ければ。

あー、あの頃は、嫌なことがあったって、すぐに忘れられたのに。

何でもできる最強だったかぐやは、もういなくなってしまった。

……彩葉いろは、弱い自分から逃げられないことって、一番恐ろしいことなんだね。あなたの目の奥にある彩いろの意味、今はわかる気がする。

人は戦争と共にどんどん科学技術を発展させていった。電話、冷蔵庫、ラジオ、ブラウン管。そしてついにワールドワイドウェブを作り出した。

ウミウシの身体でたとえどしくHello, world! とチャットの入力ボックスに入れて送信してみる。すぐにHello, you. と返ってくる。衝撃だった。

私は、彩葉と共に過ごした、あの仮想の世界のことすらぼんやり朧げになりはじめていたから。

……あの天才のかぐやちゃんも、月のインフラがなければこの程度のもものも作れないんだなあ。

ま、いいや。ウミウシの身体を^{よじ}掘ってプログラムを打つ。htmlを書く。アクセス解析もする。

さらに技術が進歩し『もと光る竹』を直接ネットにつなぐことができれば、この身体の制約を超えてみんなに、多くの人と話せるかもしれない。

私は、薄くなっていた記憶が確かな形をもって再構成されだすのを不思議な気持ちで感じていた。

そうだ、いつか仮想世界の大きな広場を作りたい、みんなが好きなことをして、殺し合うこともなく、誰も孤独にならず、いつでも返事をもらえる場所。

そうだ、名前は——ハツとした。

……バカだったなあ。何で今まで気付かなかったんだろう。——私が、ヤチヨになるんだ。この世界はきっと何度も、これを繰り返していたんだ。

それと同時に、自分が必ず彩葉と再会できることを、確信した。ほんの、あと何十年の間に。ウミウシのちっぽけな心臓が高鳴った。

でも彩葉。私は、元のかぐやではなくってしまった。冗談を言うことも減った。再会を願っても、もはやその形は月で夢見たような華やかなものではない気がして。

……それでもこの歌が、約束が、思いが、私をあの場所まで連れて行く。

バーで知り合ったその男は、ウミウシの私の最後の友人になった。たどたどしい発話をしっかり解読するばかりか、自分がCIA職員であることを明け透けに言っていたのけた。私には今、協力者が必要である。彩葉との再会のために。

笑われるのを覚悟で素性を打ち明けると、「そうだと思ってた」と癖のある笑顔で返される。

作戦を練り上げ、入念に準備を重ねて彼に頼み込んだ。「正倉院に保管されている『もと光る竹』を盗み出してくれ」と。彼はやはり真顔で頷くだけだった。彼には彼の仕事があっただろうに、たぐいまれなる親切心か、単なる好事家こうずかか。

「一緒に来ないか」

全てが終わった後、彼は空港で私に言った。『もと光る竹』を人質に、私を無理矢理連れて帰ることもできただろうに、

「約束があるの」、そう答えた私を残して、彼は一人母国へ飛んだ。

「極上のワインは時間が経つほど深まる。悪いことばかりじゃないさ」

その言葉と、彼の誤魔化すときに片方の口角を上げる笑い方が私の中にずっと残った。

――さあ、準備は整った。仮想空間ツクヨミのプロトを作り上げた私はローンチと同時に単独ライブを敢行する。曲はもちろん、いつも歌い続けていたあの曲。八千年の間に形を変えて何度も変奏した、彩葉たちと一緒に戦ったあの時の曲。

初めてのライブは、記憶の中のヤチヨのライブとは比較にならないほど人が少なかったけど、底抜けに楽しかった。八千年ぶりに歌えることが嬉しくてたまらなかった。

それから何度もライブを開いた。飽きることもなかった。今日、あの子が来てくれるかも、そう思うとライブはいつだってヒリヒリだった。

毎回、お客さんの中にあの子を探した。あの初期アバターの女の子がそうかもしれない。最初はお兄ちゃんのアカウントでログインしてるかもしれない。友達のアバターを借りてるかも。もしかして、あの猫が？

いつもいつも、群衆の中にあの子を見つけて歌っていた。

そうやって、ついにその日はやって来る。

——彩葉。

きっと泣くんだろうな。そう思っていたけれど、私は最後まで笑って歌っていた。……そうか、だからヤチヨはいつもあんなに楽しそうに、笑ってたんだ。

※

「彩葉、彩葉」

頭の外から声が聞こえた。私の声だ。私の声があの子の名前を呼んでいる。

「彩葉！」

ああ、違う。この声は私じゃない。

瞼を開くと目の前にヤチヨがいた。

「ヤチヨ……」

「馬鹿……壊れちゃうよ……」

今にも泣きそうなヤチヨの顔があった。

こんなこと前もあったな。無理をする私の身を案じて、泣いていたかぐや。八千年経っても同じことしちゃったね。

「……かぐや」

ヤチヨを抱き締めた。

二人を抱き締めずにはいられなかった。

「ごめんね、ずっと気付いてあげられなくて」

「彩葉」

「ずっと待っていてくれたのに。ずっと探してくれてたのに」

「……彩葉」

「ごめんね」

八千年、ずっと泣きたかったんだよね。

「やっと追いついた」

大好きなかぐや。私のかぐや。長い長い時間をかけてヤチヨになっていったんだね。

気の遠くなるような孤独と絶望を共にして、数え切れない出会いと同じ数の別れを繰り返して、その優しい笑顔を覚えていったんだね。

「追いついたのは、私の方……」

耳元でヤチヨが囁いた。

「ねえ、彩葉。彩葉の顔がとても綺麗でさ。私、すぐ好きになったんだ」
かぐやのような声で囁いた。

「強くて凜としてちよっぴり悲しい、綺麗な顔。でも、彩葉も少しずつ彩葉になっていったんだね。辛いことがあって、その度に一つずつ強くなって、彩葉になったんだよね。それを知るのに八千年もかかった」

「ヤチヨ……」

抱き締めていたかぐやの身体を離した。正面からヤチヨの顔が見たくなった。

「私、成長したよ？ お母さんとだって話せたし、かぐやがいなくなたって、十分ハッピーエンド……お話は、もう終わり」

ヤチヨの中にかぐやがいた。かぐやを収めたヤチヨがいた。

そんな顔を見ていると、

「かぐやといたい……」

生まれて初めて、心の底からの願望を口にしていた。

生まれて初めて、自分の本当の気持ちに気が付いた。

「彩葉……」

ヤチヨが泣いていた。強くて凜としてちよっぴり悲しい女神の頬を伝う、八千年分の涙だった。

「……もうこれで、終わってもいいって思ってたのに」

『——この一瞬を最高の——パーティーにしよ——』

ヤチヨが歌う。

「いつも思い出してた」

『大切なメロディは——流れてるよ——あなたの——ハートに——』

私も歌う。

「この曲で、生き残れた」

ヤチヨと私、二人同時に手を上げる。

かぐやと彩葉のハンドサイン。仲良しのやつ。

これがある限り、何千年経ったって私たちはずっと一緒だ。

ヤチヨは、そのまま私の手を取った。そして、少し寂しそうに言う。

「触れたら、あったかくなってるいつも思うんだ」

……私は、いつもヤチヨから温もりをもらってた。

「また、彩葉と一緒にパンケーキ、食べたいな」

でも、ヤチヨはずっと――

その瞬間、何かが私の中を突き抜けた。

そして、全てを理解した。

わかった、まだなんだ。このお話にはまだ続きがある。

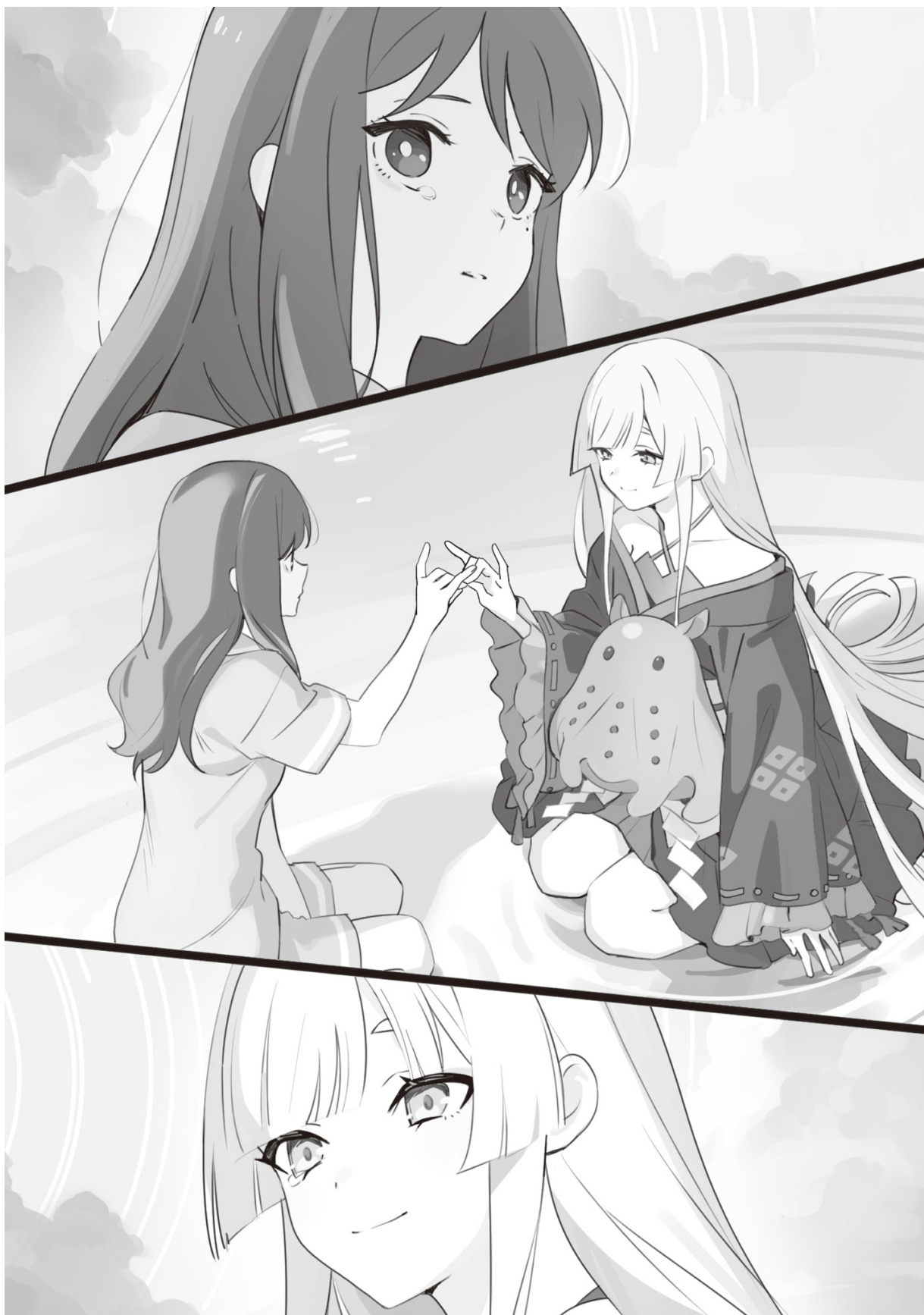
「私やりたいことができた！」

そう言って、私は立ち上がった。全身の細胞が一斉に目覚めたような力を感じる。なんだろう、このエネルギーは。こうやって、ただ立っていることがじれったい。今すぐにでも駆け出したい。

「本当のハッピーエンドまで付き合ってよね！」

宣言すると、ヤチヨは呆けたように私の顔を見上げた。

もしかすると、かぐやの無茶を聞いた時の私もこんな顔をしていたのかもしれない。





新・終章

「正月にお祖父ちゃんお祖母ちゃんとこみんなで行ったやろ。私と二人きりになった時にさあ、
「足掬われんようにな」って言われて」

静かな研究室の中、私は兄との通話中だ。

「私もうええ歳やのに、まだそんなこと言わはるん!? て。びびったわー」

「まああん人は死ぬまでそんな感じやろ。俺もこないだ久々にメール来たから『おーっす!』て返しといてん」

「もしかして乃依くんとのこと?」

「せや。未だに孫なし確定なん嫌みたいやわ」

「なんやそれ」

私たちは声を上げて笑い合って、待ち合わせについての確認をしてから通話を切った。あれから十年。研究者となった私はあれよあれよと気づけば所長の肩書きまで得てしまった。私が自立

したと看^み做^なしたのか母からの長文お説教メールや無遠慮な連続着信電話も鳴りを潜め、あるのはたまに会った時のお小言くらいだ。

ブラックオニキスは今も変わらず活躍中だ。お兄ちゃんは乃依くと暮^らしてる。雷^{らい}さんはいろんな国を見てみたいって、オフになるとずっと旅行してるみたい。芦^ろ花^かは人気インフルエンサーになって、今ではブランドのアンバサダーとして街中の広告に映る存在だ。真^ま実^みは大学を卒業すると高校の頃から付き合ってた彼氏と結婚して双子のお母さんになった。みんな色々大変なことはあるけれど、近況を聞けばいつも楽しそうで、心の底から嬉しく思う。

「なーにニヤニヤしてるの？ いいことあった？」

立てかけていたタブレットにヤチヨの顔が大笑しになった。どうやら、生配信が終わったようだ。

「いらっしやい、時間ピッタリだね」

「もっちゃん☆ あれ？ みんなは？」

まるで覗き窓から眺めるように、画面の中からこちらの様子を窺うヤチヨ。みんなというのはこのラボに所属している職員たちのことだ。

「ちょっと早いけど昼ご飯に行ってもらってる。今日は長丁場になりそうだから、ちゃんと休んでもらわないとね」

「さすが、業界異例のホワイト研究所」

「ま、私もその分休ませてもらってます」

「……今日、長くなるの？」

「多分ね」

「いよいよ？」

「うん」

二人でベッドに横たわるアバターボディを眺めた。急ピッチで作り上げた試作品第一号『かぐや』。今日が、初の起動実験の日である。

「十年間お待たせしました」

ベッドに横たわるかぐやを見つめながらヤチヨに言う。

「八千年に比べればあっという間だよ」

「……でも、私はヤチヨのこと、もう待たせたくないから。

「彩葉、ドキドキしてる？」

「ううん。試作品の第一号なんて失敗前提だから。どこが上手くいってないかを知るための工程！　って感じ。爆速で修正してもっともっとできることも増やさないとだし」

「そっか」

ヤチヨはしばし黙り込むと、

「ありがとう、彩葉。かぐやを産んでくれて」

珍しく真面目な口調でそう言った。

「まるでおとぎ話みた〜い。竹の中からかぐや姫を見つけた翁おきなは、十年後本当にかぐやを産み出してしまいましたとさ☆」

「あーっ、それ！ 言っとくけど、十年前に私のことお爺さん呼ばわりしたことまだ忘れてないからね」

「ヤチヨは八千年前だから忘れちゃったよ〜」

ケタケタと笑い合う声が、研究室に満ち満ちた装置の駆動音に混ざった。そんなはずはないけれど、ベッドの上のかぐやまで笑っているかのようだった。

「……ヤチヨのおかげでここまで来れた」

「ヤチヨだって。彩葉のこと追いかけて、ここまで来ちゃった」

「二人して追っかけあってさあ、ふふ……」

そう言い残して空になったコーヒークップを流しに運んだ。軽くゆすいでいると、水音をかき分けてヤチヨの鼻歌が聞こえてくる。そこまで綺麗に洗うつもりはなかったけれど、もう少しだけ歌を聞いていたいからスポンジに洗剤をさした。

「——大切なメロディは——流れてるよ——あなたのハートに——」

何て澄んだ歌声なんだろう。私の心に寄り添って全ての不安を取り除いてくれる。まるで波の音のように、心臓の脈打つ音のように。

優しくて、温かくて、安心できるヤチヨの歌声。

それは多分、私が母に求めたもの。母への依存を断ち切った今ならわかる、私にとってヤチヨは――。

「ありがとう、今度は私の番だからね」
誰にも聞こえない声でそう言った。

直後にインターホンが鳴る。

「あ、ラボのみんなが帰ってきたかな？」

「さあ、どうだろう？」

果たして、ヤチヨの予想を裏切ってイヤホンモニターに映ったのは、

「彩葉ー、来たよ！」

ますます綺麗になった芦花。

「やっほ」

ずっと変わらない、朗らかな真実。

「よっ」

私の、お兄ちゃん。

「暑い。早くもてなして〜」

マイペースな乃依くん。

「……」

無言で手を挙げて挨拶してくれる雷さん。

久しぶりに集合した賑やかな面々。

「ええ！ みんな来てくれたんだー☆ 彩葉が呼んだの？」

「まあね。額の多い少ないはあるけどみんな出資者だから。初お披露目に招待しないわけにはいかないでしょ」

なーんて。

本当はかぐやの初めての誕生日を、みんなに祝ってほしかっただけ。

「みんな、入って」

ロックを解除すると、さっそく廊下からガヤガヤと騒がしい声が聞こえてくる。私は深く息を吐き出してタブレットに映るヤチヨを振り返った。

「ねえ、ヤチヨ。本当のこと言っている？」

「なんだいなんだい？」

「本当はさ、ドッキドキで叫び出しそう！」

「ヤツチヨも〜！ 本当は待ち遠しくて堪らなかった！」

また二人の笑い声が研究室に響いた。

めでたしめでたしまで、あとちよつと。

E
N
D

あとがき

ここまで読んでいただいてありがとうございます、著者の桐山きりやまなるとです。今回は久しぶりのノベライズ企画ということでしたが、いかがだったでしょうか。

個人的にはとても新鮮で刺激的でありながらどこか懐かしい思いもあり、とても楽しくお仕事をできました。

小説というのは孤独な作業です。もちろん、担当編集者や編集部の方々からたくさん手厚いサポートがいただけますが、執筆中はどうしても孤独感がぬぐえません。最初に担当さんと話し合っこっして骨子を作ってから、一人でお話を書き上げ、そこからまた修正をもらって一人で直すというのが基本的な流れとなります。

しかし、今回は編集部の方々だけでなく山下清悟監督をはじめとした様々なアニメスタッフの方々から具体的な提案とアドバイスをもらいながら皆で作り上げていくというスタイルで、それがどこか昔携わっていた舞台演劇を思わせるところがあり、チームで作る感覚が懐かしくて、ワクワクしながら仕事を進めることができました。他分野のプロフェッショナルの方々の意見は目から鱗うろこの連続で、こんなに楽しいお仕事は近年なかったかもしれません。ノベライズを任せていただいたアニメスタッフの方々と、ファミ通文庫編集部の方々にはこの場でお礼を申し上げます、本当にありがとうございました。またやってみたいなと思える楽しい企画でした。

さて、今回の作品は言うまでもなく『かぐや姫』がテーマの作品です。いきなりですが、読者の皆様は宇宙人というものをご覧になったことはあるでしょうか？ 残念ながら私はないのですが、身近に目撃したという人物を知っています。姉です。かなり昔の話になりますが、中学生時代に見たことがあると豪語していました。しかも、真っ昼間の河川敷に。

すごいですよね。「夜中にUFOらしき光が、空の端をチラツと！」くらいの目撃談なら、「それ何かの見間違いだろ」で済んじゃう話ですが、昼間の地上に宇宙人そのものをガッツリ見たと言われると信じないわけにはいきません。見た目は地球人よりかなり小さく、顔は後ろ姿から見えなかったとのこと。服は何も着ておらず、うっすらと光っており、集団ではなく一体だけで、川下から川上に向かってゆっくりと河川敷をジョギングしていたそうです。

それ何かの見間違いだろ、と喉元まで出かかりましたが言いませんでした。怒られるんで。皆様の中で昼間にジョギングをしている宇宙人を見かけたことがあるという方は是非ともお知らせください。

さて、そろそろページも少なくなってきました。ここまで読んでいただいております。またどこかで私の話を聞いてください。それでは、ご機嫌よう。



許諾番号：ID000011479

楽曲名：Remember

月見ヤチヨ（CV早見沙織）

歌詞：真崎エリカ

作曲・編曲：yuigot

ピアノ編曲：是

楽曲名：Reply

かぐや（CV夏吉ゆうこ）

作詞：真崎エリカ

作曲・編曲：kz(livetune)

ちょう ひめ
超かぐや姫！

著者 きりやま 桐山なると

原作 スタジオクロマト・スタジオコロリド

ファミ通文庫

2026年1月30日 発行

ver.001

©Colorido Twinengine Partners

©Naruto Kiriyama 2026

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ファミ通文庫『超かぐや姫！』

2026年1月30日 初版発行

発行者 山下直久

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

<https://www.kadokawa.co.jp/>

（「お問い合わせ」へお進みください）

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only

デザイン 寺田鷹樹（GROFAL）

本電子書籍の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本電子書籍の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本電子書籍購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本電子書籍を第三者に譲渡することはできません。

本電子書籍の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。



BOOK★WALKER